

鬼、畜生、修羅をすみかとして、めぐる事のかなしきよ。今はひたすら佛道を學ばんと
 思ふとて、手にむかひなみだをながしてたつぬるを、いそめはれに思ひ、宗旨をさへば
 禪と答へ、若年より此道志深しと云ふ。予大道をさへばなかり、念佛唱へ數珠のまぐり
 いそめやしくて、いかやうの人に法をたつね玉ふと云へば、古は法門なきならししが、
 十五六年此方は、いやう、法門いひても只今身まかり、行末しちぬはたなるあやまると
 思ひ、ある僧にむかひなてまつり、死して行末をたづねしに、悟りて知る事なり。悟らんと
 思はれ、身の業つくすべし。業つくさんと思はれ、經よみ念佛をなへよと、仰せにま
 かせつとむるといふ。予云ふ、唯今死して何方へ行き、いかやうにならんと思ひ玉ふ
 ととへば、極樂へ行き佛にならんと答ふ。極樂はいつくどとへば、業つきて現はれん
 と、をしへにまかせ、かやうくと答ふ。予またとふ、業つきのまに死しては、なに
 となるへまど、へば、こたへなきしてなみだながし、手をあはせ、教へ玉へと云ふ。あ
 はれにおもひてうちむかひ、萬事はみな心のなす事なり。かれさなむと云ふ。心の本は
 なにかあるとどかへば、何もなしと答ふ。予云ふ、それこそ直に極樂世界、それこそ直
 に佛、それこそ我宗の悟なり。常に守り給へといへば、さすがつねく心かけしるし

はや、生もなし、死もなし、萬物一もなしと思ふ事もなしと悦び、手を合せておが
 む。禪は第一悟をさへばして、悟にまかせ修行すれば、日く夜く安樂なり。うたが
 ふ事なけれ。身の業つきはささるとは、尤にしていたりがたし。よとりのまにじて身
 の業つくすは、安んじて安し。がるが故に日本は身を思ふ事かゝるし。さて佛にちかし、
 身なければ直にはどけなる故也。

一、ある法師の弟子、夜ひる坐禪して人我のへたぞなし、生死もなしといふ。さとりをど
 へばなかりおそれて、われどさの及ぶ所にあらすといふ。かりにも師は大事なり。
 ことに佛道師なくしてなりがたし。坐禪常とちがふ事をぐるしむ。只今目前は何のへた
 てがありといへども懸なり。味噌のみとくささは食にいひなり。

一、予弟子にむかひて、かならず修行どげがたくは還俗せよ、其罪は少し。法師の身とし
 ていやしき心あらば、畜生となる事うたかひなし。此世はあづかのうちなり、とてもか
 くても、光陰おくるにはやし。俗はむくひありとても、出家のむくひにくらべんや。
 一、無事らふに二つあり、悪をしてどがなしと見るはあしし。善悪邪正よりつかぬは釋迦
 の法なり。

一、念佛はりけんなり、身の業去るによし。かならず佛になると思ふべからず。佛にはならぬが佛なり。

身の業のつきはてぬれば何もなしかりにはどけといふばかりなり

一、八万四千の悪業あるは身なり。水火のせめにあふなり。これと思ふはおそろしきなり。

一、つみのおもさかるさあり。

虫より魚はおもし。魚より鳥はおもし。鳥よりけだものはおもし。はだものより人はおもし。

一、教は大きにあやまる。それを習ふはなほあやまる。只直に見、直にきけ。直に見るはみるものなし、直にきくは聞くものなし。

見ずきかすおもはずしらぬおもひてをなにぞとおのかほかになすらむ

一、伊勢の國に二代坐禪して死せり。其身のためにはたふとし。かつは其身坐して死せば可なり。痛苦をうけはおぼつかなし。わが師は一座の坐禪は、一世の坐禪との給ふ。ありがたし。

一、ある人、釋氏のおとろへし事をとふ。予云はく、なか／＼詞にのべがたし。かしらをおろせば、われも出家の二字をけがす。おそろしき事なり。常の家を出で、三衣一鉢にして、樹下石上の住居するさへ、眞の出家といひがたし。眞の出家にのぞみふかくば、我が身は八万四千の悪あるものなり、其中に大將どかしづくは、色欲、利欲、生死、嫉妬、名利、此五つ也。よのつねにして退治しかたし。晝夜悟を以て一々に身の悪をはらばし、清淨になるべし、悟といふは本心なり。ものゝ是非邪正を能く知り、邪を去り、正をたもつてふかく護り、常に坐禪して如來をたすけ、工夫して悪をさり、年月功つもつてかならず心安くなるべし。いよくおこたらずつとむるに及んで、五欲をはらばし、悟成就して地獄、餓鬼、畜生、修羅の苦をはなれ、平常を守り、其功つもり、後にはなにもなくなり、万法にまかせてどがなし。つとめてこゝにいたり、世間の人をすゝめ、上根機の人には、直に目前を以てをしへ、中根機の人には、方便を以て坐禪させ、下根機の人には、念佛を以て後世をねがはせ、かくのごとく人をたすくると。眞の出家といふなり。厭にしてなりがたし。

一、子がわかきとき、ある侍のつかひし童子、われにむかひ、わが主にことわり、弟子に

してたべとたのむ。やどしくいへるもあまひ、なにぞてかくばあまふとてへば、出家は世むたるにたのしからんといへる一言におゆるき、此童子此心にて法師にならば、かならず善生となるべし。初發心より佛法二筋に必ざしめるは、はや菩薩の行なり。かりにも世むたりに心かけしは、ちくしやうになる事うたがひなし。

一、ある人にしめしていはく、佛法今世とりみだし、外に佛をもとむ。たとへば妙は元來無一物、法は妙のうごく所なり。法にあらざれば妙あらはれず。故に妙法とつづく。法の是非につけて、其人をしる。見性して行住坐臥、性にまかせて、身をつかふとき、佛法と云へり。

一、見性する事かたしといふ。かたきにあらず、安にあらず、万物のよりつく所にあらず。是非に應じて、是非をはなれ、煩惱に住じて、煩惱をはなれ、死して死せず、生して生せず、見と見ず、聞きて聞かず、うごきてうごかず、ものをもとめてもとめず、とがをうけてうけず、因果におちておちらず、凡夫は及ばず、菩薩も行じがたし。故に佛と云ふなり。

一、迷ひては此身につかはれ、さとりては此身をつかふ。

一、はどけのをしへば、何の事もなきを、人の心の愚さよ。世の人名にまよはぬはなし。色に迷ひ、實に迷ふは、ことわりなれども、それさへあだなる物としらば、さのみはさかひあらん。はどけをねがふ心にひかれて、後はなにとかならん。おぼつかなし。

名にまよふらさ世の中の大たわけわが名もしらぬものとされかし
一、おのれを以て人を見るものなり。愚人の見るは、おそろし。おのれに利欲あれば、人をも其心を以て見るなり。色ふかさは、色を以て見るなり。聖賢の人にあらざれば、見る事あやふし。大道人ありても、みしる人まれなり、いたづらにすたれり。かしてき人は、おのれにあはぬをも、其人のしなをわけて、其人の心得をつかふ、その人すたらず。かりにもものよ大將たらん人心得あるべし。

一、ものをよせつけぬ事はやすし、ものよよりつかぬ事はなりがたし。
一、たとへば火はものをこがす、水はものをうるほす。火は物をこがすと、其火はしらす。水は物をうるほすと、其水はしらす。はどけはじひしてじひをしらす。
一、念のふかさはちくしやう、念のうすきは人、念のなきははどけ。
一、人はおろかなるものかな。法師のをしへて、念佛となへよ、はどけになるといへば、

尤もと請けて、念佛となへし人のみありて、そのほどこけはいかやうなるものぞとふ人なし。

一、おのれがさほうみだるととき、天よりかならずばちをうくるなり。天下の主は、天下即家也。國の主は、國即家也。大小によらず、家の中の悪事は、あるじのどが也。治むる事ならねば、天災をうくる也。

一、清淨心はこぼれるものなり。清淨もなくなりし處は、われならではしらぬなり。我がしるうちは悪し、しらぬ所のしらぬにあり。

一、さとりは念を滅却するを云ふ。念を以て身をなす。さどればいきながら身なし。

一、大道に入る人、たしかなる師にあはず、いろをくるしみ、實をこのむをくるしみ。大さなるあやまりなり。大道を心がけん人は、万法のあくはみな身のなすむととして、天外地外、古今未來へだてなきものあり。これをよくしりてその一をまれば、おのづから身の業つまで、清淨になる事うたがひなし。

一、人と生れては、佛道つとむべし。外にあらす。その人に應してよきは、みなその身の佛のするわざなり。

一、ある人、大乘をとふ。予いはく、身をたゞしくして守る事なきを、大乘と云ふ。

一、最上乘をとふ。予いはく、身をほしきまゝにして、守る事なきをいふ。故に大事なり。かるがゆるに世にまれなるものなり。

一、予が弟子いろくに工夫とて、むづかしき事をこのむぞや。平常はみな佛、直に見、直に聞く。臨濟禪師は、聽法無依の道人有り、無依をさどれば、ほどこけも又無得との給へり。六祖大師は、應無所住而生其心を開召して、さとりをひらきたまへり。

一、世の末になるといふ事、知る人まれなり。

釋迦如來の法、二千六百年餘になり、日本にわたりて、千年に及んで、ことごとくすたるにつけて、慥にしれり。万物のすたる本は我智なり。智あるもの大かた信すくなし。万事の本は信なり。信のすたるもとは智なり。此智より何のみちもすたれり。是れを世の末といふなり。大道はつとめてつとめぬ所にいたるはつよし。大かた師の道をわがものにしてつとむるものまれなり。

一、大道行人はなにをもよく心得んといへり。予いはく、万法のもとなり。そのもどをしりて、わが家の法をたつる事なり。法師はほどこけのほかは心得ぬものなりといへども、

愚痴なる人は、聞得る事なし。たとへば侍の道、我家への事なれども、もまたはしる事かたかるへしと雖も聞えぬ、あたまし。

一、つねに逢ふ事ならぬ女に、法語を書きてやる。

一、人は家を作りて居す。佛は人の身をやとす。家のうちには亭主つねに居所あり、はどけは人の心にすむなり。

一、じひにものごとやばらかなれば、心明なり。心明なれば、はどけあらはるゝなり。

一、心を明にせんとおもはば、坐禪して如来にちかづくべし。

一、工夫してわが身のあくを如来にさらせよ、かくのごとくつとむる事たしかなれば、佛になることうたがひなし。

年月日を書てもくる

一、物にむくする時あるべし。たとへば、さるものあり、さるべきならぬ、世わたる時、文書にむろこのし事も書きのことす事なし。さるものむくするなり。佛道も修行する人、身のあくを去るうちにはくしければ、去りつくしてはどけになりて後ば、何事もくるしみなし。又慈悲も同じ事也。じひするうちには、じひに心あり。じひにむくするど

き、じひをしらす。じひしてじひしらすぬを、佛道なり。

むひはみなほつこのなせるものなれば身のあはれのちかてあるなり

一、此道にあたる事つよきあり、よきあり、予わかきとつよくあたり。ある時孔子のことばを見るに、天下國家をもじたいすべし、しやくらくをもじたいすべし、やははをもよみおとすべし、大てきをもかたよくべし、中庸は用ひがたしと云へり。我思ふにまことなるかな、大道あたりよはくしては、我身のあくを何として去りつくすべきや。

一、大さにはのしんして、山にいらんをおもへる人にはく、ありがたき御心さしなり。おこたりたまふな。たとへ山のおくなればとて、さき世のはかならず。まどの心をはなれすは、住所かへたるばかりにて侍らんとはいひてよめる。

心よりはかに入るべき山もなししらすぬ所をかくれかにして

一、ある友にいさなはれて、黒谷を過ぎ、清水のかたへおもむきしに、ひだりにはそき道あり、行てみればかさまばらなるに、柴の戸ほそをおしひらきて、みればおぐにあられたるおかのあたりは、ちりにうまれ、すたれにむくらしがり、あまひのけむりたえとて、あかたなかつたき、かうはなをたむくるにもあらず、佛とおぼしめて、御手のしもかけ

そんじ、それとも見わかず、佛となふる聲うちしはがれ、よはひ五十にもやままり侍ら
ん、けだかくいにしへよしある人のなれるはてとおぼしきが、ひとり居て、いづくより
とどひしに、このあたり過ぎかてに、おかしく思ひ、此草庵にたづねきたるも縁ふかき
なるべし、いろ／＼ものがたりなせし、いにしへ今の人のうへ、よしむしにつけて、と
さまかうさまにはびるもそしるも、どもに世にどいまらず、つゐのわかれをなげきて、
みだのなをとなへ、おふべのかねを聞て、けふもいのちつれなくいけるよとおもひける
とかたりければ、ふとあはれもよほされて、

世中をおもひはなれてきくときはいりむひのかねははまのまつかせ

一、人ばかりかしてからぬものはあらじ。行住坐臥、くるしみかなしみ、むかしを忍び、
しらぬ行末をなげき、ねたみそねみ、おのれを立てるの思ふ、かなしみながら世にから
めらるゝ、此世一生はどやかくと過ぎぬべし。來々世々生をかへく／＼くるしめども、
捨る事ならず、まことにまよひのふかきなり。

ぢごくかざちくしやうしゆらば世中のほんぶのつねのすみかなりけり

一、佛の教のそのまゝすなはなるをうけて、ぢきに万物を放下して、如々の体になりて、

大安樂をうくる事更に別にあらす、身をおもふとおもはぬとの二つ也。此をしへを實に
とおもふ人はあれども、つとめて我が物にする人かたし。

本來のものとなりたるしにはをかす事なき身のとかとしれ

一、出家は内外打成一片とて、かたちのすくやかなるをいふなり。ひつきやう死人のいき
かへるでどくなるを云ふ。死人は物をはしがらず、人にこひせず、人をさらはず、大道
成就して、人の是非を能く知りその人をすゝめ、佛道にいたらすをいふなり。

一、世中の人のならひとして、ゆなれぬ物をねがふ。大道つとめて平常無事なる人、その
道く／＼よろしく、すなはなるをさらふ。

一、ある人平常大道つとめやうをどふにいはいく、凡夫即佛、はどけとほんふと元一体なり。
しるを以て凡夫、しらざるを以てはどけと云ふ也。

おめをどふ人に

ねてもおめおきても夢の世中をおめとしらねはおめはさめけり

あまた人をつかふに

心得し道につかへはつかふ人のあやまる事はつねになきなり

ものゝふの道たしなむ人に

さきしにそのかれはてすはものゝふのみちもかならずあやまるをしれ

とせしをくるしむ人に

世中はよくへのしりになますのをおすかどくにわたるべらなり

佛道ありかたしといふ人に

ものことに心とむなとどくのりの法にこゝろをどむる人かな

しめて佛をねかふ人に

なかなまにむびぢこくへはおつるをも佛にならんとすらにおもふな

大道のをもとをよふ人に

おもはねはおもはぬ物もなかりけりおもへはおもふものとなりけり

大道開得て行はぬ人に

とく法に心のはなはひらけどもそのみとなれる人はまれなり

じゆしやに

主に忠おやには孝をなすものとしらてすることまこととなりけれ

直に見直にさく事を

主なくして見聞覚知する人をいさほとけとはこれをいふなり

修行におもむく人に

身のとかをおのが心にしられてはつみのむくひをいかでのかれん

さとりはならぬといふ人に

さとりねば佛の縁はさるゝなり一さいさやうはよみつくすとも

念佛行者に

となへねばほとけもわれもなかりけりそれこそそれよなむあみた佛

ある人、佛をねかひ、ねて夢に見るも、起きても、佛のあたりにおる心地する

といふ人に

おもふまゝになせばなりぬる心にて後世ねかふ人そはかなき

こくらくをねがふ人に

こくらくの玉のうでなははかになしいきながら身のなさをしるべし

法をとく法師に

ころせしむか身をころしはてなにもなきとき人のしとなれ

道ぞをしへて

てくるはうをまはすは人のまはすなり人をまはすは一物もなし

坐禪の大事

せぬとき坐禪を人のしるならばなにかほとけのみちへだつらん

心

佛神また天道となをかへてたなにもなき心をいふ

なにもなき心をつねたまもる人はみのわさはひはきえはつるなり

念佛行者に

佛とは何はかやつかいひそめてなもなきものにまよひこそすれ

あまりによくふかき人に

ぼんぶめらあまりにもものなほしかりぞわか身さへわかものとならぬとよ

法師に

衣をばこくうになりてきればさる坊主のさるはばちうくるなり

佛道にちるをきらふ事

人のうへわか身につけていろくのあしきに出るちるをしるべし

臨濟のうへに

おのれめか破戒の比丘となる事は佛祖をころすむくひなりけり

後世ねかふ人に

死て後を佛と人やおもふらんいきなかななき身をしらすして

りんざいのの給ひし聞物を

耳も聞かす心もさかす身も聞かす聞くもの、聞くをそれと知るべし

まよひふかき人に

おのか身にばかざるをばしらすしてまつねたぬきをおそれぬるかな

草木國土悉皆成佛

草木も國土もさらになかりけりほとけといふもなほなかりけり

つみをくるしむ人に

思ふまじにこのみにつみをつくらせてさこくの中へつみおとす入し

出山の釋迦のうへに

ひたすらに身は死にはてゝいさ残るものをほとけと名はつけにけり
しちて法をどく法師に

おのが身のどがをもしちてどく法を聞き得る人もおなしちくしやう

後は人の師とならん人に

無一物になりぬるときは何事もどかにならぬを見るそかなしき

心のおにをとふ人に

世中の人はしらぬにどかあればわかみをせむるわかこゝろかな

われなればこそとひひすると思ひし人に

つねくゝに心にかけてするとはひはじひのむくひをうけてくるしむ

ある法師に

さとりても身より心をしばりなわとけざるうちはぼんふなりけり

大法のかたきを

世中の人のかたきはほかになしおもふわか身はわかかたきなり

物をくるしむ人に

何事も修行とおもひする人は身のくるしみはさえはつるなり

道をしへけるに

道といふことはにまよふ事なかれおさもふおのがなすわさとしれ

大道をとふ人に

天地のはかまてみつる身なれともあめにもぬれす日にもてられす

あまたに道を尋ぬる人に

いろくゝのをしへにまよふ法の道しらすはもとの物となるへし

むなんがつねをとふ人に

月も月花もむかしのはななからみるものゝものになりけるかな

生死をとふ人に

いきて居る物をたしかにしりにけりなけとわらへど只なにもなし

死て後をたしかにおもひしりにけり只なにもなしなきものもなし

應無所住而生其心

住所なきを心のしるへにてそのしなくにまかせぬるかな

生死即涅槃

生死もしらぬ所になをつけてねはんといふもいふばかりなり

佛をとよ人に

世中の人の心のかなしきはなきをたつぬる佛なりけり

いかにせんわれさへしらぬものなれば人にをしへんことのはもなし

達磨のうへに

いかにしてこれはどうぞをつきぬらんざりとてはなきさとりなりしを

念佛行者に

みだ佛のちかひのあみはひろければわれからもるゝ人そはかなき

已身彌陀唯心淨土

一すぢになむあみた佛ととなふればはどけも見えす身もなかりけり

趙州和尚、因僧問云、狗子還有佛性也無、州云、無。

無といふもわたら詞の障哉無ともおもはぬとさそひとなる

趙州の無といはれしはおほつかないかばとてしもしられざりしを

庭前柏樹子

草木も國土もおなし法の道實ありかたきをしへなりけり

麻三斤

佛はどとへは答る麻三斤なにかはどけの名にもれぬへき

あるとき眞實なる人に

本來はをしへもならずならはれすしらねはしらすしれはしられす

ある人道をとよ

松風をあさの衣にとちつけて月をまくらに波のさむしる

はどけはどとへはまよはぬ人どなきおのかこゝろと知る人もかな

のりの道ふかくたつぬる人あらはあさき所にのこる物なり

法語

一、身の外は佛なり。たどへばこころのごとし。かるかゆるに位牌のうへに、歸空と書くなり。

〔庭前柏樹子〕僧、趙州に問ふ、如何なるは是れ祖師西來意。趙州曰く、庭前柏樹子。
〔麻三斤〕僧、洞山禪師に問ふ、如何なるは是れ佛。洞山曰く、麻三斤。

一、常に何もおもはぬは、佛のけいこなり。

一、なにもおもはぬ物から、なにもかもするがよし。

いさなから死人と成てなりはて、おもひのまゝにするわざよき

諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂、此歌のこゝろなり。

神道をとよ人に

一、たかまがはらは人の身なり。神とまはむねのうちめさらかなるそらよ。

儒道をとよ人に

一、天命性と云ふ。身の外は天也。ひねのうちなにもなきは、天より命したるとなり。即性と云ふ。性次第にするを道といふなり。

佛道をとよ人に

一、身をなくするなり。身に八萬四千の悪あり、身なければ大安樂なり。じきに神なり。直に天なり。我家に佛といふなり。

出家精進をとよ人に

一、出家精進をするは、五辛酒肉を以て氣血甚しき故に、むねのうち清からず。是れ一。

〔五辛〕一に大蒜、

二に茗葱、三に葱、四に蘭葱、五に興渠これなり。楞嚴經に云はく、是の五辛は熱して食せば淫を發し、生にして嗅へば氣を増すといふ。

有情皆我友なり。是れ二。君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友なにものか魚鳥にへんせんをしらす。これらを以ていひなり。

一、ある人民をなげけん事をとよ人に云ふ、濁きに水をわたへ、寒きに衣をわたへ、飢に食をわたへば、民なづくべし。

一、少將にておはせし人、殿子に世をうつられしとき、

第一、慈悲。

第二、無欲。

第三、萬依怙なく。

此三言をもつて國を治めよとなり。ものをよまでも心をあきらめられししなり。

一、釋迦にしやかなし、法なし、教なし、ならひなし。

爰を妙を名けて妙法ととき、

阿字と名けて眞言ととき、

佛と名けてあみださまととき、

四十九年一字不説との給ふ。根本なき故なり。元來こゝはいふ事ならず、かるがゆゑに

此一字はとかれず。これを道得するを禪といふなり。
一、道を修する人、千萬人に一人は道を知る人ありとも、わがものにする人なし。わが物にする人われども、それをすつる人なし。

一、大名高家に生るゝ事さへ世にまれなり。過去にて能く慈悲をし、功德をして、今世に大名高家、そのしなゝ因果をあらはすなり。たまゝ大名に生れては、我意にまかせ、いろゝのあくをし、むかしよりあさましくなるべし。あはれなり。ある人、我に問ふ生替ること慥なるや。予云ふ、生國はいづくぞ。かれはいく、西國。又とふ、その生れし所に行いて見給へといへば、いかにも行いて我もどのやしき、居所、今目前にありと云ふ。予云ふ、只今身ありやととへば、なにもなしと云ふ。こゝにて心得たまへ、その身死すれば、思ふ所にとまるなり。さいこくへつまはしきせざるうちに念行也。只今これへは、なにのためにおはするぞ。かれはいく、法のため。予云ふ、法のためには寺へ來り、色をこのめば遊女を尋ねて行く、常にきたなき心あれば、ちくしやうにかたちをうつす、きれいにじひしたれば、人に生る。うたがふ事なけれ。念は方々へ行く、身は念のやどなり。佛といふはかじこへも行かず、こゝにも居らず、一念もなし、身も

なし、こくうと一たいなり。かれたしかに心得て去る。

一、火のあたりはあつし、水のあたりはひやうかなり。大道人のあたりへまれば、身の悪さあるなり。これを道人といふ。そのとに道人といふ、おそろしき事なり。

我庵門徒中に法度之事

- 一、坊主は天地の大極悪也、無所不作而渡世。大盗人也。
- 二、修行果滿して人の師とならんとさ、天地の重寶なり。萬渡世の師のみあり、大道の師まれなり。
- 三、一紙半錢おろかにする事なけれ。
- 一、平常身をついまやかにして、身のためにする事なけれ。法てき佛てきは身なり。
- 二、人まりのものをうる事、毒藥とおもへ。大道成就の時、人のをしむものとうくべし。其人をたすくる故なり。
- 一、修行之内、人にうたれふまるとさ、過去にてわがなす業つくと悦ぶべし。
- 二、一夜をあかすとも、亭主のさる物かる事なけれ、すみによりかゝりてふすべし。大かたは必らずに入れて持て行くべし。やぐそくの日、あめ雪にも行くべし。

「ふくす」打包の

ことにて眞僧の奔
類なきを包み入る
ものなり。

- 一、大道成就せざるうち女をちかづくべからず。
 - 一、心なき家にどゝるべからず。
- 右九ヶ條常にまもるべし。外は古徳の語にあり。
- 一、人をしてへがたき事あり、行住坐臥、直に是れ大道。愚なる人はやすしと思ひ、たまた本心見る事あれども、つねになれし道にかよふ心つよし。
 - 一、人をしてへがたきあり、世智の過ぎたる人。
 - 一、人をしてへがたきあり、富貴をこのむ人。
 - 一、大道心かくるには、あしき友を去るべし。
 - 一、ある人まよひのをもとをどふ、よしめむしるがもとなり。
 - 一、ある人まよひのをもとをどふ、よしめむしるがもとなり。
 - 一、我が心をわがしめて見んといふ人に
- 色このむてゝるはかへて思へ、たゞ見る物は誰を聞く物は誰そ
- 一、ありがたき事をおもふ、これは下部まで、何院かあるとていふとも、王をいふ事ぞのそく。

- 一、その道くのかまきき人にたづねば、よろしかるべし。法師を俗よりよしめむしをえらぶ。法師より俗のよしめむしを云ふ。あらまじは知るべし、いたりては覺束なし。むかしわかき時、人のの給ひしをさくに、鑑に名のおほきをおもふに、武士の我家の事さへ、いたりてははかりがたし。ましてわが家にあらぬ事はおぼつかなし。
- 一、子が弟子死靈を吊ふことを問ふ。第一身を消し心をけし、修業成就して吊へはうかふなり。年若い色の念なくとも、心にうつるうちは、吊ひてもうかふ事なし。必ず無念にして吊へば、惡靈もうかふなり。此道成就する人には、たしかなるしるしあり。むかふ時、男女共に惡念消ゆるなり。これを道人といふ。
- 一、釋迦如來の御心をさして道心といふ。御かたちを出家といふ。御作法を乞食といふ。佛法すたりはてしむことわりなり。寺につかふ下坊主を道心と呼び、非人を乞食といふ。
- 二つの御名は、筆にし及ばぬいやしきものにもづりぬ。今一つ殘る出家は身のなきをいふ。天下に誰れか身のなくなる人あらんや。
- 一、衣をきるほどの人、必ず女のあたりへよるべからず。いかに身にわやまらずとも、心にうつるなり。故に女にちかづくは、かならず畜生のけいこなり。老僧の女をいひは、

ちくしやうの心残る故なり。

一、人は名と装束にて位にのぼる。秀吉は尾州熱田の宮より五十町へたて、中村と云ふかや屋わづかに三十ほどある所のあさましき下人の子也。天然にも、大唐にも、日本にもこれのみの御人なり。實にありかたき事なり。兵法も軍法もしろしめさず、大敵をかたふけたまふ事、風に草のなびくがごとし。武士の氏神たるべしと、或る商家のの給ひしをげにもと思へり。

一、もろこしに隣の家くづれて、其内の女さむしとて、ふどころに入りてふす。もろこしにもかゝる名譽のをとこなればこそ書きとやむれ。我が師もあびたまへるに、女らしるより前にいたりて、のこらずあらふ。これもわが國にめづらしからんと思ふ。

一、たどへば栗をうゑれば、栗の木生ゆ、人のたねは白露なり。故に年老いても法に心ざしなれば、心に絶えず、利欲は色をかざらんためなり。利欲はなはだしきは、主君を殺し親を殺す事たしかなり。

一、維摩居士は、一度に二三百人を悟らせ玉ふ。大唐の六祖大師は、柴をうりて渡世し給ひしが、如來の説きおかせ給ふ、何もなき所より出づる心は、一方に事よしと人のよみけ

るを聞召して、直に御心ひらけりと、今にいひつたへ侍る。さては物をしらでまなる事とおもひ、何もなき心をたふとみましくおもへば、いたつらに色をこのみ、實をのそむは身なりけりと、如來仰せられしなり。さて身のなきやうのをしへをひるめ給ふ。我人身死て後ならては、身はなくなるましとおもひしに、常は身のなき事をたれもくしる事なり。はどけのをしへは、やすくしてすなほなりと心得て、人にもかたれば、ものしりはなにとて、不學にてならんやとて、聞き入れぬなり。心ある人はありがたしといふて悦ぶ。

一、をかしき事ながら、むかしな人にてかあらん。かまぐらどのの前にてめづらしきものをうけて、道もて行に子どもあつたり、それたまへといへば、とらせて行くとなん。なか／＼なりかたき事と、かしらふりめにしはよせでうちうなつく、われも人も思ひ入てかんしける所に、いとわかき人なにかんしけるとて、ふどころより餅どりのいたはあたへたり。折ふしはらふくれはすして、われもまたふとて入てゐる所へ、人きたりてなにもも食せばやと云ひけるに、とり出しかれにあたへてくばせけり。かれも悦び、われもよしとおもふにつけて、たしかにおもひあたれり。なにもなき心からなすわ

さは、むかひもわれもよしとおもふ、これやほどけならん、しらす。

一、ある人のかたりしは、心經を人のよみてきかせられし中に、かたちをなくせよと仰せられしなり。さてもありかたき教へかな、人はしらす、我たしかにおもひあたりてしる事なり。むかし朝夕ぶらうきを好み、身もやすらかに、子どもにもあたへんと、わかきときよりおもひつめて、くるしみ奉公して、主君の御心になひ、また家の年老いぬる心にも、ちかはぬやうにと、神佛にもいのりしが、たゞ今すきとなくなりたり。今まで身をよくせんと思ひし故也。釋迦如來の仰せのごとし。身をおもはねば、大あんならぐ也。くらくなり。佛の思ひよくふかし。さてまた常にたのむ人のあたりへ行きぬれば、いづより心安く、まへちかくよひ、今まではその方なにとやらものむつかしかりつるが、今はなに心もなしとほめられしなり。わかひぬあんならくなれば、人も見れりと思へり。

一、物しり坊主、あるとき手にむかひていふ、その方も禪と聞く、禪も十色などをおぼえて禪といひかたし。予無言にして居す。つらく思ふにわさましき事なり。大道元來、知はわやまるといふ事をしらす。常に學に苦み覺にくるしみ、己れをたかふりてどか

あり。

物しりは佛に遠くなるみかたしらぬはちきにみのをばりなり

一、ある人つねのつとめやうととふ。予いはく、人々心におそるへし、主君のゆるす事あり、心にみつけれしどかはゆるしなし。

一、本來をしへの外なれせんかたなし。しやか如來、妙法との給ひしも、大きなあやまりなり。

一、ある老尼、心經の註のこまやかなるを持來り、是れをみれども、むかし人のたまひしは聞分かつたしとなく。いとあはれにおもひ、おろかさをかへりみす、ことばをへ侍る也。

摩訶は大也、身なきを云ふ。般若は何もなき所より出るちるを云ふ。波羅蜜多はまかり出づるちるは、いつくにもとこほらす、とまらぬ也。心經、身の惡消えつくすを云ふ。其より出るは皆經也。

從是未は註也

觀自在菩薩。見れば我に有るはさつ也。行深般若波羅蜜多時、身をなくするを云ふ。照

見五蘊皆空。身なきことたしか也。度一切苦厄。身なければくるしみなき也。舍利子、
 聞く人をさす。色不異空、空不異色。身とこくうとひとつ也。色即是空、々即是色、い
 よく落ちつき、何もなき形也。儘に知るへし、形のわく消ゆる時形なし、色を思ひ實
 を望むとき、必ず形有り。是れにてわかまへ知るへし、受想行識亦復如是。色さへ空す
 れば、受想行識もなき也。舍利子、前に同じ。是諸法空相、云ふに不及。不生不滅。こ
 くうは何も生せず滅せぬ也。不垢不淨。こくうにきたなき事も、されいなることもなし。
 不増不減。こくうにます事もへることもなし。是故空中。云ふに不及。無色無受相行識。
 こくうとひとつになれば、何もなき也。無眼耳鼻舌身意。こくうにはなき也。無色聲香
 味觸法。もとよりなき也。無眼界乃至無意識界。前に同じ。無々明亦無々明盡。無明も
 なし、又無明のつきてなきと云ふこともなし。元來なきと云ふ事なきと思ふ事もなけれ。
 乃至無老死亦無老死盡。前に同じ。無苦集滅道。空に苦なし集なし、滅なし道なし。無
 智亦無得。空に智なし得ることなし。以無所得。云ふに不及。故菩提薩陲、此道行人只
 ども此名也。依般若波羅蜜多故。身をなくする事第一也。心無罣礙、無罣礙故無有恐怖。
 身なき故、もとより物にもとるゝ事なし。遠離一切顛倒夢想。身なき故、一切うたへ

たることなし。何もかもはなればつる也。究竟涅槃。ひつきやうねはんとは、生死なき
 こと也。三世諸佛。云ふに不及。依般若波羅蜜多故。身なきと云ふ。得阿耨多羅三藐三菩
 提。死人のいき返るか如し。故知般若波羅蜜多是大神咒。云ふに不及。是大明咒。云ふ
 に不及。は無上咒。これよりうへなき也。身なくするする如し。此。は無等々咒。何もく
 らふる事なきし也。能除一切苦真實不虛。一切の苦すきとなし。故説般若波羅蜜多咒。
 身なき所よりなすことの有かたきと云ふ。即説咒曰。いふに不及。羯諦羯諦波羅羯諦波
 羅僧羯諦菩提薩婆訶。

至道庵主

此世にて親のかたきうたぬは、一世のはぢなり。此身愛にてさるさねは、萬劫の苦なり。
 此身をこるすは、直に如來になればこるすなり。大乘最上乘の人には、如來を教へて萬
 法を言はず。如來は慈悲功德あり。勿論無虛無實無去來。
 或人、地獄を問ふ。予云はく、なんぢ身にせめらるゝを云ふ。極樂を問ふ、身のせめな
 きと云ふ。佛を問ふ、身心ともになし。かれいはく、死人におなし。予云はく、生なが

ら死人になるをいふ。我宗は悟なり。なんぢ古今の苦樂、目前に有りや無しや。かれい
はん、何もなしといふ。

人の身の作法をさらにかへすしてさとりて見れば只何もなし

人の身の作法をさらにかへすしてまよへはつねにくるしかりけり

佛法天地の内の體とて大善なり。人は天地をかたちとする故行ふなり。

心

佛と云ひ、神と云ひ、天道と云ひ、菩薩と云ひ、如來と云ふ。色々難有名は、人の心
をかへて云ふなり。

心もど一物もなし。

心の動、第一慈悲なり。和なり直なり。主君に向へは忠を思ひ、親に向へは孝おもひ、
夫婦、兄弟、朋友にむかへは、其品々に道をたししくせんと思ふ。是れ心の本意なり。
かく有りかたきものなり。心を妙と云ひ、阿字と云ひ、阿彌陀と云ひ、悟と云ふ。無疑。
わがどが我心に見られては、ゆるす事なし。必ず悪人とかさぐるは、其身の心もゆるさ
ぬ故なり。無疑。善人しだいによくなるは、其身の心よりなき事をたふ。うたかひな

〔阿字〕阿は梵語、
具には阿提阿提波
陀と云ふ、此に不
生と云ふ、一切の
法は本來不生の謂
なり。眞言問答に
曰く、阿字不生の
故に、自身本不生
なりと知る、之を
自心を知るを謂
ふ。

し。かくあきらかに人をそなはるなり。天下平なり。國主行ふ時、其國安し。

かきある有かたき物なり。上二人おこなひ給へは、天下平なり。國主行ふ時、其國安し。

家主おこなふ時、其家安し。それをしらすして、萬我意にまかせ、身の惡にたまされ、

人のあへを色々によしあしにつけてねたみそねみ、我身我心、かた時やすからず。常に

苦しみなしむ事たえず。其惡念にひかれ、死していく世もうかふ事なし。あさましく

かなしき事なり。

佛世に御出ありて、身のどかを去るべし。どかなければ、身なし。身なければ、直に佛

と御をしへ有り難し。

修行と云ふは、人々身のどかを去るへし。立居につけて、我どかをわが心に見せて、去

る事おこなはねは、つねに去りつくして、我身直にこくう。こくう直に我身なり。うた

かひなし。其時生も死すも萬物すきとのかれて、大あんらくなる故、極樂と云ふ。ねか

ひもどひる事なき故、佛と云ふ。うたかひなし。

身も消えて心も消えてわたる世はつるまのうらもはらなりげり

うたかひなし。

人つねにあやまる事

人にたまされてくるしみ、我にたまされて悦ぶ事。

人の死をしりて、我死をじらす。

人の是非をえらび、我不作法の事。

本来無といへば、無としる事。

佛道に法をたつる事。

佛道に入らざるは、身守る事ならず。

さねんする人あり、身の佛を不敬。

責をくるしみ、のかる事しらす。

悟を以て佛法と云ふ、悟る人まれなり。

一念悪氣ひるかへす事ならず。

右此三冊、寛文庚戌末秋、是をゆつめぬるにつけて、此上か筆をやまりににたがといへども、ふじきに命なからへ、よわひ七十四歳に及て、釋迦如來御說法少も説法せず

と仰られし事、生も死も萬物直になき事などのへおかせられしにつけ、予ふとおもひ出て、予か一世のなす事一もなし、是たれもくしることなれば、もしかくおもむく人もかなどねかふにつけ、辭しかたく筆をくはへぬるも、わかごとくおろかなる人のたすけにもやならんかし。七十四歳にて此一枚のおく書をしりて門弟このむにまかせ、筆をそめ侍るなり。 延寶四丙辰仲夏、無難花押。

假名法語 卷の止 終

序
人の嘲を忘れず、眼心記、自性記三冊の法語を作る、わかき童女のためにやならんか
じ。三休和尚法語、若し御一句を得道せば、萬劫の苦を離れ大安樂を得へし。誰人か
色々詞を添へ、却つて笑草となる、悲歎甚し。大善知識の書き玉ふさへ、末世は此の
如し。我如きの無智無學の者のすること、いかにをかしく思召すとも御詞をへ玉ふ事
免し玉へ。予は美濃國關原の番太郎なり。愚堂和尚の人足して江戸へ御供の時、和尚
不便に思召、本來無一物と御示、忝なく思ひ三十年修行して直に無一物になり、和尚
の御恩により佛の有りがたく忝なきを知り、佛法人に教いとたふとし。
一、或る時孔子御一言聞得は、凡そ忽ち聖人となり、明明徳有りかたきこと、唐人見誤
る。予拙を願みず、孔子の御爲と思ひ筆を加ふる者なり。
一、或る人道心發してさくせんと云ふ。予思ふに昔より道心はど苦しき物なし、少も身の
行悪ければ天罰をうて道心の大事中を筆に及ひがたし。大方道心發す人驗たけてなり。
第二財色の思ひやめ、世に交る事なく、常に心清淨にして佛の教にたかはす、行住坐
臥、身の業去り、人の見見ざるにかまはず、我が本心本性直に佛なり。若し身の惡を

序
人の嘲を忘れず、眼心記、自性記三冊の法語を作る、わかき童女のためにやならんか
じ。三休和尚法語、若し御一句を得道せば、萬劫の苦を離れ大安樂を得へし。誰人か
色々詞を添へ、却つて笑草となる、悲歎甚し。大善知識の書き玉ふさへ、末世は此の
如し。我如きの無智無學の者のすること、いかにをかしく思召すとも御詞をへ玉ふ事
免し玉へ。予は美濃國關原の番太郎なり。愚堂和尚の人足して江戸へ御供の時、和尚
不便に思召、本來無一物と御示、忝なく思ひ三十年修行して直に無一物になり、和尚
の御恩により佛の有りがたく忝なきを知り、佛法人に教いとたふとし。
一、或る時孔子御一言聞得は、凡そ忽ち聖人となり、明明徳有りかたきこと、唐人見誤
る。予拙を願みず、孔子の御爲と思ひ筆を加ふる者なり。
一、或る人道心發してさくせんと云ふ。予思ふに昔より道心はど苦しき物なし、少も身の
行悪ければ天罰をうて道心の大事中を筆に及ひがたし。大方道心發す人驗たけてなり。
第二財色の思ひやめ、世に交る事なく、常に心清淨にして佛の教にたかはす、行住坐
臥、身の業去り、人の見見ざるにかまはず、我が本心本性直に佛なり。若し身の惡を

以て穢さは、何れ成るべきと立居に苦み、能く勤め心明なれ。かりそめの事も、皆報ひと儘に知り、少しも我意にまかせず、御説法有り難さを知る。

一、或人語、鎌倉山中に三年松葉などを食し、時々里に出て、飯を求め、かやうに守る事世人及びかたし。夜は狼眼の光おびたしく、色々の毒虫も此の法師に誤らす、此の如くつとむる事廿年に及べども、人の爲に成る事なし、是れはいかなる事ぞ。予曰く、能師に逢はざる故なり。自己のする事天に通じかたし。

一、或る人問ふ。道心を守る人踏み倒し打ちふせても構ひなしとは、いかなる事ぞ。予云はく、道心の本意なり。第一過去現在未來の罪、何れとして消せんや。人に悪教言はれ思はれて悦ぶ時は即ち滅し、悦ぶ事ならずは、何れと思はぬも罪消るるなり。世人の如く腹立ては罪をせども消えず。此の如くつとめされは直に畜生なり。生れて牛馬と成る。道心とげん人は、我心に怖ぢ恐れ身の業去るべし。かりにも人に食をあたへ、あぶひは物をあたへても業去るなり。

一、或る人佛道つとめ久しむれども、其身苦絶えずひかりせんと問ふ。予委に聞くに坐禪してたましく如來になれども、坐を去れば本のことし。予云はく、物に向ふに三色あり。

一、物に向ふ時移るばかりは直心也。老衰の人にむかひ哀れに見るは佛心なり。慈悲心なり。老衰の人にむかひ、きたなくにくきは身の悪念なり。身の苦に離れざるは常の修行あやまる故なり。

一、若し道心とけんと思ふ人は、第一友を擇ぶべし。たましく道心思ひ立つとも、或は若き友へさそはれ、山水に日を送るもあり。或は高位高官の人に呼ばれ、我名利未た盡きされは悦びて道心妨くるもあり。

一、山林に入り己れ獨りつとめて、世上の人を見くたすもあり。此の如く我がおもひよらぬさまたけあり。

一、道心堅固に守らんと思は、能師にあひ、我本心本性を儘に見、是れをつよく守るべし。深山市中の住居は己か心にまかすべし。

一、檀那を持つ人は其を便にするもあり、道心は天地の内に便なし。身の悪業去りつくし。天地と一體となる時、天下の人尊敬する事道理なり。かくつとめさるうち、衣食住にくるむ事かふばかりなし。

一、道心守る人物毎に恐るへし。身の所作なくして衣食住安は、必ず天罰受くる故、道心

一 穿るは万不足を吉也。

延寶甲寅冬、右四枚書添者也。

至道庵

一 佛性あらはれず。...

一 或る人間は、悟は如何か人に示す。予云はく、眼を開かされは萬物見えず、悟らざれば佛性あらはれず。

一 或る人間は、古今得がたきは悟なりといふ。如何か悟るとや。予云はく、六祖大師下に四十餘人、馬祖下は百三十餘人、大悟の人あり。又問ふ。悟は如何。予云はく、本心也。

假名法語 下の巻

無難禪師

一 老の波よせて稀れなる年なり。灯の下に普思へば、我が友一人もなし。今夜もや身の上ならず。數多の人を見聞ぐ事書付け侍る。言たらぬは見ゆるし玉へ。」

一 禽獸に變じ永劫淫ぶ事なきは、比丘比丘尼の情欲なり。

一 或る人大法を問ふ。予本心を教ふ。又問ふ。如何か供養せん。予云はく、悟は天地にかへぬたからなり。保養汝が心にあり。

一 門弟に向ひ云はく、身は大敵なり。暫くも油断することなかれ。

一 金は飢寒の憂やめん爲めなり。悟は身の惡を去らん爲めなり。

一 或る人間は、悟は如何か人に示す。予云はく、眼を開かされは萬物見えず、悟らざれば佛性あらはれず。

一 或る人間は、古今得がたきは悟なりといふ。如何か悟るとや。予云はく、六祖大師下に四十餘人、馬祖下は百三十餘人、大悟の人あり。又問ふ。悟は如何。予云はく、本心也。

問ふ。如何なるか是れ本心。予云はく、無一物。また問ふ。如何なるか是れ無一物。無言。

一、凡夫因果を知らず、悟れば則ち因果を知る。修行して因果を離る。此の國聖を去る事遠し。今既にひじりの御代なり。かゝる時生をうくる、いと有りがたし。

一、ある人はく、聖代のしるし、何をか人のうなつく事侍る。予云はく、佛道におもむくいとたふとし。三事相應とてわたくしならぬ事あり。

一、第一天下の主聖にして四海波靜なり、是れ一。天下靜なれども人々身おだやかならざればせんかたなし、いま幸ひ我友はこゝろやすし、是れ二。佛道をしへまぢたくなれども正法は人の心なり。是れ釋迦如來の直説なり。此の三事相應、古今たぐひなき事なり。

一、或る人唯有一乘法無二亦無三を問ふ。予云はく、一乘法は妙なり、妙は心なり、心は無一物なり、無一物は天地のかたちなり、天地は形なきなり。無二亦無三は言葉のよかつく事ならぬと云ふことなり。

一、或る人問ふ。五戒をたもつ事は如何なる故ぞ。予云はく、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒なり。曾身にむる罪なり。悟れば無一物也。

〔五智の如來〕 五智は大圓鏡智、平等性智、清淨法界智、妙觀察智、成所作智を云ひ、五如來は、寶生佛、阿閼佛、毘盧舍那佛、不空成就佛、阿彌陀佛を指す。

〔六地藏〕 預天、寶光王、金剛藏、金剛悲、金剛寶、金剛眼を云ふ。

〔須菩提〕 梵語、

一、或る人五臟を問ふ。予云はく、五臟を五知の如來と名け、六腑を六地藏となづけ、七情を過去の七佛と名ぐる也。本心動如此。

一、ある人に、佛は心なり、地獄は身なり、身の惡を佛にせよ。身のむくさむるとも、清淨になる也。

身の業のつきはてぬればいとよきこゝろのまゝの佛なりけり

一、ある人のもとりにまかせて、

本來無一物は如來也。常に用ひざるときは大惡念となるなり。常に用ふれば則ち大慈悲心となり、萬物に應じて大圓明なり。物に向ふとき圓心になれば、如來此身をつかふこと儘なり。

一、金は天下のたから、惡人もては人をくるしめ、我もくるしむなり。善人もては人をたすけ、我もたのしむなり。

一、智惠は身のうちの寶なり。念よりつかへば人我ともに苦なり。本心つかへば人我ともによることなり。

須菩提若有二人言、如來若來、若去、若坐、若臥、是人不解我所説義、何以故、如來

此に空生と云ふ、
佛一大弟子中解空
第一と稱せらる。
以下三節みな金剛
經の文なり。

無所從來、亦無所去、故名如來。
此心をある太にかたる。たとへば鏡にものうつるごとし。見聞、覺知、行住、坐臥念
をどしひる事なけれ。たとへば其身のまなこは鏡のごとし。何とていふとだからに念い
ていふとあるといへば、尤もと手を合はす。

一、須菩提白佛言、世尊佛得阿耨多羅三藐三菩提、爲無所得那。佛言、如是々々、須
菩提、我阿耨多羅三藐三菩提、乃至無有少法可得、是名阿耨多羅三藐三菩提。

一切經の極意なり。いさながら死人になる事、よのつねにしてなりがたし。
一、須菩提若三千大千世界中、所有諸須彌山王、如是等七寶聚、有人持用布施、若人以此
般若波羅蜜經、乃至四句偈等、受持讀誦、爲他人說、於前福德、百分不及一、千万
億分、乃至算數譬喻、所不能及。

是れは人を苦しめて佛道に入れよとのたまふなり。實にありがたし。大法をしらざるひ
ど、いく世のくるしみをうけん事、何とてのがるべきや。大法の有りがたき事、天地に
替へぬたからぬ事。さてくおるかなる事なり。とてもかくても死すると云ふ事、めの
まへにあり。主君より親、兄弟、夫婦、誰れか一人のこるものなし。これにもこすま

のわが身やと、天にいのり、神佛にいのりをかけ、是非このたび大道にいたり、かさね
て生をかへぬ事をつよくねがふべし。是れを聞く人われひまなむ、勤むる事成りかたし
といふ。手をしへていはいはく、たとへば山に入りてつとむる人、たじかにならんや。又こ
のおそろしき色寶のうちにて、直に見、直に聞いて、是れをせむとおもひつとむる人、
たしかにならんやと問ひければ、古人も山はよしとのたまへりと云ふ人ばかりなり。
一、ある人のいはい、此の道に思ひ入るさへつよくば、山は松風、雪月、鳥聲、是れのみ
に向ひてはとも念きおへし。此の世界の悪念多き所にて、つよく勤めて消すならば、直
に剣のはをわたる所にて、わか悪念ころさば、なかく山に入り十ねんのつとめより、
一日の苦をばなれば、火中にて火の難をのがるゝことといふ人もあり。
一、佛のをしへ、己がさましくかはるにつけ、佛をねかふ人に心をたつねしに、たしかな
る事はしらねども、死してのち色々おそろしき地獄へ落ち、又極樂といふ所ありと聞き
し故、佛をたのみこころよくへまわらんといふのと云ふ。此の世はかくあさましく、くる
しみのなみだにしつむも、因果のはをかなしとがたる。
一、此の世をむんらくに過ぎしも、佛の道をねかふかけかど、いふ人もあり。

一、佛のごとも、神の事も、しらて此の世をおもしろしと、わたる人もあり。

一、もとより神佛の事なごいふ事、いやとて二代くるしみて、わたるもあり。

一、或は人のよしむしを、いひなごさみてわたるもあり。

一、あるとんせいのしや物語しけるは、加賀の園宮のこしを通りし時、或所に宿かる。亭主物かたりしける。夜にいらりてうたふに、むくくといふ音、二三たひしけるをあるしにどひければ、ごなたをどめしはこれをみせんためたり。見たまへとおくへ入りて見れば、二十あまりの男、首に蛇二すちまさて、かしらむかひへ二ツならぶ、このかしらをこの首もがむとき、いたれし故に、むくくといふ音、こたへしなり。是れはいかにとどひしに、あるしのいはく、我が子なり。女をよびあたへしに、女のつかひける下女をてをかけしに、あるとき縁下女をつれ、此のわたしをこしけるか、川中にて下女を突入れしに下女主のそてにどりつき、二人とも死せしなり。其後此をこわたりのおたりにおしあらひけり。蛇二ツきたりて首にまきつきしなりとかたる。いとかなしき事なり。

一、ある半大京の五條にやどかりて、うらにゐる。十二月のころ夢に童子きたり、汝金はしくば、はやく五條のはしへ行きて、橋のつらにゐるをひるへと夢みる時、妻にかくと

かたりければ、いそぎをさて見たまへといふ。月照りか、やき霜しろくしてさびき折ふしなれば、起きかねけるを女しめていひけるに、まかせて行きて見れば、かわ袋をひろひてきたる、女にかぐといひければ、女もよるこひありかたしとて、いそぎあけてみるに、ちやわんのわれ、かはらけのかけ、石など紙についむ、さてくせんしとて、やぶへすてけり。よむけかたに亭主よりよふ夫婦どもにのきて食ふるまはれければ、亭主福よるまいと云ふ。くはしくきは、かわふくろの口あけて、白銀すてありといふ。ちう人みきのやうす、ていしめにかたる。ある人これを聞きて、かわふくろのぐらばやぐあけし故、福も人のためにならたり。などおのかさまくいひければ、身のあももるなりと不けき、おしきは人にもはつかしと思ひ、わか身のあくをさり、佛道のとむる人なし。過去のこうじる入なし、あさましくかなしき事なり。

一、悟は我が心をいふなり。おどりて身のあくすきとなきもあり、過去にて修行のちからなり。心は鏡の如し、我身の善悪を知るものなり。人となりては身の悪残りなく去る故にありかたさかたちなり。よのかたちを晴てはならぬ事なり。身のあくまれば佛なり。

一、ある人さとりをとよ。こたへていはく、さとりは佛のまなこ、佛のこつすい、直に成
佛大めんらんなり。常に心にかなはぬ事なし。かゝるありかたきものなれども、悟はは
どけの大てきなり、疑ふ事なかれ。さとりて萬事を離れしところにて、こつりも知るも
のめれば、萬物にかはらぬ所、則ち親をころし主君をころし、我意にまかせぬるによ
り、佛敵はさとりなり。

一、さとりて修行して、身もなく念もなく、知るものもしらぬものもなくなるべし。これ
すなはちさとりをもとせされはならぬ事なり。本來心空にいたるべし。三事相應はわ
たくしのおよふ所にあらず、今の世までにしかなり。只今大道を得ずは、いつのときを
か期せん。

三千世界本心跡、誤少莫立自己心、自己心立得天罰、天更不罰諸衆生、自己心則
墮塗炭、萬劫千生還佛果、適受佛心得佛体、豈不用如々心法、應物則如水中
月、無所不到無所滯、離萬事直本來空、古今不變謂佛法。

予が弟子不文字にして此意をとよ。
おとろしきうまよのなかをそのまに佛はものにはらさけり。

一、ある人佛事に布施のしやうをとよ。予いはく、終に三錢のふせする人なし、三錢のふ
せをうくる坊主なし。かれとよ、三錢のふせとはいかやうなる事ぞ。予云、天下に誰か三
錢をしむ人あらんや、たとへば千貫萬貫のふせも、三錢の出す心にてせよといふ事なり。
かりにもふせは大事なり、死人のためにするものなり。大しんじつをまつて、わかおもふ
はどする人なし。あるひは身のやく、またはくわいふん、又は是は過ぎたるといひせ、
さばふをわすれ死人のためにする人なし。又賭ぐる坊主萬貫のふせも、三錢のこぞく
はおもはされは、直に其吊あやまる。後世はちくしやうとなる事疑なし。

一、あるとき人をむつにこぬ、いかなる故ぞや。
一、ある時つよくまつ人を心にかけてしに、俄にいそかはしき事いてきたりて、まつ事をあ
すれしに其入きたれり。

人をまつにきたらず、人をまたぬにきたる。かくおもふことかなはぬあり、おもふこと
かなふあり。
一、天のわざはわかする所にあらず。たしかに我が道まれば、おのつからおしよてさの
がれて、よき事あつまるなり、うたかふことなかれ。

一、いろ／＼の事をかきわつめて、人のためとおもふは、この世のみと人々おもへり、あさましくつたなきことなり。かたちはしせりねんはしせすして、生をかへくして、いかほどのかたちにかうつりかはることをしらて、かたちのよき時はおこりをさわり、あしくひんなる時はへつらひ、世をむさぼる故に、道のたしかなる事をうつしおくなり。かやうの事あまたあれども、大事とはしらて物かたりのおもしるさことに見なしとりなし、わかちへにする人なし、おそろしくかなしきことなり。必ず我が門弟たる人心得てつゞしみ、此のおそろしき所、ありかたき所をよく／＼見しり、するの世まで大法をしつて、天地のあらんかきりつとめは、あしき事あるまじ。

一、かみにある人のしらぬあく、しむにこのはか多し。かならずうへにゐる人、わか身をた、しくつゝしみふかければ、しものあくはかならずさることたしかなり。しものあくをしりそけんとおもふ事なく、わか身のこのつきの事を佛になけさて、我がごうつきのぬれば、つむにはしものあくよくなる事疑ひなし。しものあく人をさらんとて、そのあく人をよくいためなとしければ、其あくきえすしてよのあくじにかはるなり。どでもかくても身のどがどしりて、わか身のあくをのこりなくさるへし。かみのたゝしきうち

は下のあくにまけぬものなり、かみわしければしもよくても、つむに家はるふ事うたかひなし。

一、天は身なし、念なし、心なし、是非なし。身あれば八万四千のあくねんあり、身のたゆにくるしむ事たしかなり。大道心かけん人の大事なり。

うきものとおもひなからもさりとては身にはかざる／＼こゝろなりけり

一、孔子世を去り給ひて千年後に、程氏兄弟出世して孔子の道をつぎ、其傳今にいたりて儒道の元祖なり。視鏡に蔽交於前、其中則遷、制之外以安其内。尤道理にかなへり。予思ふに、後世の人必ずあやまらんことを知りて、言葉そのこし給ふなるへし。予程子の心をたけて、たとへばあまさむぢを口にて教ゆる事ならず、あまさむぢのをあたへて其味を知らしむるかことし。孔子の心を以て万事に向へばまよふ事なし。

一、ある人のいはく、此國は神國也。幸ひむかしよりもちひ來る神道をやめ、佛道おこなふ大なるあやまりなり。予云。おろかなる事なり、此國のかみとていふも心の事なり。歌

心たにまことの道にかなひなはいのちすとも神や守らん
 此のたのたをひあまたあり。そののみならず、たかまが原は人の身をいふなり。神とま
 るるはむねのうちあきらかなるをいふ、是れ心の事なり。儒道のてんはんも心の事なり。
 天然の佛も心の事なり。三國に心をもちひ來る事たしかなり。儒道神道は身をたししく
 してむねをあらかにする事なり。天然は身をなくして直に心をあらはせり。故に天然
 にもてなれし佛の道行なり。むかしより其道のひじりあかめたてまつるなり。故に佛道
 さかりなれば誤なし。人我のへたてもなく、物こそすなはなり。上一人此みちを行ひた
 まへば、その下に住むもの誰か苦しまんや。人のくるしみはおのれをたつる悪念なり。
 このあく念のむかふ所くるしむなり。上一人のあくは天下の苦み。國は國のくるしみ。
 家は家のくるしみなり。上一人佛道おこなひ給ひて、天下の上におはしませば、天下お
 しなへて子とおもひ給へり、天下の民はおやとあかめたてまつるなり。佛道をしへたし
 しからされば、死して後の事と思へり、大なるあやまりなり。人々つねの心をじらで、
 身と思ふあく念にまかせぬるによりてかなしきかなや。我か自我か耳口鼻手足にいたる
 まで、心のてきとなりて、其苦のむかふ所人は云ふに及ばず、草木國土まで苦しめ、あ

づかのいのちのうち、行住坐臥我身を直に地とく、がき、ちくしやう、しゆらとして、
 天下をたもち國をたもつかひなく、それよりしもつかたは、あるひは實をもてはたから
 にくるしめられ、ひんなればひんぞくるしみ。死てのち直にちくしやうのかたちをうく
 る事うたかひなし。

一、さうつころある國ぬしの侍、百姓の代官せしに頓死してけり。妻子なげくことたへが
 たし、殊に勘定如何せんぞ苦しむ所に、若き下女俄に物化つき亭主の坐にとびあがり、
 我勘定せずして死す、妻子の苦しみ尤もなり、勘定せんためきたりたりといふ。色を不
 思議なることども多し、私のおさに及ばずとて言上するなり。其比の家老をばしめとし、
 がれこれ代官の家にあつまる。件の下女下代おまたよひ一どさんみする時、下代女のい
 ふ事をぞむく、女はらたち、其つれいはせまじとておくへとひ入り、ふるき手形とり出
 し、是れにてもいなどいはんやといひける時、下代もつての外におどろき、ちきりにい
 たる人にむかふことく、ひさをたてかしてまり算用すまし、手がたどりさしはいた、
 かせける事たしかなり。

一、あるひは人に生れて、道といふ事ありとて、ふるき文など見て、ひたいにしはよせ、

人を見くたし世をわたるもあり。

神道大事ありとて、朝暮身をあらため、何にやらんごとくしく、人に見せずして、口にもんどなへ、佛道孔子道とそしり、神こそあらたにめてたしといのるもあり。

一、さけのみ前後しらて、わかまへに世をわたるもあり。

一、神をつよくいのる人に必をたつねしに、たましく此世に生れても貧はどくるしみなし、子孫なきもくるとして、富貴はんしやう子孫なくさかへん事をねかよといへども、いろくよきもあり、又あしきもあり。

一、子孫にたからをもつる事なけれ。必ずなくなるものなり。たゞ佛道に入る事かえりなり。いろく善事は法に入りぬればたしかにある事うたかひなし。ほとけの道に入る事ならずは、いろくにかけてしひすべし。しひはてんのめぐみにあふことうたかひなし。もしまことのしひにやいたらん、實のしひは行住坐臥、道たしく感なる事なり。

一、六祖大師坐禪の次第言句に及ばず、有りかたきことなれども、童女の聞くには及びかたき所あり。子御心を請けて、

坐禪

〔六祖大師坐禪の次第〕六祖の法實壇經の中に出つ。

色々妄想起る時、つよく禪定に入るへし。清淨になる禪定の功德なり。

坐禪成就時

心身なき時たしかに知る、色即是空々即是色におちつく時。

諸惡莫作、衆善奉行。無疑。

一、或る人に凡夫即ち佛なれども、しらざる故に身のために苦しむなり、悟りて如來に身の惡さらせよ、是れを修行といふ。いろくよくなる時佛なり。

一、ある人天下に死靈ありて、人も家もほるふる事儘なり。予云はく、四の品あり、一に曰く、國の靈。國の靈は昔の國主子孫に傳へんと思ふ念殘るなり。二に云はく、屋敷の靈。

三に云はく家のりやう。城も同事なり。此三は所をされば別事なし。名字の靈はいつくへ行きてものかれず、善知識をたのみ吊へはよし。

一、ある人に本心業やうををしへてはく。本心見つくとひとしく、赤子をそたつるやうにすべし。行住坐臥思ひ入りて、七情のさけがす事なく、本心守れば、終に長生して、萬物心にかなはぬ事なし。かゝる有りかたき事、をろかにおもふあさましくかなしき事なり。人の大事にして、一世のうたかひはる、起請文のこくい是れなり。をろか

〔菩提の自性〕四句は壇經の附卷第一に見ゆ。

に思ひはぢらくる事うたかひなし。人界に生を請け有り難しといふ別にあらず、此生にて解脱を得んためなり。しかるにこの世をわたるを大事と思ひ、妄念にひかれたらまち死にのぞみて、いかせんぞなげく、何にぞしてかなはんや。佛出世したまひ、本心を教へ直に生死萬物をばなれ、此身有ること儘にして、たしかになき事をしり、見聞覺知儘に有りて、たしかになきをしる。かゝるありかたき事、此道修行のくどくなり、をろかにしてはいたりがたし。

一、修行を深く思ひ、厚く見るによりあやまりおぼし。本來空をしるべし。心念拂ひはてたる所也。六祖大師菩提の自性、本來清淨、是れを用ひ、直にさとりて成佛せよとのたまふ有りがたし。

一、佛をうやまひ香華をたむくる人に向ひいと有り難し、常々をこたり給ひぞといひ、又をしへていはく、此たふとく思ひたまふ佛を、うつしおかれしは、必らずかりの事なり。實のほとけのおはしますは、心のうちなり。愚にして調うけたまふなどいへば、打ち驚く、實のほとけをじらさりし事のあさましきとて、手をわはせ持佛堂に、むかひしときのみたぞ、大事とおもひ、つねはいやしき、またなきことを思ひて、いかほどか

心とけがしぬるあやまりは、いとかなしとぐるしむなり。

誰とて佛のみちに入る人はそのか心をいささよくせよ。

一、知佛法者必得開。行佛法者必得利生。

又

恥恐人一時過多、恥恐天一時無過。不耻恐天一時道、人能知者也。

一、或る老尼自我偈に、釋迦如來此大乘をつれてこゝを去るへし、たどへ去りてもわれつねに愛に有るへじと仰られし、不審といふ。予いはく、只今妙は如何といへば、無念といふ。それこそ天地にみつる妙なり。世尊常の住家なり。老尼尤もきて手を合はせ去る。

一、或る人孔子の曰く。學て時に之れを習ふとは何の事ぞや。予いはく、此一言萬事に應じまことに聖人の語なり。いづれの道も學てよくならへといふ事なり。

一、不亦悦乎、とは何の事ぞや。予云はく、いづれの道も熟する時よろこぶなり。

一、有朋自遠方來、不亦樂乎、とは何の事ぞや。予云はく、わかこのむ友來る事なり。亦樂しとは其道もてあそぶ事なり。

一、人不知而不愠、不亦君子乎、此の一言孔子大聖いかなれば、人知らざるをうれへ

〔自我偈〕法華經
釋尊の偈を云ふ。

ぬとて君子とはの給ふそや。凡夫も人知らずとて何事に慍らんや。ふじぎに思ひ、能くみれば以ての外誤れり。孔子は人知らずして慍らすとのたまふなり。をしなへて我にしらぬ所あり、それはいさよほらぬ物と本心をしへたまふ、有りかたき事なり。すぐによめは孔子の御心になへり。

一、ある人云はく、孔子人不知而不愠とは、たとへば人のために大善ををこなへども、其人知らずしてかへつてあしくわたれども、いさをほらぬは悪人との給ふといふ。予云はく、いかに至極せり、されはこそ天下の人をしなへて、我をしらぬ所にいたかてこそ、人の知らざるを慍らざるべし。がうりも我わらは、かならずいさをほるべし。人をむかひにする故、孔子の御心にそむく、孔子は面々をさしたまふ。

一、大學の道は在明_二明德_一とは何の事ぞや。予云はく、こゝろをさくらむるなり。

一、在親_二民_一とは何の事ぞや。予云はく、こゝろをさらかなれば民としたしむなり。

一、在止_二於至善_一とは何の事ぞや。予云はく、民としたしむは至極の善に止まるをなり。渠れうなづく。

一、知止而后有定、定而后能静、静而后能安、安而后能慮、慮而后能得、と有るをおも

へば、至極の善に止まる故なり。

一、物有本末、事有終始、知所先後、則近道、とは何事ぞや。予云はく、此次きといはんためなり。

一、古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。とは何事ぞや。予云はく、たんに、こゝろにうつし來つて、こゝろにとまる。さてこゝろの動くところを、のべんためなり。是れは事有終始を云ふ。

一、欲誠其意者、先致其知。致知在格物、とは何の事ぞや。予云はく、是れたしかなる教なり、物にいたるといへる、極意なり。本心の事なり。何もなくて高事をさわめよとなり。孔子不知を本心とのたまひ、子思は天命性ときき、曾子は物にいたるとどかれしなり。いつも本心本性の事なり。

一、天命之謂性、とは何の事ぞや。予云はく、身の外は天なり、人々むねのうち何もなきは天よりあたへるといふことなり、則ち性なり。

一、率性之謂道、とは何事ぞや。予云はく、身の念なきとてる性なり。高事にさらぬ心

にて、見聞覺知せよとなり。見聞覺知の主かまらかなるゝ念に、萬事をなす處かまらかなるゝ云ふ事なり。

一、修進之謂教、とは何事をや。予云はく、能くつとめ得たるは、人の師と成ると云ふ事なり。

一、道也者、不可須臾離也、可離非道也、とは何事をや。いふに及ばず。

一、是故君子、戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞、とは何事をや。予云はく、性は見えす、本來無一物なり。心に恐れつゝしめといふ事なり。

一、莫見乎隱、莫顯乎微、心は、故君子慎、即ち無(其獨一也)、とは何事をや。予云はく、君子は本心本性を養ふ。養は身の惡を以てけかさぬなり。身の惡をもつてけ

かすは、おろろしき事なり。心は神と云ひ、天道と云ひ、佛と云ひ、三國にわたる、言は別にしてもと一跡なり。こゝは直に性のたゞしさをいふなり。無一物になりたるべき

の事なり。凡夫のあやまりこゝにあり、無一物ならは見聞覺知あるまじとおもふ。聖人は見聞覺知直に無一物なり、こゝをよく心得へき事なり。

一、喜怒哀樂未發謂之中、とは何事をや。予云はく、何もなき處と性と云ひ、心と云ひ、

中とも云ふなり。

一、發而皆中節謂之和、とは何事をや。予云はく、本心本性より出づるばみなせなほなり。身の念より出づるは、言葉とかありて、人の聞かざるしむななり。

一、中也者天下之大本也、とは何事をや。予曰く、無一物は天地のかたちなり。

一、和也者天下之達道也、とは何事をや。予曰く、本心本性の物にわたるは、おそろかにしてよろしきことなり。

一、致中和、天地位焉、萬物育焉、とは何事をや。本心本性を体にして、萬事を行ふと聖人なり。何とて人はかゝる有りかたき事、體に身にありながら、惡念をもつて我をく

るしめ、人をくくらしむるを、いたりてをろかなる事なり。第一子孫むむを受けせむるしむ、後は絶えはつる事難なし。

一、昔唐に伯牙といへる琴の上手あり、子期といへる琴を聞く人あり。ある時子期伯牙の

魔を行き、琴をかきならしむるを聞きながら、後は何とてを聞きけるを問ひければ、琴のひびき物なるすと聞きければ、かゝるといひければ、伯牙はく、庭の蜘蛛の糸に

なり。我が弟子時の鐘打ちけるを聞き、何ともなく打ちける時にては、いかにありて、悪魔しよと云ふなどいへり。またある時はあしき響なり、あまのたぢんといひしに、時の鐘うつ人にとひしに、物思ひて打つといひ、又何ともおぼはすしてうつと云ふ。その道にかしときは、常の人の及びかたき事あり。

一、法華、方便品曰、止々不須説、我法妙難思、妙は言句に及びかたし。唯へは人にむかひ、何心なく一日かたれともつまず、暗る事も覺せず、打ちうなすき、真法をあすれ成程必やすし、たちのきて何をかたりしとも知らず、是れ妙のなすところなり。何にても心にはあはぬ事を聞けば、氣むつかしく即ち念となるなり。是れ妙のなす事なり。たとへば妙は心なり。念は身なり。

一、諸増上慢者、聞必不敬信、妙は天地に満ちて、しかも我れたしかにあり、何事を爲すも直に妙のなすといふなり。尤もと聞きて其者の常の悪念言葉に及びず、故に妙をかくく安き事とみて、必ずばらうくるなり。妙に至れば直に佛体なり。世界にありかたき至極をいふなり。然る故に思量分別のすこしもありては、妙と違ふ。たしかにばらうくるなり。

縦滅一切見聞覺知、内守幽閑、猶爲法塵分別影事、幽閑は凡夫の及ぶ事ならず、中々有るかたき事なれども、佛にはなりかたし。

一、或る人問ふ。いさとしいける物、其形いろくなり、本来定るたねありやと。予云はく、たねあり、心は天地二たひなり。渠云はく、一たひのしるし如何。月を見、花を見、鐘を聞く、誰か別なる。是れ一たひのしるしなり。念に色々八萬四千の替りありとも、第二四生にわかづ。胎卵濕化是れなり。

一、胎生は形にて、生を受けるなり。人畜の類なり。愛欲の思ひ、念深きをもとにして、あらはれいつるなり。過去にて愛欲かるく、善根重きは、今人と生れ九の品に居す。或は天下の主、國の主以下はいふに及ばず、過去にて愛欲重く、善根かるきは、畜生の類と生を請ひる。

一、今の世に佛道を知らず、愛欲深きにまかせ我意多き人、死して體はもとに歸るなり、悪念残りて餓鬼畜生になるなり。
一、今の世に佛法ありがたしと思ひ、慈悲第一にして、是非をはなれ、身のわくをさり、自他の隔てなく、身念すきと云ふ人、生死萬物をはなれ、解脱をうるなり。

一、胎生は魚鳥の類なり。惡欲深き人、恩を返す事知らざる故、死して後己が肉を以て返すなり。

一、濕生は人の鼻窟深くして、惡氣惡念にまかせ、死する故に、濕生の虫となりて、佛法なき事ならず。高切の苦に當るなり。

一、化生は出づ念惡氣により、色々さまざまの形をうくるなり。萬物なへて心は形に隨ふ事疑ひなし、牛の形を得れば車をひく、馬の形を得れば、背に物載のずるが如し。

一、ある時惡心よかき人の、ねたるごころにいたし、起さず夢物語にゆるし、おそろしき事におび、苦しむどかた、佛法に思ひおたりし事あり。人間二生のあく念臨終にこそ、くちあはれ、まなこにつみふかき人は、天地猛火となり、いろくすさまじき、かたちもの來り、つれ行き地獄に落ちるおほゆる。冥界口ののみもおなじ事なり。佛のどかせられたり。此の惡人の夢物語にせいのよ、おびひきたりしなり。

一、かきそりのうたへねは、身はうごかざるに、惡念はぞぞおとしこへ、おびひきたりしなり。おびひきたりし身うせ、惡念の地獄に落ちくるしむとて、さまざまの形なし。よくかき心おぼはせ、おぼはせ入るへし。

一、ある人師、主君のおやの恩の次第を問ふ。予云はく、親は此の身をそたてぬるばかりなり。此のおやのおが事、腹のうちのゆるじみ、そなたのゆるじみ、筆にも紙にも及ひかたし。主君は此の身をやれなひ、妻子けんぞくをば、ひむなり、故に親の恩より深し。師は勸の作法を教へぬるには、主君親へのちうかうをわかさへし、しらする時は、直にちよちよなり。故に師の恩第一深し。いかにいばんや佛道の師、高切のくるもみそのかる、事、何としていひいたす、おろかに思は、したもさけぬへし。

一、ある人に教へていは、我より上たる人、まして道を行ふ人、徳ある人、あしくいへは必ず耐ふるなり。

一、ある人師を問ふ。過去現在のばちあり、おしなへて、人は或は死去、或は子孫絶え、或は身体うしなひ、或は縁をうしなふをば、とていふ。尤もなれども、常に思ふこと叶はす彼此か、か、このはか目に見えずしてくるしむ、是れ人しれぬはちなり。

佛地持論神也。天道也。見聞覺知の主也。高法を離れて高法はねたが生死をばなれて世大安樂なり。

念

見聞覺知の主也。色欲・利欲・嫉妬ふかくまよひ、常に身を思ふ故苦也。前を願ひ、後を悔い、我相高慢甚たつよし。

或る人に
いろ／＼に妄想おこるくすりにばたせんとやうにしくものはなし

或る人に
平常に五戒をつよくたもちなはつゝに破戒のびくとなるへし

或る人のもとめにまかせ
いかせん法の道にはうとくもしぬるまことを知る人もかな

常に知恵ふかき人に
かしてさは我が身のためのかたきなりをるかになればすみよしの神

あまが世を久しと思ふ人に
世中はかくれあそびにさもにたりまよひのうちを我が身とおもふ

入るまのうへに思

有るかたきまことの法のおしへかなしらぬ處を我が物にして

大法どふ人に

心こそまことの法のみことなれいかはとしてみしられさりけり

ある人に

さりどては死ぬるといふを外にしていかに法のみちに入るべき

たしかに道をとふ人に

朝夕に誠死ぬる人あらば常に浮世はよそにわたらん

佛道心かけし人に

さかさまに横すちかひにどふときは我がものならぬ我が物もなし

あまり人のよしあしをいふ人に

さらてたにそのかまよひのいふせきにほなひそへたり人のよしあし

世をなかく思ふ人に

いつまでもわかものせせん世中はきのふにけふはかはる習ひを

佛を願ひ誠を知らぬ人は

我がむねの佛を拜かすも、ねたはちくしやうとなるしるしなりけり

一、孔子曰く、我道以貫之、そのたまふ心は、天地に通貫すと云ふことなり。佛法の摩訶般若のことなり。

一、ある人が孔子不語怪力亂神也、めかたとしてかたり給はぬとてひし人に、予云はく、聖人にはなきことなり。問ふ人のいはく、もろこし人のいへるは、怪力亂神は正しからざるに非らず。孔子かたり給はぬとなり。

一、親のつとめをうけし人、父は我が子とて、ふびんに思へども、けい母はにくむ。子は是れを知らず。父のめいをありがたしとおもふ。もづりを請けたれども、ほごなくひんになる。まゝ母のおむむをうけし故なり。父死して後まゝ母残りて、是れも我が子をかなしめど、思ふに替なり。とにかくに念のおさるしさをしれども、我が悪念にさる事ならず。

一、おやのつとめをうけぬ人、けい母はとも多きうち、ある人すこしも親にうらみなく、弟にたからをあたへた、ぬしは物ことうすくえたる人、のちまで其家どめり。道さへ正しければ、天よりとみはあたへるなり。それを知らずして、我れかしてきに思ひて、何

も我がおもふまゝになす事のみ必ずあしくなるなり。

一、修行ふかく心かけし人、師のなきをなげき、山にいらんといへる人に、佛のこゝろ願はれぬるかどとへは、人中はさはりおほくして、かなひたがし、山に入り静にたづねんといへる。予云はく、佛をしりてやしなひのために入り給へといひてよめる。

さとりをもひらかてやまに入るひとはけたものとなるしるしなりけり
修行者によみてやる。

うつくしきかたちと見るは心なりまよふはおのか身よりなすなり

修行しやはなん女の中ををさげよ火にはつるさもなまるものなり

世中をのかれて見事なるものはほうすと色と欲となりけり

一、ある人のひしは、武士の家に佛道は其道たかひ、人もやはらかになりて、家風うしなはんといへる人に、何とてさなの玉ふそ、佛道必ず別にあらず、人の心を云ふ也。すなはなる心にては天下國家よく治るへし。たとへは主君の命にかはり死すとも、大難たしかならば、直に生死をのかれ、心やすかるへし。亂世にてきみかた隔てぬるとき、しひ心深く正しき大將には、隨者多かるへし。軍法にも天のたすけ失ふ事あるまし、すな

はにたしきは、直に天なり。

一、人はどはかなきものなし、神佛にむかひ富貴をねかふ、願ふ心をやむれば富貴なることを知らず。

一、食に珍物をこのまんより、食好む時むかへはず、む事をしらす。

一、身によき事をこのまんより、身をおもはねばやすし。

一、かりにもおやの日、おろかにすることなかれ、必ず耐うくるなり。ことに生きたる親に、不孝はもつたゆなき事なり。主君師道の罰は、いふに及ばずおそろしき事なり。

一、無一物見つくること、たしかなれども、身の悪出て、日月を雲のへたつることし。よるひる我が身のあくをさるへし。人よりあしくいひ、あしくするとき、身のあくきもるとよろこぶへし。かくの如くつとめくして、身の業つくる時、たからにむかひ、色にそめてそまらぬ事たしかなり。其時人をとふらへはうかふ、人にをしへてうなづく。我が業のきぬうちに、もし道を問ふ人あらば、たかひの修行とおもひ、かたるへし、すこしもえたる心あらば、罰うくる事うたかひなし。

一、凡夫の願ひのあさましきよ、さためなきよとしりながら、定めん事を願ひ。年老いて

見くるしきと知りながら、命のびんことを願ひ。わかき時老人をさらひながら、我老ては、人にまじはらんことを願ひ。かなはぬと知りながら、口にて祝ひ心にて祝ふ。

一、或る人に救へて云はく。もとをよくつとむるにしかす。たどへは身のくろさを神佛にいのらんより、過去の業つくると思へばやむ。

一、物化つきたし女、あこれにてよくなる時。ある人正法に奇特なし、いかなればきせくありやといふ。予云はく、正法はきせくなし、平常心の人、物化つくはきせくなり。あこれでもどの人になる、更にきせくにあらず。尤どうなづく。

一、煩惱即菩提をとふ人に。いかに佛説のことし。彼れ曰く、我が如き凡夫のわざ、ぼたいたならば、佛法のわけなし。予云はく、道理なり、佛は心なり、心のなす業煩惱即菩提、生死即涅槃うたかひなし。修行せぬ人は菩提即煩惱なり。身の念出るは少しも善事なし、あさましき事なり。

一、老婆に逢ふ、本則参し給ふ由。則は何ぞ。婆云はく、阿誰、予能くく教へむ、釋迦彌勒もおしなべてつかふものあり、是れへおはせよといへば、其まゝ来る。予云はく、其方の身を只今つかひしものは何ぞ。婆云はく、無一物。予云はく、老婆をつかふ無一

〔本則〕 釋尊に垂示、本則、著語、阿誰、拈評等の稱あり、本則は佛祖機縁の本文を云ふ

物こそ、色々名を付け本則と云ふ、是れを知らずして、外をもとむる迷ふなり。婆云はく、有りかたし、いかして養ひ得んといふ。予云はく、身の悪にけかさぬを修行といふなり。

一、ある人にをしへて、此の世へは死にこそきたれ、いかにきたりと思ふ故に、死をくるしむなり。つねく死の事を思ふ人は、一大事の死を心にかけて、何物か死ぬるぞ、何ものかいてゐるとみれば、心は虚空と一たひにて、生死萬物をのかれたるものなり。身はいきつ死つするなり。身には何物かなるとおもへば、念か生をかゆるなり。念は何物かなると思へば、心のとこはる處なり。一念つよく起れば、身の死を顧みず、おそろしきものなり。色々へんするも念なり。因果歴然はみな念なり。

一、手むかし思ひしは、死して後何もあらずし、いきてある内こそ大事と思ひしに。死人女にとりつき、勘定きはめ。又蛇になりくびにまきつく。思へば死してのちある事、たしかなりとおぼろく。佛は極樂せかいに生し、大安樂を得んと思ひしに、今世にて身のあくなければ大安樂なり。さて又行くべきさなきし、こゝにゐるものなし、萬事にむかひ、しなくして應じて、あやまりなし。かゝる有りかたき事佛世に出おはしませし御恩

におろかにおもはし、したるさげぬへし。地獄といへば遠きにあらす、直に此の身のあくにくるしめらるゝなり。此のあく今の世にのかれはねば、この身はかなくなるとき、其念行きて生をかゆるなり。惡念あるは必ず畜生の形にかはること疑ひなし、かなしと云ふもおろかなり。身の業つさぬうちに、人に佛法かたる事なかれ、人に迷ひをかくる故、又むくひをうくること疑ひなし。身の業さるには佛の教にまかせ、我が身のどがを、つよく佛にいのりて、つよくさるへし、必ず身のどかさゆるなり。

一、ある人神道の物かたり、いろくむづかしくするにより、予教へて云はく、たとへば素盞鳴尊は大あらし神なり。出雲の國へおい入りて、天照太神日本のあるじとなり玉ふとき、萬事によるし。これは人の身をすさの尊にたとへり。身の念おこるとき、死を顧みぬ大あくするなり。身なければ、つねにもたかなり、これ人々のこゝろを天照太神にたとへたり。

一、佛法者か如來の教へにちかへり、唯心淨土は心のすなはなるとの玉ひ。己身の彌陀は身とらまにの玉ふ。三尊の來迎紫雲など、方便に迷ふ。禪は法論に氣をたて。妙法阿字はさねんにまざる。かくなり行くあたましき事なり。

- 一、向神禱不語君臣父子夫婦兄弟朋友事其心即受罰。
- 一、向佛禱除妄念成佛罪業即消滅。
- 一、聖人に少しも智慧なし。賢人は上上智あり。上々智を以て、聖人をうかぶことおぼつかなし。
- 一、聖は天地萬物に通貫するなり。たま／＼人間の形を得て、もし知ることありとていへとも智慧出て日月のくもるが如し。
- 一、聖人は今來世の事を知らず。
- 一、凡夫は今來世の事を知る。

予從少年、生陋巷之内、形質拙而住澠州關之故川里、尋常爲牧牛業矣。至志學時、隨父遊於洛陽、逍遙而及於壯年、觀浮世之變、思別傳之旨特地、剃除鬚髮、替染衣袖、尋師訪道、東漂西漂、露眠草宿、歲已尙矣。茲有澠陽東北三山陰導師、爲人拙釘拔楔、予直去入室、自被示諭已來三二十年、於喫茶喫飯上亦保養此事矣。或時有禪門之客、來訪相見、古之相識也。供以魚茶淡飯、教客而一宿

焉。客謂予曰、佛道高靈而都無實、汝何陷乎哉。予對曰、見聖人之書、無自談談他之語、爲什麼、汝之語與聖人語異哉。不知客之語、是乎、不是乎、故屢取聖人之語、間加筆作、以備來徹笑矣。

寬文十二壬子仲秋日

至道菴主

假名法語終

月舟夜話

解題

續日本高僧傳および洞上聯燈錄等に據るに、月舟禪師、法諱を宗胡といひ、別に可懸齋と號す。肥前國杵島郡武雄の藩士原田種正の子なり。母は末次氏、最も賢婦の稱あり。十二歳の春、圓應寺華岳和尚に投して薙染す。十六歳におよんで錫を振つて東にあそぶ、時に萬安和尚、丹波の瑞巖にあり道譽高きを聞き、ゆきて所解を質すに、和尚、その法器なるを知り、いどねもころに提撕す。ある日、山行の次、失脚して地に倒れ、廓然として大無礙なるを得たりき。尋て愚溪、透關諸老に請益し、終に白峰玄滴和尚の室に入て祖位に就きぬ。元祿九年正月十日、眠ひるか如くにして化す。壽七十九。法臘六十又七。法嗣には、円山、徳翁、雲山、祖道の諸老あり。

けだし聞く、足利民の末造より、洞上の宗風やうやく衰へ、江湖また一人の授戒法則をも知る者なきにいたりき。幸にして月舟古佛この際に起り、高く法幢を大乘古刹に建て、數千百人の舞象を陶冶し、その古轍を復することを得たり。されば眞言の竺道契上人もまた

ふかく禪師の功を稱して、その傳を法本科の中に收めぬ。
この篇は、禪師が夜話せられしを、門人ら、そを畫いつけてかくは名けたるものなり。こ
はふるくより寫本にて傳はり、又の名を月舟假名法語あるは月舟示衆など、題せり。今は
舊題に従ふ。

夜話

月舟禪師

初心晚學の衆、必ず退屈心を生ずる事勿れ。菩提心退く念生すると、上下不和合になる者
ぞ。不和合の處より諸魔取込んで、修行者を惱亂する者ぞ。魔境に侵さるゝより、一切惡
として作らずと云ふこと無き者を程に、上下氷乳の如くに和合して、一事に就て嚴しく工
夫辨道せよ。道元和尚曰く、一事一色の辨道、只管打坐ずかんの法門、身心脱落の工夫が、祖師
禪の根本、直指單傳の正宗ぞ。此の處に於て大悟大徹と云ふも、遂に麓ふもとの事ぞ。元より明
かなる靈源に迷悟の沙汰は無き者ぞ。今時の唐僧衆、一則の公案を授けては、悟を肝要と
示めず。夫れも初學を引き入るゝ方便にはよけれども、此の根本より見れば、大に本意を
失ふたことぞ。われひかし參州の長圓寺に住せしとき、多般の公案を授けて工夫させしけ
れども、打成一片混然として手に入れ、大悟大徹の境界を得る者は少し。多くは公案を擔
て、或は胸の痛になり、鬱氣癆咳の病に成り、或は様々分別を生じて理會しけれども、公
案の本意には彌々遠ざかりき。剩さへ退屈して、末世の小根劣機にしては、上古の如く大

〔萬安和尚〕 法華を英種といひ、俗姓遠山氏、江戸の

悟大徹はなまぬとて、本の凡夫より悪しくなる者ぞ。實に哀まじき事よ。眞實大疑の起りたる時は、只一七日にも一則の公案を寤寐に恒にして、萬縁に轉せられず、只渾然たる境界になる者ぞ。其の時自心歡喜の心か生じて休まんど。織かも此の心起れば、早く般若の種子となつて、菩提心を退く事は無き者ぞ。此の上を修行するが、眞實不慮底の辨道ぞ。夫れよりしては、行住坐臥中、着衣喫飯の上、佛法世法ともに打成して一般の境界と成りて、一事として別なる事は無き者ぞ。只此理の現するまでか肝要ぞ。現した上も織も退くと又其の境界を失する者ぞ。我昔し關東の多寶院に留錫せし時、古人の代語に、無心無心大無心、徹底無心大無心と云ふことを聞きて、自ら瓦礫木石の如くなる者を無心底に叶ふたかと思ひける折節、或書の内に、無心と云ふは自性を見得する義と云ふ事を見付けて、切て歡喜を生じて僧堂裡を離れず、晝夜眠らず、見性の道理を工夫しけれども、或時了々然として感發して、分明に自性を見得して、歡喜踊躍極まり無く、寢食を忘れて坐禪工夫しけれども、其の時善き師家無し、自身發得のみにて、那邊這邊としければ、其の時の境界をそろ／＼と失ひき時、萬安和尚丹州に住むの由を聞きて、學者接得の手段なか／＼並びなしと風聞有りければ、是れ則ち今時大悟の人にてあらん程に思ひ、夫れより上方に登り

人なり。起雲の源室を禮して難染し、また嚴山、洞谷、大焉諸公に參す。承應三年八月、六十四歳にて示寂す。

〔華嚴會上〕 華嚴經は圓頓の教にて極めて高尚の經なり、釋尊の經を説き給ひし時は舍利弗、目連等の諸大菩薩を除くの外

萬安和尚に參しければ、彼の會下にては、其の頃専ら勤學しけるに依て、我も師の教によりて學問せり。其の時師、人天眼目を講せり。我夜は只管打坐工夫し、明ければ衆と共に講談を聞けり。師の講するより面白き道理など現前して、工夫の助となりし如き時は、氣力も健にして件の工夫をしけれども、今は年老い力弱くして、其の時の様にならんと。今のわかき衆、精根の健なる間に光陰を惜んで、只管打坐工夫せよ。唯信心を起すより外の事はないぞ。信心起りたる時は、身命は茶の葉より軽くして、喪身失命を顧みずども、時の隙をも惜み、道業を成せんことを勵む者ぞ。その如く一年にても乃至一月にても、一時にても、或は一念にても、至極有難き念を起して趣向するなれば、未來永劫、阿耨菩提の因縁とならん。諷て初發心時便成正覺をとて、但た初發心の時が肝要ぞ。如何なる大乘根の菩薩も、初發心の時の如く保つことはならん者ぞ。故に初發心の功德廣大なることは、華嚴會上大菩薩よりも甚だ勝れたりと諸經に説くこと分明に正法眼藏發菩提心の卷に宣へ玉ふ。只初發心の時に猛烈の工夫なき故に、多くは修行者病者となるぞ。涅槃經に茅を扱く喩の如く、茅を取るに寸度強く握て引く時は、何程も抜き出すぞ。若し少しも弱く握る時は、必ず手を傷し疵を蒙る者ぞ。學道の人も亦是の如し、緩かも油斷し退屈する隙かあ

は空の如くにして
若も解する能はま
りしといふ。

れば、必ず手脚を破る程に、努力々々。

又示して曰く、學道は常に謙卑の心を生じて、一切恭敬より外の事はないぞ。大悲神咒觀相千心是の中にも、卑下心是を肝要とせり。趙州の曰く、七歳の童子にても我に勝る者あれば、師と學ばんとなればなり。趙州すら如是なるに、今時の學者、一切聞法修行の志薄きは、實に末世の澆運甚だ淺ましき事ぞ。猛烈の志なき時は、見聞の利益が甚だ好き者ぞ。先聖の古鏡照心の教に、慣て放棄の暇には、祖師の語錄行狀等、又華嚴、法華、般若、諸の大乗經を看讀せよ。佛祖の教を見れば、必ず信心を感發して殊勝なる者ぞ。われ長老となつて後山居せしに、毎日法華を訓せり。一日、常不輕菩薩品を讀まんとて、一生餘縁を難へす、禮拜一行のみを修し、四衆人天に向つては、當得作佛と云つて禮せし其の功德に依て、臨命終の時に至て、空中に於て過去の諸佛説き玉ふ妙法蓮華經の偈を聞きて、六根清淨なるぞ。其の事を得て二百萬億那由他の壽命を増し、人天の爲めに此の法華を説き玉ふと云ふ處に至て、頓に感發して流るゝ涙四五日も留らざりき。實に不輕菩薩一生證果を得玉ふことは、但た禮拜一行のみにして、餘縁には預からんぞ。如是感發して、有難く混然たる信心起ると云ふも、此の經を看讀したる故ぞ。又曰く、道元和尚云はく、只管打坐

〔一色の辨道〕打
成一片の辨道と云
ふと同し。

と云ふ事は、只坐禪と云ふは、調息の法に依て、出入の息是れ長是れ短と知るぞ。經行には前歩後歩の上に一步も差はずして、只魚の水を行き鳥の空を飛ぶが如くしたがよひぞ、直に須らく足下無私にし去るが一色の辨道ぞ。念經誦咒の時も一字も讀み差はぬ様に徹骨徹髓に誦むべし。我昔より經を拜誦するに、終に一字にても誦み差へず、一拜にても拜しそこなはず、殊に十方三世一切佛諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅蜜と云ふ處、最も是のみ肝要とする也。まかあるに今の大衆の手本を見るに、合掌問訊多くはせず、偶々合掌する者は、不詳々々にして、一人も全き者は見えす、實に淺ましき事ぞ。偶々遇ひかたき佛法に遇ひ、行ひがたき行事を行ひながら、徒に時を過さん事、實に惜しむべき事ぞ。其の如くしては、如何なる馬鹿な佛法わつてか、汝等をして道業を成就せしめんぞ。只世間世渡りの意を放下して、三時の念經、四時の坐禪のみを純にせよ。名利の心を遠け捨て、一事に就て工夫せば、暫時の間此の事は現前せずと云ふ事はない者ぞ。若し其の道理なくんば、老僧如何にも賭にせんとなり。昔し眞歇和尚の拈古を看せし時、僧は是れ僧、俗は是れ俗、山は是れ山、水は是れ水、何の欠少かあらんといふことを面白く思ひ、夫の如く一途工夫しければ、頓に其の境界現前して、他物はなかりしぞ。如是して覺えある故は、大乘偏に只

〔眞歇和尚の拈古〕
眞歇の三祖の信心
餘の拈古と稱する
番を云ふ。

管打坐の法に就て、專精に工夫すべし。然れば永平和尙の本懐に通し到達し、わか宗を斷絶せず。曩祖廣大の深恩を報し奉り、又是れ釋迦文佛の大恩を報しけるなり。光陰空しく渡ること勿れ。

又曰く、出家の本懐と云ふは、只名聞利養を求めず、道心堅固如法にし一生をすすより外に勝れたる事はなきぞ。われ十一歳の時、父母出家せしめんとて、眞言宗の寺に登らせけるに、因縁熟せざりしにや、我も心に肯はず、父母も心に決定せざりけるに依て、頼一作古頼家に歸り、又十二歳の時、春の彼岸の中に圓應寺華岳和尙の弟子にせんとて、我を携へて寺に登せ、師に對して曰く、此の子出家せしむる本意は、一子出家すれば、九族天に生すと傳へ聞けり。今我等老に至つて指したる善根なく、一生空しく過さんこと、實に未來の業報恐れあり、只偏に後世の助とせんと思ふ故に、博學多才なる貴僧と成りて、名利の爲めに便り好くあれと思はず、只道心堅固にして經咒讀咒し、出家如法にして一生を送り我等が菩提を助けよかしと願望しけるなり。功業不遇にして救へ玉ふ程、秋の彼岸の時分には、早や禪家日用の誦する所の經咒陀羅尼法華經までも讀み終り極て、其の年十月になりて、師、我をして古郷に歸へし父母に相見せしめけるに、父母歡喜の餘、隣近同輩の朋

友を集め、様々響應し慰めけるに、童子共おのれが物語りをばりて、扱て宗胡殿の望は如何と問ひければ、我曰く、われは出家の身なれば、只善き名僧とならんことを思ふのみなれども、若し此の肥前百萬石を我に賜はし、還俗せんと云ふ時に、朋友一時に手を拍て笑ひけるに、中に小賢き童子あり、問ふて曰く、其の知行を得て何にせんとなり。我答へて曰く、われ大名となり、われより勝れたる出家を五人も十人も取立は、大なる功徳にてはあるまいかといへば、分別淺き子供のことなれば、實に尤もと感しけるを、母壁を隔て聞きて、一間の障子をわけ、座席へ出て云はく、只今子供達の望み咄、如何にも聞き事なり。扱て宗胡殿の望みは沙汰の限りの事とて、氣色替へ申されけるは、昔日より日本大唐にても、王位を捨て、將軍又は大名の位を捨て、出家し、佛道修行すると傳へ聞くに、其方の望みは、如何なる天魔外道の云ふことか、我等、其方を出家せしむる本意に相違したる事ぞ。是れより再び寺にも歸へすまじ、又家にも置くまじと立腹しければ、朋友共肝をけて散しける。われ思ひけるは、兎角此の處に長居しては悪しからんと、早々寺に歸りける。其の後偶々母の處へ行くけれども、快くも逢ひ玉はず、顔色好からず、我も行かす。まばらく過ぎて關東へ發足せんと告げれば、その時始めて心打解けて、萬事旅の用

意等念頭にし玉ふ。離別の詞には、只如法なる出家になり、佛道修行して、我等が後世の善提を吊へとのみなり。其の後關東より久しく歸らざりければ、朝夕我が事を思ひ、兩眼泣きつゝしけり。わが母なりといへども、今思ふに實に賢女にてありける。故に我も最初出家の時、戒か強かりしより、今五六十年の出家を全くとげてあるぞ。今の如き者は、此の心よく知るがよいぞや。苟くも名利の名を擲け捨て、眞箇の出家となるべし。諸の功徳を論するに、如法なる出家の功徳より大なるはないぞ。其の事、正法眼藏出家功徳の卷に見えたり。福徳智慧の相好は、やがて佛に等しき轉輪聖王すら、なほ王位を捨て出家して佛道修行し玉ふに、まして況や日本大唐の粟散國の王などの功徳は、轉輪聖王の毫髮にも當らんど。殊に其の下に於て何程の名利を得たればとて、又一毫を百千萬分にしたる一分に當るべきにてはないぞ。如何是れある上は、よく有爲の法を顧みて、根本に立ちかへり如法出家を遂げよ。如法と云ふて、今時間墨染の袈裟に大なる珠數を首に掛けて、殊勝げに律僧面をかまひまはるぞ。畢竟其は名利名聞僧の有相執着の大凡夫ぞ。其の如くでは、根本如法の處へは爾々遠ざかり。扱て單傳直指の如法と云ふは、事大小となく、叢林の規矩に順するより外の事はないぞ。百丈和尚始めて規矩を立て玉ふ時、律家より難問して曰

〔百丈和尚〕百丈

大智禪師「疎亮清規」を著して叢林の規矩始めて備はる。

く、大乘小乘律部分明にして、欠けたる事もなきに、如何なる心なれば、私に制法を立つるとあれば、答へて曰く、吾か制する所は、大乘小乘に違するに非ず。大乘小乘に局するに非ず。博約折中して制範を設く、其の宜しき所を取て行する也。扱て宜しき所と云ふが肝要ぞ。儒家の中庸など、云ふ様な事ではないぞ。其の肝要と云ふは何ぞ、明惠上人の宜玉ふ所の「あるべきやうわ」の七字の金文ぞ。是れ即ち佛出世の本懐、唯佛と佛との能く究盡し玉ふ諸法實相の根本なり。是れを如是經とも云へり。是れ即ち永平の規矩に見えたる法なり。則ち是れ永平安居の一卷なり。是れを命脈とし手脚とし、踴躍して只三時の念經、四時の坐禪を徹骨徹髓にして、着衣喫飯、屙尿放尿を全うするのみぞ。是れ即ち佛向上の勤とする者ぞ。根本如法の勤行と云ふに、別の勤といふはないぞ。只此の「あるべきやうわ」の一法のみぞ。譬へば魚の水を以て全體通身とし、水を以て尾鱗として、活潑々地するが如く、纒かも水をはなれば、早く死地となるぞ。如是佛を祖々共に此の安居を行じましますこと、三世十方の諸佛も如法にして、一夏も欠きたまはず。安居は、佛祖の皮肉骨髓にして、水と魚との如し。纒かも如是安居を離れて被夏すれば、早く佛法海中の死屍となるぞ。如是にして脚眼下の事を照顧せよ。必ず外に向ふて死に至り、死漢と成り、

〔被夏〕九旬結制の安居を守るを結夏と云ふ、被夏は

月夜夜話

と守らるる
なり。

我と未來の業を招くこと勿れ。至願至禱。

月舟夜話終

卍庵假名法語

解題

この假名法語は、洞上の尊宿卍庵老人が、ある官人の教外の旨に志ふかくして教を請ひたるに、かいつらりて興へられしものなり。
卍庵老人の出處進退につきましては、洞上の舊記にもこれを記さず。或はいふ、寶永前後の人なりと。果して然るやいなやを知らず。なほ考ふべし。

之み守らるるに
たす。

我々未來の業を招くこと勿れ。至願至願。

月舟夜話終

卍庵假名法語

解題

この假名法語は、洞上の尊宿卍庵老人が、ある官人の教外の旨に志ふかくして教を請ひたるに、かいつらりて與へられしものなり。
卍庵老人の出處進退につきましては、洞上の齋記にもこれを記さず。或はいふ、寶永前後の人なりと。果して然るやいなやを知らず。なほ考ふべし。

假名法語

卍庵老人

示某官人

〔阿僧祇劫〕梵語、此に無數劫と云ふ。然れども不可數なるを顯はすのみにて數なきにあらず、故に三大と云ふ。

夫れ佛道長遠なりと雖も、畢竟大地に寸土なし、三大阿僧祇劫に修證辯成すと雖も、眞心遠からず、五百里險難の路あるも、實所近きに在り、參禪學道の人もし一步を誤り一念を動すれば、十萬億土百千萬劫を隔つ、直に須らく見性成佛すべし。如來一代の經教は、見性の開示にして、其の見性悟道に至つては、教外別傳不立文字なり。利鈍貴賤、出家在家東土西天、古代今時の差別あることなく、只た道心の有無と開示の邪正によれり。千佛萬祖指南するとも、自ら信心純一正念相續せざれば、見性悟道の時節あるべからず、是れ自心を以て自性を悟り、已眼を開て己身を明らむる所以なり。もし正念相續せず、工夫純一ならざれば、徒に海に入て沙を算ふるのみ。その正念とは無念なり、工夫とは無想なり。祖師道元禪師曰く、非思量底を思量する、是れ坐禪の要術なりと。十二時中、動靜に一味し、理事に二色して、猛烈に工夫せば、内外の諸塵便を失ひ、一切の障礙を離れ、善惡是

非、苦樂順逆、十時に脱落して、無始劫來、無明の命根を截斷し、空劫已前本來の面目に相見せえ。空劫以前にて遠き久しき事に非ず、古き昔の事と思ふべからず、即今見性の端的なり、放身捨命の時節なり。念佛誦經も同じく是れ命根を截斷するの利劍なりと心得べし。功を積み徳を累ねて、往生見佛すと思ふべからず、福徳果報を求るること勿れ、殊勝奇特を離却すべし。三世心不可得なれば、正念自ら現前す、行住坐臥、專精に工夫して、見聞覺知、喜怒哀樂の主人公を疑着せよ。若し着力微弱なる時は、眞疑現前せず、妄想除き難し、早成を得んと欲せば、心王附與の寶劍を提て一氣に進み、佛に逢は、佛を殺し、祖に逢は、祖を殺し、父母に逢は、父母を殺し、衆生に逢は、衆生を殺し、乃至有情無情、森羅萬象、山河大地、三世十方、善惡是非、其の外六根門頭、七識街邊に出沒去來するもの、一切皆殺し盡くして、大虛空界を轉身出頭せば、眞の大丈夫と謂ふべし。道裡に到つて諸佛衆生、菩提煩惱、生死涅槃、天道地獄、總に夢幻空華なることを疑はず。且つ參禪は、刹那も油斷あるべからず、出息入息、精神を抖擻し、前歩後歩、脚下を點顧して、匹馬單刀、百万の敵軍に驅入るか如くせよ。たゞ動靜の二境に對して、工夫純一ならざれば、少分の相應も得がたし。正念工夫は、動作中最も修鍊すべし、必ずしも靜を好むべからず、往々靜なれば、修行事速かなるか如く思ひ、動中は散亂するか如く思へども、靜處の修鍊得力は、動境に對するときに確實ならず、臆病懦弱の働さある者なり。然らば何をか得力と云はん、正念工夫とは、十二時中、吾に有る三昧、吾も亦不知なり、終日作務辨事すれども、疲勞あることなく、長時獨坐默立すれども退屈せず、理事一色して究明するを、實參實學といふ。早く諸法に通達し、萬事に自在なることを得んと欲せば、動中の工夫に越えたるはなし。故に辨道參玄の衲子は、聲色堆裡に向つて坐すべしと。三祖大師の曰く、一乘に赴かんと欲せば、六塵を惡む勿れ。是れ六塵を喜ひ好めと云ふにはあらず、水鳥の水に入れども、翎の濕はざるか如く、平生六塵の上は於て取らず捨てず、正念相續せよとの開示なり。もしまた六塵を嫌ひ避けは、聲聞の根性に墮して、永く佛道を成せず、明に見性し去らば、六塵即ち禪定、五欲即ち一乘にして、諸法實相なり。動靜不二の大禪定に入て、身心共に脱落す。最初より六塵五欲を嫌ふて修行する人は、假令心念空寂に觀想明了なるも、靜を離れて動境に交はる時、恰も魚の水を失ひ猿の樹を離れたるが如し。深く山林に入りて、永く塵縁を絶し、木食齋戒する人すら、工夫純一には容易になりかたし、況や假名の出家兒、薄實の在家、渡世の作業紛紜たるをや。賊に大信決定するか、大

〔七〕 眼耳鼻舌身意の六塵と末那識と云ふ。

非、苦樂順逆、十時に脱落して、無始劫來、無明の命根を截斷し、空劫已前本來の面目に相見せえ。空劫以前にて遠き久しき事に非ず、古き昔の事と思ふべからず、即今見性の端的なり、放身捨命の時節なり。念佛誦經も同じく是れ命根を截斷するの利劍なりと心得べし。功を積み徳を累ねて、往生見佛すと思ふべからず、福徳果報を求るること勿れ、殊勝奇特を離却すべし。三世心不可得なれば、正念自ら現前す、行住坐臥、專精に工夫して、見聞覺知、喜怒哀樂の主人公を疑着せよ。若し着力微弱なる時は、眞疑現前せず、妄想除き難し、早成を得んと欲せば、心王附與の寶劍を提て一氣に進み、佛に逢は、佛を殺し、祖に逢は、祖を殺し、父母に逢は、父母を殺し、衆生に逢は、衆生を殺し、乃至有情無情、森羅萬象、山河大地、三世十方、善惡是非、其の外六根門頭、七識街邊に出沒去來するもの、一切皆殺し盡くして、大虛空界を轉身出頭せば、眞の大丈夫と謂ふべし。道裡に到つて諸佛衆生、菩提煩惱、生死涅槃、天道地獄、總に夢幻空華なることを疑はず。且つ參禪は、刹那も油斷あるべからず、出息入息、精神を抖擻し、前歩後歩、脚下を點顧して、匹馬單刀、百万の敵軍に驅入るか如くせよ。たゞ動靜の二境に對して、工夫純一ならざれば、少分の相應も得がたし。正念工夫は、動作中最も修鍊すべし、必ずしも靜を好むべからず、往々靜なれば、修行事速かなるか如く思ひ、動中は散亂するか如く思へども、靜處の修鍊得力は、動境に對するときに確實ならず、臆病懦弱の働さある者なり。然らば何をか得力と云はん、正念工夫とは、十二時中、吾に有る三昧、吾も亦不知なり、終日作務辨事すれども、疲勞あることなく、長時獨坐默立すれども退屈せず、理事一色して究明するを、實參實學といふ。早く諸法に通達し、萬事に自在なることを得んと欲せば、動中の工夫に越えたるはなし。故に辨道參玄の衲子は、聲色堆裡に向つて坐すべしと。三祖大師の曰く、一乘に赴かんと欲せば、六塵を惡む勿れ。是れ六塵を喜ひ好めと云ふにはあらず、水鳥の水に入れども、翎の濕はざるか如く、平生六塵の上は於て取らず捨てず、正念相續せよとの開示なり。もしまた六塵を嫌ひ避けは、聲聞の根性に墮して、永く佛道を成せず、明に見性し去らば、六塵即ち禪定、五欲即ち一乘にして、諸法實相なり。動靜不二の大禪定に入て、身心共に脱落す。最初より六塵五欲を嫌ふて修行する人は、假令心念空寂に觀想明了なるも、靜を離れて動境に交はる時、恰も魚の水を失ひ猿の樹を離れたるが如し。深く山林に入りて、永く塵縁を絶し、木食齋戒する人すら、工夫純一には容易になりかたし、況や假名の出家兒、薄實の在家、渡世の作業紛紜たるをや。賊に大信決定するか、大

疑充塞するか、大願發起するか、大死到來するかにあらざれば、理事靜工夫純一なりかたし、専ら光陰を惜み、壽命を顧みて、欲塵の中にも只管に工夫し、サマシ 專直に進歩せば、鑿壁放開し。須彌踏破する底の大歡喜を得て、塵中の主宰となるべし。噲へは火中に咲きたる蓮華の火氣に逢ふてうたゝ色香を増すか如し。謂ふこと勿れ、在家塵欲の身にして坐禪し難し、世務繁多にて工夫なり難し、或は仕官奉行の身も修行すること能はず、貧窮多病にして辨道力に及ばず。是れ皆信心起らず、道念薄きか爲めなり。生死事大なり、世間實に無常なりと觀すれば、菩提心增長して、吾我名利の儉心漸く盡却し、理事一色の坐禪辨道となる。譬へは人あり、群集の中にて一人の愛子を失ふか、大切の財寶を落失せんは、物さはがしく人目多しとて拾置くべきや、家業繁多、困窮多病なりとて尋ね申すまじきや。群集多勢の中に入ても、夜を日に繼ても、一回尋ね出して我か手に入らぬ限りは、心中穩かならざるが如し。たま〜人となり正法を見聞するは、千生の一遇なり。然るを渡世名利の爲めに坐禪工夫を退廢するは、諸佛の法身慧命を世財よりも輕んずるなり。その愛子を失ひ財寶を遺落するか如く、專念に尋ね求めは、一度逢ふて喜悅の眉を開かずといふことなし。夫れ公卿太夫士農工商ともに千種萬般の家事あり、何ぞ終日默坐靜觀する

の暇あらんや。此に坐禪工夫を修得せざる禪師ありて、強ひて幽閑寂靜を教へ、聚落市廛を嫌ひ、業務作業の中には、參禪工夫ならざるよしを示めて、學人をして用心を錯らしむ。聞く人これか爲めに難作難行の思をなして、發心修行を退廢し、捨父逃逝して、生々客作の賤人となること、實に哀むべし。宿因にて深き志あるも、道のために家業を怠り、公務を疎かにし、忠孝信義を失ふに至る。古人のいへる如く、今人も戀しき色を好む程に切なる道念あらば、如何ばかり多用の身分、繁華の住居たりとも、工夫相續して大疑現前せずといふことなし。古人今人共に作用の中に多くは悟道見性せり、三世十方、六道四生、一心の所現にあらずといふことなし。心生すれば種々の法生し、心滅すれば種々の法滅す一心不生なれば方法どがなし。この故に縦ひ深山溪水寂寞清閑の處に居て、默坐靜觀するとも、心猿意馬の路絶せざれば、空しく光陰を送るのみ。三祖大師曰く、動を止めて止に歸すれば、止更に彌々動す。若し妄念を除き眞如を求めんとせば、精神を勞し元氣を損して、疾病發するのみならず、昏沈散亂して魔坑に落つ、宜しく止觀の二法を用ひて、戒定慧を圓にすべし。止觀とは、止は禪定なり觀は智慧なり。止の時は、心意識の運轉なく一切の非法非律を防ぎ、無明の命根截斷して、僧俗の戒法輕重共に統犯ある事なし。觀

の時は身に行相の愛執なく、一切の我見法見を空し、無始の業障を滅除して、自己の靈光内外普く照破せざることをなし。觀の外に止なく、止の外に觀なし。空假の二法を愛帶して中道第一義を成立す。坐禪の儀則、工夫の用心、佛祖傳來の相承あり。又聲聞二乘天人外道等の坐禪あることを知るへし。無上道を志す者は、佛祖の坐禪を修學すへし。佛祖は始めより衆生を忘れず、大悲を起したまふ。結跏趺坐、端身正念、止觀調息は、坐禪の要術なり。清閑の室、或は樹下石上にも厚く坐物を敷き、身の衣帶を寛くして坐せよ、先づ右足を曲けて左の股の上に置き、次に左足を右の股の上に安し、而して右の掌を左足の上に置き、左の掌を其上に重ねて、兩手の大拇指を向ひ挂へよ、仰がす俯がす端直にして耳と肩と對し鼻と臍と對し、眼は常の如く開いて鼻端を守るべし、閉目して昏睡を招くこと勿れ。心を左掌の内に安住して、氣は丹田腰脚等に充塞せしめよ。臍輪氣海を張り、欠氣一息して唇齒を閉ち、清氣鼻より入りて微息相通し、急ならず緩ならず出入相覺え、非思量底を思量し、兀々地に工夫せば、元氣自然に充實して、臍腹氣の如く鞠の如くならん、安詳徐歩、一息半跌、直路順回は、經行の軌法なり。若し定より起て經行せんと欲せば、按摩搖振して安詳に起つへし、緩歩して直路を經歷せよ。先づ右足を移し左足次て運べ、歩を移すこと半跌の

量にして、足を運ぶこと一息の間なるへし、面前七尺計の地を觀して、身形端直に歩して廻らんと欲せば右に廻るへし、前歩後歩、工夫純一ならば、眞理現前して脚下無私ならん。調息の法は坐定の後、心氣を氣海丹田に養ひ、臍輪より逆上せしめず、鼻孔より息を通し急ならず緩ならず、喘せず風せず、出息と知り入息と覺照して、意識を息に緣して、上下出入せしめず、思惟分別せず、情解卜度せず、只管に出入息を覺えて一息をも放失せず、工夫相續せば、四大調適五臟皎潔にして、上部清涼、下部温暖、身心自然に大歡喜を生ずべし。行住坐臥共に空々寂々照々靈々を存せば、憤志一番猛烈に激發せよ。此時に至り微塵毫末も意識分別して、安樂見性の思わらは、百劫千生にも生死を出づること能はざらん、深く信心決定して、大死到來の工夫を憤發せば、忽然として桶底を脱却し丹竈を掀翻して、一念に萬劫を超過し、一足に三界を踏破せん。般若多羅尊者の出息衆縁に涉らず、入息蘊界に居らすとの玉ひしこと、何の疑ひ怪むことかあらん。初心未熟のとき、氣息結滯して調はさるときは、前後左右へ身相を搖振して、神心清爽ならしめ、臍下の濁氣を吐くしと、一息或は三息して、鼻息相通し、愈より細ならしめ、微々として出入せしめよ。若し又昏沈或は散亂せば、息を數へて一より十に至り捨て、また一より十、斯くの如く十

の數を極として數へて正念に出息を觀照すへし。或は四大分離を觀し、骨肉還本を觀し、九相六喻等を觀するも亦得たり。内觀養生の秘訣、仙家鍊丹の妙術も、佛教調息の法に本けり。精しく心を用ゐるときは、坐禪は實にこれ現當安樂の法門なり。仙書に曰く、養生の要は形を鍊るに如かず、形を鍊るの妙は神を凝らすにあり、神凝るときは氣聚る、氣聚るときは丹成る、丹成るときは形固し、形固るときは神全しと。知るへし長生不老の仙丹果して外物に非ざることを。臍下一寸半を氣海と云ひ、元氣を收め養ふ所なり。其の下を丹田と云ふ。精神を鍊合するの府也。神氣常に此の内に充實するときは、無病堅固にして不老長命なり。是の故に真人は氣を使はず、精を勞せず、神を屈せず。養生の術は國を守るに齊しと。夫れ神は君の如く、精は臣の如く、氣は民の如し。其民を愛するは其國を安んずる所以なり、其氣を惜むはその身を全する所以なり。氣竭くれば身死す、民散すれば國亡ふ、明主は心を下に專にし、暗君は意を下に恣にす、上に恣にするときは、臣僚寵を恃み權威に傲りて、下民の困窮を顧みず、斂臣貪り掠め、酷吏僞り剝く、忠良隠れ生民恨む。心を下に專にするときは、收納廉直にして賞罰亂れず、法度正しく豊儉節に應ず、土肥之國強く産豊に穀登る、地に荒なく民に飢なし。人身も亦然り、精氣常に丹田に充る時は

〔四魔〕 魔は梵語、具には魔羅と云ふ、此に奪命、又は殺者と言ふ、四魔は、一に蘊魔(色受想行識)二に煩惱魔、三に死魔四に天魔是なり。〔六賊〕 六賊を云ふ。

内凶動くことなく、外邪侵すことを能はず、六賊退散し四魔潜伏し、筋骨堅く血脉通し、心安く神健なり。若し邪境に奪はれ妄縁に引れて正念工夫を失はば、魔事競ひ起り業報集り責む、破戒放逸邪見我慢増長して佛種を斷滅するに至る。憐むへし人々智慧徳相を具足し如意寶珠を圓滿しなから、自ら下劣の凡夫となり、窮子となりて、多くは云ふ下根なり、病身なり、業障なり因縁なり、無師なり、末法なり、仕官なり、在家なり。又曰く、親子あり、眷屬あり、家業あり、世用あり、垢穢あり、煩惱あり、明日あり、來年あり、時節あり、來世ありと。自ら懈怠し、自ら怠屈し、放逸惰弱にして、發心修行せず、參問工夫せず參禪學道せず、三毒五欲を持前とし、誦曲名利を日送として、値ひ難き今生を虚しく過すのみならず、無始已來の罪業を累ねて、未來永劫に七難八苦を受くること、最も悲しみ怖るへし。たましく人身を受け、忝なくも佛教に値ひながら、自心の起滅を會せず、我跡の歸趣を知らず、生得の富貴を捨て、本具の光明を埋没して、佛性ありとだに知らず。悲むへし、正法衰滅し人智下劣にして、得道の人少く真正の師罕れ也。今時の學者發心元來正しからず、行脚多くは邪路に走る。中下の機は措て論せず、上根大志と稱せらる、人も往々名利を發心とし我慢を志氣として、師友の正邪を揀別せず、強ひて證悟奇特を求め、

〔黒山鬼窟〕 空寂
暗昏の境を云ふ。

自己の身心を放捨せず、専ら出世名譽をのぞむ、たま／＼精進勇猛に似たるあるも、事に
觸れて退惰し、縁に對して間斷し、功夫相續せず、大疑現前することなし。惜いかな終に
黒山鬼窟裡に死在して、斷見滅見空見を起し、或は神通光明裡に住著して、佛見法見常見
を生ず。或は惶々寂々靈々照々を認得して、如々法性の計較をなす。明眼の智識に見ゆる
も、已見を抛ちて學道せず。祖師の公案に參するも、精彩をつけて提撕せず。難透難解の
機關、理致意識妄解して透脱と稱す。其の師家たる者も心路絶せず、意句到らず、魔事現境
の處に活計を作して、戒律を犯し、因果を怖れず、却て看經禮佛只管打坐の二色辨道を放
下し、掃地汲水拾薪設食の鍛鍊長養を嫌ふ。叢林恰も十字街頭の荒物店の如く、詩歌文頌
書畫算印茶香醫易、其の外六藝方法を弄翫して、君臣無禮の安否を結び、賓主渡世の食輪
を轉し、機に隨ひ求に應じて買賣交易す。是れを接衆爲人の手段と云ひて可ならんや。參
禪辨道の志氣と名け難し。假令智慧は舍利弗しゃりぶつの如く神通は目連もくれんの如く富樓那ふろうなの辨舌を具
し、阿難の博識を懷きて、理として究めすと云ふことなく、義として通せすと云ふことな
く、法として明らめすと云ふことなく、神通光明を放出し、風雨雷電を變化し、鬼神狂
獸を調伏し、坐脫立亡を自由にし、徳は王公の師となり、名は權化の佛と呼はるゝも、財

色名利を抛たずんば、正念相續の人と云ひ難し、嗟呼僧俗ともに道念輕薄にして、名利と
放捨する底實に少れなり。故に諸方皆說禪講經と宗風とし、廣衆潤澤と繁昌とし、博學多
才を智慧と思ひ、名聞威勢を道徳と稱す、生死岸頭臘月二十日、何の用を作すにか堪えん、
一朝病痾を受くるときは、妄念轉た増して、心火逆上し苦痛備亂す。一息截斷の後、閻魔
大王怒眼を張り、鐵棒を撻りて相問はんは、笑止千萬の風情なるべし。熱々世間を觀す
るに、病に害せらるゝより、妄念に殺さるゝもの多し。妄念は毒蛇よりも怖るへし。妄
念を離るゝときは、病は實に是れ善知識なり、古へより重病苦痛と戰ひて、得力見性の入
數多なり、若し重き病を受くるときは、死を畏れず、生を顧みず、忍辱の鏡をかけ、忠
義の弓矢をたはさみ、勇猛の馬に跨り、精進の鞭を握り、唯一乘の旆を押し立て、少欲
無我を兵卒とし、譜代の正念工夫を大將とし、氣海丹田の心王城を堅り、五形鍊丹の兵糧
を貯へ、無念無想の計略を廻さは、四百四陣の病將一時に蜂起し、八萬四千の魔軍を後詰
とし、八識七情より攻め入るとも、少しも惶れず、終には心王の仁慈に飯し、大將の威
勢に伏し、兵卒の勇氣に畏れ、戈を倒し膝を屈して降參せんとす。十方に敵なく、全体に
苦なく、正邪一如、四海太平を歌ひ、二世安樂を得へし。昔し蒙山の異禪師は痾病を憂ひ

〔那由太子〕 天生
の那由太子といふ

悩みて、十死一生のとき、苦痛と戦ひて坐禪せり、少時ありて腹大に鳴動し、病病即刻に平
愈して大に悟入せりと云ふ。又予か朋友に雲州の僧某は、大飢寒を悩みて絶食すること
八日、大熱にて舌も焦け、晝夜の別もなく苦しみけるか、師家に呵責せられて、未悟を悔
む前非を知り、忽ち大誓を發して必死の念に住し、臥具を疊み齒を喰ひ縛りて、勇猛に坐
禪工夫しければ、病惱邪熱頓に消散して、内外清涼、身心歡喜地に入りて、本來不可得を
證す。予も二十八歳の冬、詩論の難事ありて、毒藥の害に逢ふ。全体燒痛法て暫時の間手脚
總身紫黑色となる、其の苦惱の劇切なること言を以て宣へかたし、無間焦熱の苦も此の上
はあるまじと思はれたり。時に大懺悔を發す、抑も十七歳を初發心として、正師を尋ね禁
林に入りて、參禪辨道し水に立ち雪に坐して、脇を席に着けず、夙夜に忘却せざる事十年
餘越後の長泉寺に冬安居して、元綱老師の鉗籠を受け、生死を透脱し、自己を脱離せしめ
思へり、今此の毒藥に苦められて、轉處自由ならざる事かほど大勇猛を發し、劇苦と戦ひ
て跏趺坐す、此の時未だ初夜を打せず、正念調息して四大分離觀に入る、氣息忽ち滅盡して
眞觀現前し、性相ともに忘却して正念相續す。時に鐘聲の來りて虚空に響くあり、我師人
相を觀照するに、一旦の虚空に針を掛けず、親しく那由の本身説法を解す、身体と動搖し

は肉を折きて母に
還し、骨を折きて
父に還し、然る後
本身を現し、大神
力を運らして、父
母の爲めに説法せ
しといふ。
〔無生忍〕 萬法は
皆無生なりと悟り
て諸の惱害を忍ぶ
を云ふ。

手脚を屈伸すれば、柔順皎潔なること尋常と大に異なり、前來の苦痛昨夜の夢の如く、全
体の色も亦常の如し、身心に大慶快を生じて、安詳として坐を起ち、窓外に出で東方を見
れば、最早曉明なり、少時ありて吐瀉一時に來る、恰も臟腑皆盡きて皮骨のみ連立するか
如し、活中に死を得て死中に活を得ること、毒藥變じて甘露の妙藥となるに似たり、初め
て憎愛の二見を離れて、冤親平等を證することを得たり。偕て又書しも、勇施菩薩の如き
は、禁戒を犯して、苦惱の中に大誓を發し、頓に無生忍を悟る。數千の蚊子にさされて、
痾痒と戦ひて悟入するあり。或は身體を割切せられ、皮肉を燒針し苦痛と戦ひ契悟するあ
り。雲門大師は折脚せられて大悟し、嵯川新右衛門は喧嘩の席にて省悟し、魯氏將軍は陣
中に安心す。其の戦ふと云ふは、彼れを怖れず、彼れに與せず、唯正念工夫を押し立て、
無二無三に進めば、苦痛も妄念も一團の精神となり、一色の辨道となる。若し正念工夫を
失するときは、妄念邪氣の爲りに、今生の身心を責め苦めらるゝのみならず、未來永劫の
生死を相續して、大苦を受くること、古へも今も僧と云ひ俗と云ひ、擧げて計り難し。抑
も君として正念工夫なきは、生民を安んずる能はず、臣として正念工夫なきは、忠義を全ふす
ること能はず、民として正念工夫なきは、孝信を竭すこと能はず。是の故に返すくも僧

出處法華

心決定して、行住坐臥、喫茶喫飯、扇屎放尿、一切の事業を打して一則の話題となし、正念工夫暫くも間断なかるべし。參禪は、神氣健に工夫猛烈ならんことを肝要とす、自ら輕賤し、自ら懦弱に、自ら下劣なるべからず、佛祖も是の如く、我も是の如し、舜何人ぞ、われ何人ぞ、聖人も眼横鼻直、我れも眼横鼻直、出息入息、他の鼻孔をからす、前歩後歩他の脚を用ひすと、常に超佛越祖の志氣を損せず、自心の根源に就て參し來り究め去るを大丈夫の意氣と云ふ。這裡に到りて出家在家を問はず、男子女性を論せず、利鈍賢愚を分たず、繁務無事を揀はず、大誓を立し、大願を發し、大信を具し、大疑を起すもの、見性悟道して佛祖の皮肉を得すと云ふことなし。少林の總持、曹溪の淨居、了然、道意、如大、慧春、妙總、未笑の如き女性にして、志氣大丈夫に超え、修證佛祖の機關を透得す。維摩、龐老、陸亘、喪休、陳操、大年、東坡、無盡、其の外竺支扶桑に於て、明王賢臣居士夫人等の見性得法するもの百千に至る。此の身今生た度せずんば、更だ何れの生をか待たん。今日已に過ぎぬれば、壽命も亦隨て滅す。念々世相の無常を觀して、明日ありと思ふことをやめ、歩々心源の大道を踐みて、別路に向ふことなかれ。直に須らく万仞巖崖に手足を放ちて、身心一時に死却し去れば、恰も大虚空の正中に立つか如く、瑠璃瓶の中央に

〔龐老〕唐の龐居士のことなり、馬祖道一、大梅法常の諸禪師と交り樹籙類る峻險なりき。

〔三根〕上根、中根、下根なり。

坐するに似て、忽然として凡に非ず、聖に非ず、佛に非ず、心に非ず、物に非ざる底の大境界を突出し、心佛衆生第二人なき事を徹證せん。是れば此れ諸佛の法身、人を本具の自性なり。是れを悟るか故に佛祖となり、是れに迷ふか故に衆生となる。人根に利鈍あり、修證に頓漸ありと雖も、前來の開示秘訣は、頓悟成佛の法門にして、三根一圓の規則也。彼の漸を修學の二乘聲聞と天地懸隔せり。心空境寂照々靈々、不起一念の塵を佛性と思ふは、識神を本來人となし、賊を子となし、磚を鏡となし、鎗子を眞金となすが如し。是れはこれ根本生死の無明にして、氣息ある死人の如し。自己の光明を放出して、自己を返照し、山河大地を照破すること能はず、假令大悟現成し法身明了なるも、修功に染汚すれば佛道現前せず、向上更にまた向上の事あるを知るべし。祖師禪の如きは、明鏡臺に當るも直下に打破し、寶珠臺に在るも頓に擊破す。磨盤空裡に走り、東山水上を行く、幸に一切衆生悉有佛性の因縁あり、早く脚跟下一段の大事ありと知りて、十二時中行く底是れ何物ぞ、坐する底是れ何物ぞ、作す底是れ何物ぞ、心是れ何物ぞと、理に就きて究め去り、事に就きて究め來りて、只管に疑ひ勇猛に進んで、三年五年選窟せずんば、大疑現前して大悟せずと云ふことなし。徹底大悟すれども、佛法の大海漸く入れは、漸く深きことを知る

へし。若し或は菩提の成すへきなく、衆生の度すへきもなしと思ひ、或は一代藏經は衆を拭ふの故紙、一千七百の公案一握に足らずと思は、果して是れ脱落不得なり、見處不脱なり、祖關不透なり、偷心不死なり。此に於て憍心慢心を抛擲して、早く非を知らざれば、二乗の深坑に陥入して、佛祖の慧命を斷絶す、聖胎長養、悟後の修行、實に容易ならず。古人云はく、機位を離れされば、毒海に墮在す、須らく證上に修むることを知て、潜行密用、西來の祖道を保任すへし、銷りて所得の見を存し、永く守戒の窮鬼有財の餓夫となることなかれ。佛國土を現成し、佛境界を見得するも、一見して再見すべからず、莫はくは出息入息、工夫放下し、前念後念、滲漏を脱盡して、佛祖の骨髓を獲き、甘露の白法を施して、一切群生を利濟し、深大の恩徳に報謝すへし。愚者未熟なりと雖も、遠境の相識屢書翰を以て、參禪の要路工夫の用心を問ひ、今秋又使札を寄せて得力の可否を尋ね、同學の開示を望む、仕官重役の身にして、深切の志辭するに默止かたぐ、佛事世用繁務の中に於て燈下に白紙を染成し、法施を慳ます、祖師單傳の奧義に就きて、予が二十五年來の功夫を開放し、自心修行の大略を記贈して、行住坐臥の工夫を助け、念想止觀の用心に具ふ。これ予が漫説にあらず、一々證據ありと雖も、長文を嫌ひて之れを省き、只透脱の直路を指

〔白法〕 惡法を惡法と云ひ、善法を白法と云ふ。

示するのみ。定めて文字の差誤、義理の前後もあるへしと雖も、再看校正するに暇なし、覽る人只其の取るへきを取りて、捨つへきを捨つへし。實に是れ門を扣くの瓦子なり、月を見れば指頭を忘すへし、魚を得ば筌笱をすつへし、不立文字教外別傳を錯ること勿れ。我法妙難思なるか故に、止々不須説なり。畢竟如何。出息入息、前歩後歩。至切至勝。

假名法語終

莫妄想

解題

莫妄想は、古へより寫本にて傳はりしものにして、いまだ濟洞いづれの尊宿の物したるやを知らず。然はあれど、書中に近世大石内藏助殿云々といへるをもて見れば、正徳享保頭の人なること明なり。さるを或書に石平の鈴木正三老人の作なりといひき。こは大なる謬なり。老人は、明暦元年に身まかり、吉良邸夜襲は、四十五年ばかり後のことなり。老人の外に、別におなし名の碩徳ありしとも聞き侍らず。なほ舊記を探くるべし。

莫妄想

莫妄想

著者未詳

問。見性成佛と云ふが、本來無一物に何の性を見る事ぞや。

答。性は無形無體なり、此の性を見る時は、佛衆生の隔なく、無心無念の眞佛に合ふ。此の所を指して見性と云ふなり。

問。無心無念に合ふて後は如何。

答。冬は寒し、夏は暑し。

問。無心無念の所に於て如何ぞ寒暑ありや。

答。寒暑共に無心無念なり。寒なれば寒し、暑なれば暑し。

問。暑ければ寒ならん事を思ふなり。無心なる者か何として思ふぞ。

答。知らず。

問。知らずとならば賢愚共に知らず。然るを知るを賢とし、知らざるを愚と云ふは如何。

答。知らねば賢も愚も同じ。然るを知らぬ事を色々と妄に私案を以て分別するを、此を

愚と云ふ。又賢は知れぬと云ふ事を知りて、妄なる分別せず、唯た體機たる所をするを賢と云ふ。

問。成程妄なる分別は惡し。無心の本体なる所を以て見るときは、妄に無しとても分別すれば私心なり。私心とて無分別にて何をかする。飢えて食を思ひ、渴して飲を思ふも、分別にあらざるや。

答。渴して飲を思ふと分別と見るは非なり。分別と云ふは、未だ飢えざる先に若し飢えたらは如何せんと分別するを分別と云ふ。飢えて食を思ふは分別に非ず。此を體用にて云へば、飢えたるは見ずして體なり、食するは用なり、飢えたる時食するは、飢えたる時の用なり、分別して食を思ふに非ず。

問。事に當て思ふは分別に非ずとの譯聞えたり。然らば聖人無事のときは、枯木死灰の如くなる者に候や。

答。否然らず、天の流行息む時なし。道の體も息まず、聖人の心も息まず、是れを仁と云ふ。天の道にては、春は花咲き、秋は枯る、人道にては、子としては親を慕ひ、親としては子と思ふ。是れを息まずと云ふ。至哉

問。その息まざるものは、天と人と同じきか別か。

答。同じきなり。

問。天に類ひなし、人には病ざる者に因て類ひは、如何。

答。天にも憂樂あり、春は樂み、秋は憂ふ。然れども樂みても樂を知らず、憂ひても憂を知らず、夫れ故樂を求る事なく、憂とても避くる心なし。故に憂樂を常として怠らず。人は憂を厭ひ、樂を求む、爰に依て類となる。

問。然らば憂樂を知らざるか善く候や。

答。思はざるを善とするに非ず、善を見て喜び、惡を見て惡む、是れ私に非ず。

問。其の好惡するか分別に非ずや。

答。分別に非ず、善を好むは性善なるが故なり、惡を惡むも性善なるが故なり、前に云ふ如く體用なり。好惡するは性の用なり。

問。體用一なり、用に好惡あれば、體にも好惡あり、無形無體の性、何とて好惡するや。

答。性は無形無體なり、體用と云ふは、體と云ふ名あれば、又性の用あり、性の處に於ては好惡の類ひなし。

問。好悪なくんば、前に云ふ如く枯木死灰なる者に候哉。

答。左に非ず、好悪なしと云ふは、善と知りて善とも思はず、悪と知りて悪めとも悪に心なし。譬へば火に入てあつからず、水に入て、溺れざるが如し。是れを煩ひなしと云ふ。

問。溺れずあつからざる物は、如何なる物にて候や。

答。夫れを不可得と云ふ。

問。不可得とは得べからずと云ふ事にては無きや、得られぬ事なれば得る事は有るまじ、然るに古語に道は得ること有りとは、如何。

答。不可得とは、成程得られぬと云ふことなれ共、得られぬとはかりに心得ば不可得に非ず。不可得と云ふは、昨日も不可得、今日も不可得、明日も不可得にして、得るも得ざるも不可得なり。

問。得ざるは不可得なり。然るに得を不可得とは、如何。

答。得とは何を得たるぞ。

曰。得とは道を得るなり、又何にて手に入りたる事は、得と云ふに非ずや。

答。道を得て其の道を得とせば、得に非ず。如何となれば、道の跡は、暫くも住するもの

に非ず、又何にて手に入りたるを得と謂ふも、其の得たる物或は増し或は減す。然らば得も不可得に非ずや。

問。然らば不可得を知り得ば、萬事不可得に成り候哉。

答。否不可得に於て是れを不可得として止る事なし。前に云ふ如く得も得ざるも不可得なり、不可得には始もなく終もなし、念ふ毎に不可得にして怠ることなし、是れを取得たる人を悟道と云ふ。

問。不可得の所は得られざる故不可得なり。然るに取得らるゝ物に候哉。

答。取得と云ふは、見聞覚知の上に於て皆不可得に居ると云ふ。

問。其の不可得の用は、如何やうに行ふ事に候や。

答。行住坐臥皆用なり。

問。我云ふ處は不可得にして、其の不可得なるより不可得を行ふ事を云ふ。

答。我云ふ處も不可得の用を云ふ。汝不可得を行ふと思へば、行住坐臥不可得の用也。豈不可得を行ふと云ふ事かあらん。

問。古語に三尺の童も知ること易し、八十の翁も行ふ事難しと云ふ。然らば知る處を行ふ

事に非ず哉。

答。行ふ事難しとは、知りて夫れに成らざれば行はれず、故に行ひ難し。舜は仁義に由て行ふ、仁義を行ふに非ずと孟子の給ふ。

問。明哲人は作用本分可合。中人以下の者は志有りても、行ふ事は一生能はざる事に候哉。

答。左に非ず、本分に未だ至らざれども、懈らざる處か主と成れば行はるゝと云ふもの也。

問。不可得か主と成りて後、貴き事を云ふ時は、如何なる者にて候哉。貴き事なくては、古人といへども、精心を盡くすまし。

答。其處を得ば貴きを求める事もなく賤きを惡む事もなし、富貴貧賤に迷はぬを貴しとす。

問。其の所を得ば、富貴に勝りたる者に候哉。

答。富貴に勝りたるを見れば、勝劣を免れず、不可得の所が主となれば、富貴貧賤を忘るゝ

なり、爰を取つて貴しとす。然かも自ら貴しとも思はず。

問。我に貴き事を知らざるに、釋尊は何として唯我獨尊とはの給ふぞや。

答。釋尊の語は、我程尊き物なしと慢じ給ふ事にてはなし、人は其身其儘にて萬徳圓滿

の者也、其の満足したる身を知らば、天上天下唯我獨尊也、豈釋迦のみの事に有らんや

問。此身此儘にて満足したる譯は如何。

答。先づ此身自在なることを思ふべし、目に見て耳に聞き、鼻に嗅ぎ口に言ひ、夫れのみならず目に見て其音を聞ては其形を知り、香を嗅いで味を知り、口に入れて身を養ひ、言語を以て自由を爲し、手に持ち、足にて行きて自在なる、是れ満足に非ずや。

問。一身の動作する事は人に限らず、鳥獸も同じ。目に見、耳に聞き、足の歩行するを以て、萬徳圓滿杯と靈名を付くる程の事はなし。尊きと云ふからは、七珍萬寶を得たる如くなる心地ある事にては候はずや。

答。皆人器物の財を寶とする欲心より、此の身の有り難き事を知らず、目に見、口に言ひ、手に持ち、足に行く事を細に熟得して見るべし、眼耳鼻より手足に至るまで、斯の如く自由なる事は、目に見ると謂ふも目に見る所以なし、口に言ふと謂ふも口に言ふ所以なし、又足にて行けども足の歩行する所以なし。然るに斯の如く自在なるは萬徳に非ずや。此妙用を知らずして、外に妙を見んと思ふ迷心より、此身の有り難き事を知らず、此身の大切なる事を通く譬へて云は、大欲心なる者有りて、利欲の爲りに禽獸と云はれても厭はず、財寶を好む者あり、箇程大欲の者にては、將に大黄金百枚を與へん、

〔七珍〕七寶を云ふ、七寶は諸經の既く所各相異なれり、今歸藏經に據れば、金、銀、珊瑚、琥珀、瑪瑙、瑠璃、砗磲なり。

今命を取らんと云は、其の金を喜び命を惜まず死すべきや、如何なるものにて、勇
能く死ぬる事なし。然らば此の身程大切なる物はなし、然るに此の身の外に資ありと思
ふは、皆欲心なり、古より忠孝の人、君の爲め親の爲め、または道の爲め、或は義の爲
めに死を輕じて身を棄るは、全く身を惜むが故なり。是れを安く棄ると見るは非なるべ
し。

問。眼耳鼻より手足の自由なるは、唯だ自由なる事に候哉。亦自由とする所以の者あり
や、如何。

答。有り。

問。如何なる者に候哉。

答。言ひ難し。

問。言ひ難しとは如何。

答。それを知ても、是れと指して形容する物なき故なり。

問。道は目前に明なり、然るに形容なしとは如何。

答。目前に明なれども知り難し。

問。道に道なし、自性と謂ふも、是れが自性と云ふべき物なし、また心と其の名を謂ふも、
其の形なし、然れども音を聞けば鐘と知り太鼓と知り、花を見れば花が眼に己、音を聞け
ば音が即ち己なれば、目前に顯はれ有るに非ずや、然るを何ぞ物有りげに知り難し云ひ
難し杯と勿體を付くるは如何。

答。全く勿體を付くるに非ず、我も一旦は汝が云へる如くに目前に顯はれ有りと心安く云
へり、先づ汝に問はん、言ひ難しと云ふ事は、如何なる處と云ふや。

曰。言ひ難しとは、知りは知りても、知りたる所は言句に能はざる所なり。

答。知りたる所は、如何様に知り候や。

曰。聲も臭も無く、無念無心の處なり。

答。然らば自性は無心無念なり、其の無心なる者が何とて物を言ひ、物と思ひ候や。

曰。それを妙と云ふ。

答。然らば其の處を妙に預けたるに候や。

曰。吾妙に妙なし、妙破りて矢張妙なり。

答。妙と云ふより外は無さや如何。

曰。黙する而已なり。

答。汝が至極は知りたり、無に止れりと見えたり。

曰。然らば汝が言ひ難しとは如何。

答。道は目前顯はれ有ることは、汝が云ふ如くなり。然れども言ひ難きは、物の音を聞けば、是れ聞く者何ぞと云ふ時、其の音がすると直に聞くなり。鳴ると聞くは彼先ども是れが後ども分らず、其の分別無き處に於て聞知者あり、是れを得んとすれども不可得也。不可得とは鳴ると聞くとの所に於て端的を見る事なり。其の端的を見ると謂ふも、電光石火の如くにして、聞と鳴る其鳴りてハッと思ふ中にも早や無し、無しと云へば、無しと思ふ中に無しと云ふものも早や無し、唯た聞キヤンと鳴るなりにして聞得んとする間に移行くものなり。斯の如く早き物なる故に知らず其言ひ難しとも云ふなり。爰を以て不可得なり、形無き物故、言れず得られずと云ふには非ず。然らば妙なるもの故妙と云ふ妙に非ず、得られぬ程のものが、斯の如く萬物に渡つて斯の如く行ばるゝ所を名付けて妙と云ふ。爰に於て道の體を見るべし。孔子水を示し玉ふも、道の體の見易きは川の流に如くはなし、暫時も止まらず、流れ行て無くなるかと云へば、繼續して終に絶

えず、萬物皆斯の如し、天地萬物同根一體是れなり。人は是れを知る故に天地の靈なり。

問。自性を得んとするとき、見聞に付て是れ何物ぞと尋ねて、それを知る事なりと古へ

り云へり。何者ぞと尋ねれば何ぞに當る事にて候や。

答。何物ぞと形あるものを見る事に非ず。

問。其の形も無きに何物ぞと尋ねて、何を知る事に候や。

答。何物を知れば、其の所は我も無し人も無し、元來萬物なし。

問。然らば空にて候や。

答。空と云へば、空見とて佛も是れを戒り玉ふ。

問。空と名付けずして、外に付くる名は有るまじ。空に名を付けて、面目とも自性とも、

佛とも神とも、様々に靈名を付くるものに非ずや。

答。空と云ふて濟むなれば、外に名を付くる事はいらす。

問。汝今も云ふ我もなし人もなしと、然らば何もなし。其の無一物なる所に、法性とも、

面目とも、明德とも、色々の名を呼ぶは如何。

答。無しと云へば、有無に對する無と汝は思ふ故、空見となる。無とは言句を離れたる者

故に無と云ふなり。此の無に名けて靈名と呼ぶなり。

問。其の無と云ふは、如何なる徳の具はりたる物にて靈名を付けたるや。

答。人生れて世にすめば、其の身に七情具足して、喜怒哀樂愛惡欲に迷ひ苦しむなり。然るに自性と云ふものは、不生不滅にして、七情の苦みを離れたる者なり。天地の間に何物か不滅なるはなし、水に溺れ、火に入ても、不滅の物は是れのみ。然れば貴き物は此の外に無し、故に諸道共に其の道に依て靈名を付けて呼ぶなり。

問。汝が云ふ如くなれば、是れ程貴き物はあるまじ。然るに悟道したる者にも、世俗の事に著して離れ兼ねる者あるは、如何。

答。一旦見付けても、取得る事なければ、我が物には成らず、故に貴き物と知りながら、調法に成らざるなり。

問。取得るには、如何なる事に候や。

答。行住坐臥忘れざるやうにする事なり。其の所を知り得ば、行住坐臥皆性の働きにして私事は毛筋程もなし。人々本心なき者なし。是れを別に得るものにはなけれ共、本心と私心と分るゝ所を知りたるを得とは云はんや。

問。取得て聖人に至れば、私事は有るまじ。かまた至得の處に至らずんば、過は免れ難し。既に顔回は至聖なり、然れ共三月仁に達はずは有るか。然るに取得たるは、私無しとは云はれまじ。

答。成程汝が云へる如く、行住坐臥皆性に合ふと云ふは、聖人にあらざれば及ばず、我が云ふ所は合ふと云ふ事には非ず、性の働きなれば、私心は用ゐざる故、私無しとは云へり。夫れを譬へて云へば、近世大石内藏助殿の事を以て見るべし。一日君に身を任ねて、君の存念を慮りて是れを請さんとするのみ、全く敵を伐たんと謀るのみに非ず、大石殿の心に於て敵と思ふ事は無し、唯だ亡君を思ふのみ。是れを以て謀るを見よ、我が知巧を振舞ふ事なし、京都に於て様々の不行跡を行ひ、一旦は蓮華共心に隔つる程に懈怠あり、尤も是れは謀略とは言ひ乍ら、君に命を任ねたる處よりする事なれば、例へば汝と云はれて死ぬとも、大石殿の心に於て取ることなし。修行も斯の如し、道に志ある者は、道に身を任ぬる事より他はなし、道に任ねて他事なれば、靈に至らずは謂へざる今日成す處は道の用なり、私事はなし、中庸に性に従ふと道と云ふと説き玉ふ、性に率ふより道は無し、性は形も影も無きものなり。それに率ふと道と成るは如何と見よ、

氷の性は卑に付き、火は乾くに付き、子は親に付き、臣は君に付き、妻は夫に付き、弟は兄に付き、愚は賢に付き、下は上に付き、又親は子と思ふ、君は臣と思ふ、夫は妻と思ふ、兄は弟と思ふ、賢は愚と思ふ、上は下と思ふ、是れ分別せずして斯の如し。形も影も無きものに率ひぬれば、理に違ふ事なし。故に道と成る。然るを知らず、道に任ぬる事なく、たとへ聖人の如く行ふと謂ふとも私事なり。

問。性を保つに怠らず忘れず能くすれば、妄念は少しも起ること無きや、如何。

答。念の起らぬと云ふ事はなし、天地あれば陰陽あり、陰陽萬物を生ず。人此の身あれば念を生ず。天地の間に萬物生ずるが如く、無益なりとて生せぬやうには成らず。人も斯の如し。然らば念何程起るとて心の障りとは成らず。

問。念起る故、心の障りとなるものなり。然るに障りとならずとは、如何。

答。念に障らるゝと云ふは放心なる故なり、放心さへせねば、念の起るに付き是れ何ぞ、去る時も是れ何ぞと念々毎に如何々々と工夫を付くる時は、念々毎に本分を尋得るの道となる。譬へば衆川の流れて四海に入るが如し、念は生ずる儘にして、唯だ如何々々と尋ねぬし、善に心基く時は念に迷はず、悪に心基く時は念に迷ふ、妄念に障らるゝ事あり。

れば、必ず悪を心に貯へあると云ふ事を知るべし。兎角其の道に陥ると云ふ事を能く心得べし、道に陥らば外事輕し、家職に陥らば外事に引れず、忠に陥らば身輕し、孝に陥らば人我輕し、實に陥らば名聞輕し。譬へば色欲に迷ひ、又は利欲に迷ひ、飲酒を好む者の人の謗を厭はざるが如し、唯だ其道には身を惜ずして陥るべし。俗に云ふ、「身を棄ててこそ浮む瀬もあれ」なれば、陥らざるは上達なり。

莫妄想終

西來法語

解題

西來法語は、洞上の徳翁禪師が、婆説紛々たる見を憐みて垂示せられたるものなり。洞上聯燈錄に據るに、禪師、その法諱を良高といひ、俗姓は藤氏にして、江戸の人なり。十三歳のとき、吉祥の離比重公に依りて驪鳥となり、十五歳にして薙染す。いくばくもなく出て、遠州の初山にのぼり獨湛禪師に見え、そのあくる年、黄檗の木庵禪師に依て大戒を圓にしぬ。また去て月舟、鐵心、潮音などに參す。天和中、又月舟禪師に禪定寺に省す、月舟つゝに衣法および永平の戒本を付しき。寶永六年二月七日、備中玉島の圓通寺において歿す。壽六十又一。臘四十又六。そも月舟禪師の洞上の宗風を興したるは、その門下に七山、雲山、祖道および禪師などの英傑を打出したるにも由るといふ。

西來法語

德翁 良高禪師

直指單傳の旨、竟に一字を説かず、達磨既に少林に來ると雖ども、九年冷坐して、竟に口を開くことなし。明かに知るへし、悟りなきか故に、淨裸々赤洒々。然るか故に汝か自性本來の面目は、諸佛諸祖の根源なり父母なり。疑ふこと勿れ、空切より今日に至つて、一毫も損益することなし。人々具足箇々圓成なり。故に曰ふ、天地虛空は汝か自己の活脉なり、地水火風は汝か自己の皮肉骨髓なり、山川草木は汝か自己の面目なり、日月陰陽は汝か活眼睛なり、風聲水音は汝か自己の語言三昧なり、牆壁瓦礫は汝か腕頭脚跟なり、一切衆生は盡く汝か同生同體に非らずといふことなし。知るへし、諸行無常は坐禪行住なり、是生滅法は喫茶喫飯なり、生滅々己は採薪汲水なり、寂滅爲樂は掃除煎茶なり、しやうし涅槃は出息入息なり、靈山の拈華、少林の分髓、洞山の麻三斤、趙州の無、雲門の胡餅、永平の身心脱落、總に是れ汝か平生底なり、時に應し節に随つて、遊戯三昧、造作することなかれ、馳求することなかれ。噫呼悲ひへし、學人鑽て自ら懈怠を生じ、多くは多病にして

〔少林の分髓〕達磨命三門人曰、時將至矣、汝等盡各言所得乎。門人道即對曰、如我所見不執文字、不離文字、而爲

道用。磨曰、汝得吾皮。尼釋持曰、我今所解。如。慶喜見。阿闍佛國。一見更不。再見。磨曰、汝得吾肉。道明曰、四大木空。五陰非有。而我見處無一法可得。磨曰、汝得吾骨。最後惡可禮拜後作。位立。磨曰、汝得吾髓。

道成し難し、晩年にして道成し難し、或は一文不通にして道成し難し、鈍根にして道成し難し、下根にして道成し難し、或は曰ふ、古人は今人に殊なれり。汝等錯て恁麼にいふことなかれ。知るべし、古の溪山雲月は今の溪山雲月なり、古も眼横鼻直、今も鼻直眼横、佛と云ひ祖と云ひ、自と云ひ他と云ふこと勿れ、何れの處より恁麼にし來る。愧つへし、法に於て今古を隔つること、皆是れ汝か道心の薄きか故なり。明かに知るへし、汝か自性は諸佛諸祖の玄體なり、何に依つてか恁麼に凝暗なる、汝か自性は摩尼寶珠なり、何に依つてか瓦礫なる、汝か自性は金毛の獅子なり、甚に依つてか恁麼に野干鳴をなす、皆是れ欲する處より錯るなり。汝二度母胎より出生し、嬰兒の時より是の如きの三昧、悉く是れ具足し來る、然るを長するに及んで、善と知り惡と知り、有と知り無と知り、迷と知り悟と知り、聖と知り凡と知る。今すら五塵三毒の境界に暗さる、何か故に是の如くなる、汝か自ら欲する處の錯なりと知るへし。單傳の旨、理知を截斷し、識神離斷すへし。理を生ずるかゆゑに、一切の境に疑を生し、無事を決すること能はず。謂つへし、蜜の口より絲を出して、自ら其の身を絆ひ終に死するかごとし、識神留まるか故に是の如くなる、汝か自ら欲する處の錯なりと知るへし。單傳の旨、理知を截斷し、識神離斷すへし、理を生

するか故に、一切の境に於て出頭すること難きか如し、進歩すへし。愧つへし、退歩するか故に、凡夫となり愚人となる。精進するか故に、知識となり聖人と成る。汝今端的底を會せんと要せば、直ちに汝か心中に向つて佛を殺し祖を殺し、父を殺し母を殺し、有無を殺し迷悟を殺し、汝を殺し、我を殺し、萬象森羅、塵々刹々、是の如く殺し盡して、汝か目前底空濶たる地に向つて、蓋天蓋地にし去るへし、躊躇すること勿れ、間斷すること勿れ、道裡に向つて若し能く端的ならば妨げず、須彌を拈して一微に入れ、佛殿に乗つて燈籠に入る事を。恁麼に會するときは即ち知る、天堂地獄も汝か自己の脚跟底なり、三毒界中の遊戯安穩は、月の山河に移るか如し、忽ち天崩れ地裂くるとも、會つて驚かず、眼光落地の時節至るとも會つて疑はず、青山白雲、平生歩を同ふし、終に保ち離さ風前の露、日中の氷、寧ろ愛するものならんや。然れば即ち無常なることを感し、光陰を空しく送ること勿れ。勤むへし、退く可らず、上來の語は佛々祖々の皮肉骨髓なり、汝等其の大恩を知り、共に道心に發起するときは、大解脱の人なるへし。

西來法語終

供養參 天桂禪師が攝州の藏鷲庵にありし時、ある信士の爲めに垂示せられしを、門人らが筆記したるものにして、つばらに供養薦誼のことを説かれたれば、よく真俗の疑を解くに足れり。ゆゑにをさめつ。

供養參

解題

供養參は、天桂禪師が攝州の藏鷲庵にありし時、ある信士の爲めに垂示せられしを、門人らが筆記したるものにして、つばらに供養薦誼のことを説かれたれば、よく真俗の疑を解くに足れり。ゆゑにをさめつ。

天桂禪師、その名を傳尊といひ、俗姓は大原氏にして、紀州和歌山の人なり。八歳にしてはじめて憲養寺の傳弓和尚に従ふて受染し、十八歳より、あまねく諸國にあそび、興聖寺の龍蟠、可睡齋の衝天および黄葉の鐵眼などに參し、のち駿州の靜居にゆき、五峰和尚に見えて機契し、つゝに印記をうけてその席を董しね。晩年にいたりて、藏鷲庵を初めて隱栖して、みづから老螺蛤と號す。八十八歳におよんで、また戲に老米蟲と稱す。その年の十二月十日、泊然として歿す。實に享保二十年なり。著はすところ、正法眼藏辨註、海水一滴、報恩編等あり、みな盛に世に行はる。けだし禪師は、學博く識高くして、妙立和尚、鐵眼禪師、心越禪師、法霖和尚、普寂和上、白隱禪師、慈雲尊者などにならび稱せられて

近世釋門八傑の稱あり。さればその門下よりも三十餘人の羣衆をいだして、大に森嚴綿密の宗風を宣揚したりき。この篇のごときは、その緒餘に過ぎず。

供養參

供養參

天桂禪師

〔請益〕 法益を請ふの義にて、垂詢を請ふことなり。

師、藏教に在り、因に一僧士あり請益す。其の言に曰く、某甲尋常先祖親屬等の年忌亡日に値ふ毎に、僧を請し佛に供し、齋を施し塔を造り、香を献し茶湯を點する等勤りて怠らず、是の如きの供養薦道、余か志す先亡の報地を莊嚴し精靈に通達するや否や、愚慢諦當ならず、願はくば、大慈説示を垂れ玉へど。師の曰く、是れ古今異俗の疑怪する所なり、老僧、汝の爲めに落草談せん、諦聽せよ。抑も三寶供養の功、薦亡施食の徳、諸經論に明文夥し、今一二を舉示せん。法華經に、藥王菩薩の本時燒身の供養あり。涅槃經に、釋迦文佛同時菩薩たりし時、病人の爲めに毎日身肉三兩つゝ施し、其の發願力に依り今日成道せりと説き。盂蘭盆經に、目連尊者慈悲の餓鬼道に墮せしを、十方自恣の僧を供養して倒懸の苦を救ひ、生天の樂を得たりと説けり。其餘の供佛施食の靈驗、四生得益の因縁、但た經論のみに非らず、世書の中にも廣く散在せり、枚舉に遑わらず。今老僧一喩を以て詳説せん。吾が佛法中には不誑語あり不異語あり、輕易の念を生せず、實々に觀察し諦信せ

〔二十五有〕四洲、四惡趣、六欲、梵天、無想、那含、四禪、四空處なり。而して皆三界の中に在り、故に三界二十五有と云ふ。

よ。譬へは此の一直の虚空の如し、東西南北、彼の所此の所の山川海岳、森羅萬象、大小長短、方圓廣狹、其の物に随つて異相のあるに似たりと雖も、一直の空性は於て全く別なく、異相なし。虚空本と自性なきが故に、彼の所も此の所も無碍に通達して隔別あることなし。長器を持ち來れば、其の中に長空を現し、短器を持ち來れば、短空を現し、方圓廣狹も亦復た然り、南北東西の大方隨塵毫末の極微に至るまで、此の空有らざるなく、密にわたりてすさまじし。然れども此の空見るに形色なく、聞くに聲響なく、觸身に觸れて罣碍なく、鼻口に入りて臭味なし、意識に覺知し寛めんと擬するに得ること能はず。然りと雖も現前の山川大地、森羅萬象、二十五有、善惡の造業、受報の好醜、四威儀百顛倒一箇一事も此の空を離れては成することなし、悉く皆空中に安排せり。亦滅じて別所にゆくことなし。此の空は、古に亘たり今に亘たり、西天東土、上天下地及び十方微塵世界も、更に異なる相貌あることなし。假令七珍衆寶の清潔に混しても清くもならず。泥石糞土に雜はりても汚れもせず、烈風にも動かす、雨雪にも濡れず、火に入りても焼けず、水に入りても溺れず、藏めても隠れず顯はしても露れず、大にして大ならず、小にして小ならず、方圓有無にして方圓有無にわらず、此の空本と無性なるかにもる爾かなり。汝か心性の靈

空も亦復た是の如し。日用光中、行住坐臥、見聞覺知、寒暖人事を作す、現成の上を以て見れば、正しくあるに似て、四大分離して死したる時は、何にもなきか如くなれども、これ暫らく假和合の形相幻滅に依りて、是の如く有りとも無しとも見ゆるのみなり。汝か自受用底の自心跡は本來無住にして生もなく滅もなく、微塵ばかりも成壞の形相の得べきものなし。是れ無性の本性なるが故に、父母を思へば、父母即ち心上に現し、妻子を思へば、妻子即ち心上に現し、諸佛を念すれば、諸佛の相好光明尊貴の爲體心上に現し、衆生を憶想すれば、衆生受報の形相悉く心上に現して曾て不昧なり。然れども上如來地に登りて高くもわらず、下衆生地に入りても卑くもならず、三界の境に隨ひ、善惡邪正の縁を逐ふて、昇沈輪廻、生死去來あるに似て、毛髮ばかりも輪轉し去來するものあることなし。是れ之を清淨本然の自心と云ふ。此の自心を以て供養する故に、其の施主の志す所の先亡後化の自性も同じく本然清淨の空性にして、靈明無碍なるものなれば、心々融通して一塵の隔あるべきなし。親に供するときば即ち親に通し、子に供するときば、即ち子に通し、三世の佛祖に供するときば、三世の佛祖に通し、法界の万靈に施す時は、法界の万靈に通す、是の故に一盂の飯、一器の水、香華茶果、何にても供養せんと思へば、自己の欲心を離れ執

着の念なく、直に其の人に相對して直に供へ、眞に與ふる如く清淨潔白の誠心を以て、毫髪も疑怪の心を懷かず、施物の多少、供物の愈細に拘はらず、只眞實義を以て供養すべし。世書にも神を祭る在るか如しと云ひて、死せる人をも生ける如くに祭れど教也、況や佛法中には本より死活の隔別なし、生死を隔つと思ふは、凡夫愚人の妄分別なり。施主一念の至誠心を發して淨施するときは、一粒米一滴水も十方法界に通達して、冥福を加へ報地を莊嚴す、其の功德盡劫にも計るへからず。人々自心の大智慧光明は、常に周遍法界にして處として至らすと云ふことなし。衆生は妄想執着に由りて、猥りに五道の輪廻を見ること旋火輪の如し、諸佛菩薩は十方の依正畢竟性空なりと知るしめして、幻化の諸相に貪着し玉はざるもゑに、同一法界に處して常に大安樂に住し玉ふ。此の勝功德あるを以て、諸佛菩薩を尊重讚歎供養禮拜すべし。諸佛菩薩の加被力を蒙り、諸天神祇祈らすとも冥護して現身に障礙なく、修道も進み契證も速なるべし。汝等先佛の正道に歸依し、同一性空の眞法身を明らかに、無縁の慈悲を發し、歸依三寶の境界に勤入し、本具の自心廣大甚深の妙理あることを開悟せしめよ。其の上淨心を以て、常に分に隨つて法財二施の供給を作して惡趣飢渴の衆生を救ひ、身心俱に安樂ならしめんと希ふべし。此の普同供養の因縁力に依

りて、十方法界の含靈、各々分に隨つて法味を受け、脫苦受樂し、斷惡修善して終には種智の圓にして佛果を成就すること決して疑ひなし。所以に涅槃經に、一念菩提心を發する其の心、金剛を呑むか如く、未來永劫、六道に輪廻するとも壞滅せず。終に佛果位に到ると説けり。華嚴經には、三界唯一心。心外無別法。心佛及衆生。是三無差別と説き玉ふ。生佛異見を生じ、自他憎愛を作して取捨するは、佛弟子の用心にあらず、差別の揀擇心なく、平等の慈悲心あるを眞の佛子と云ふ。汝一人この自心を了知するとき、十方の有情非情、同時に佛智慧に證入するの道理彰々然たり。是の故に佛子たるものは、常に方便を以て假令一人なりとも佛道に引入し、平等の慈悲心を發させしめ、法供養の義を知らしむ。日頃に貪着する財寶を喜捨して三寶に供養し、貧窮無福慧の衆生を救濟せしめよ。僅かに一念なりとも貪欲執着を離れしむる、是れ入道の捷徑なり。老僧本より貪名愛利のために汝を欺かんや、實々に歸信せよ。總して凡夫の常として、今日の幻化虛妄の形相に執着し、諸法は因縁生にして畢竟性空なる道理を知らず、偶々正義を聽聞するとも、信有の念起りかたし、多くは耆年老極に至りても、貪愛欲執に淪墜して離るゝ事を得ず。死する夕に至りて、手忙脚亂して臍を咬むとも及ふへからず、寔に感むべき者なり。老僧今汝に問ふ事あり

自己に能く返照して見よ。現今汝が寒暖人事を知る處の常念及び供養の意を發する者は、頭の頂より足の爪さきに至るまで、何者有りてか此の思想を發するや、眼耳鼻舌身、五臟六腑、皮肉骨髓等の色々ありと雖も、これは父母愛欲の緣によりて、地水火風の四大假りに和合して出生し來れるもの、喩へば水上の泡の風緣に逢ふて生起せるか如し。死して後は、燒けは北邙の灰となり、埋めは曠原の土となる、更に一物の主宰たるものなし。争てか供養施食の思を生ずることを得ん。汝か心若し身内に在つて此の思を生ずると云はば、此の身内何れの處に在るや、胸に在るか脊に在るか、形ありや色ありや若し身中に在るものならば、死する時必らず出て去るへし。去るときは何の形相をか見るや。又母胎に宿れるとき、他所より來るへければ、父母其の來る所をも知るへし。汝か我れを供養せんと思ふとき、更に其の思ふ物あることなし、又其の供養せる所の茶果飯菜、瓊金施財等の物色、何れの所よりか出生し來るや、皆是れ天地不言の造化、日月雨露の因緣に由りて、假りに出來たる所の物に非ずや。此の物質有なりと云はば、何に由りてか火に逢ふて燒却し、水に逢ふて溺却し、諸難に逢ふて没失するや。然れば諸品の財食本より所有あることなく、畢竟無自性なる事を知るへし、又諸の飲食を喰ふとき口中甘辛酸苦鹹の五味を作す、此の

〔三輪清淨〕 布施を行する時、施者、受者、及び施物みな悉く本空なりと體達するときは能く執着の相を摧破す。
〔祇園精舍〕 釋尊の説法敷化し給ひし道場なり。

味を知る舌上より生ずると云はば、食物なきとき、何としてか口中常に此の味を覺えざるや。當に知るへし、諸の飲食にある所の諸味、其の本源を尋ぬるに、畢竟性空にして實にあらす。吾亦汝の供養に赴き無量の財寶を受け、無根の珍饈を受くると雖も、一塵はかりも滅せず、所以に無量の財寶を受けて報謝を作す心なく、一丁の財寶を受けざるも、亦恨む心もなし。身は四大假和合にて我物にも非ず、心は無性本空にして一法の取るべきなく、又一法の捨つべきなし。是の故に知るへし、汝か志す所の先亡の精靈と、施す所の財寶と供養せんと欲する汝か一念心と、此の三輪清淨にして本然自性空寂なり。道の裡何の報をか思ひ、何の爲めに作すとてか、亡靈に達するや、達せざるやと妄分別を生ずるや。但た佛道の正義に依つて汝か本具の自心を知るときは、一粒一滴の供養も小ならず、無量無邊の施財も大ならず、彼此の隔なく通不通の想なし、施に施の念なく受に受の念なし、是れを淨名經に如理思惟する眞の供養なりと宣ふ。往昔天竺に貧女あり、如來を供養し奉らんとて、美膳を調へて祇園精舍に赴かんとする途中にて、餓狗を見て憐れに思ひ、持ちたる飲食を餓狗に與へて後に如來の所へ到れり。如來は疾くに知るしめして、餓狗に與ふると佛に施すと異なることなし、眞の大施主なりと讃嘆し給へり。是れを以て佛無差別の空

旨と知るへし。若し布施を行ふ時、貴賤凡聖の差別の心なく、老若男女の隔別の念なく、平等に住し廣大の志を發して、報謝を受くる意なく無分別に施捨すへし、是れ眞の法供養の義なり。凡夫は一切諸法は水中の月、鏡裡の像の如くなるを知らず、實有の妄見を作し執着の念を起し、日用光中見聞聲色の閃影響を把握して、我手に我れと繫縛を作し、聲色の受苦を却て樂と思ひ、情愛の境を認めて淨と思へる、悉く是れ輪轉生死の根本にて、終に無間の業を受け、父母三寶の名字をも聞かざるに至るへし。偶々人界に生を受け來て偏地絶島に生し、愚痴朦昧の身となりて、何を見何を聞かざるも辨なかるへし、惑まさらんや。只能く今日五蘊假和合の身相は電光朝露の境界なりと觀念し、夢幻泡影の起滅なりと照見し、本然自性本空の自心と開悟して、一切諸法の爲に惑亂動轉する事なきを佛々祖々の用心とす。此の如きの人は眞俗に限らず、三界の導師なるへし、尊重敬待すへし。同じ人同し心なれども、用ひ様の好惡に由り、聖と愚とは天地懸隔あり。古人曰く、心本無過咎、只人錯受用とは是れ也。今生は少水の魚の如し明日も計り難し、此に何の樂か有らん。速に佛道に歸依し善知識に親近して、方便の權説に泥ます正法の直指を信肯すへし。釋迦如來西天に降靈し、金輪聖王の寶位を捨て七珍万寶に心を寄せず、雪嶺に入り六年苦行を歴

〔五無間〕生、命、時、苦、形。

て、見性悟道の蹤を示し、有情非情同時成道の眼を開き、四十九年の説法を作し給ふ。皆是れ衆生の迷障に依て、自心の精明を知らず、妄に人見我見を起して生死海中に頭出頭没し、本然清淨の正義を味ますを憐愍して、三百餘會の宣説あり。畢竟人々本具の自心の様子を重々に説き玉ふ也。父母親屬の親み厚さも僅かに一世の恩也、如來の恩徳は三世に涉りて窮盡あることなし。比況の論にもあらず、此の廣大の恩徳をも一向に辨へず、捨父逃逝し奔走する外道の類は云ふに及ばず、四部の弟子と稱しなから佛説佛意に違反するは、寔に如來の怨敵也。附佛法の波旬と云ふへし。他日閻羅老子の鐵棒を喫するのみならんや。五無間の業報を免かるへからざるものか、曠劫沈淪の苦衆生、如來の眞乘の道を蒙るにあらずしては、大安樂の境界を得ること有るへからず。是の故に諸佛を供養禮拜して、如來の兩足無上の境界に齊しからんことを希ひ、法寶を尊重讚嘆して、離塵離欲の行事を願ふへし。僧寶は西天東土、此の法を傳持して今日に至らしむる故に、異國本朝共に國王大臣より下庶民に至るまで、尊信すること古今同じく然り。汝等今生死流轉の身心を佛法海中に投入し、同體別體の三寶に歸依して、永劫安樂の門に得入し、清淨解脫の境に遊戯すへし。畢竟如何、三世十方一心の現成なり

供養參終

指月假名法語

解題

指月禪師、その法諱を慧印といひ、洞上の尊宿なり。享保元文の間、大に化席をひらきて群類を度し、また多くの龍象を陶鑄し、本光和尚のとき碩徳をいだしぬ。著はすどころ用心集不能語、坐禪儀不能語等數種あり。

この法語は、禪師順世の後、合刻して、世に行ひしものなり。行乞篇、三歸依増語、誠殺生法語は、その題名を見て知るべく、別に架説を須むす、岸江小語は、淨家の尼衆に示めされしもの、身知夢は世の實なきことを示めされたるなり。そも禪師の物せられたる書はみなむつかしきもののみなれど、この法語は、門外漢にも稍會しかたきにあらす。

行乞篇

指月禪師

如來および一切の賢聖遷代ともに異趣なく行し來る法あり。いはく、行乞なり。而かもかの諸聖どもにのみならず人天の供養をうくるにたえたり。しかるを行乞して、一生の行持とすることば、これすなはち途中の受用なるをもて、人天路上作活計は、如法の精勤にして、一切憍慢放逸をはなれ、勞役身、卑下身のまより佛果上の脱體なるを示して、かの癡闇の徒に、生死中の一相、平等無受無欲、法法混合して、四大五蘊の去來不去來、執受非執受畢竟無所得の地を得て、柔和忍辱、慈悲謙下、身心内外の空無相無作を成せしめんとなり。是行もまより施者の不憍慢、柔和善順心なる、受者の不憍慢謙敬心なる、物料の無我無執無主なる、畢竟寂滅、不著不淨の理なるをもて、三輪實に法界空淨の宗に歸するもの也。わづかにこの宗に歸すれば、凡塵路絶し、彼我家亡じて、古今一揆内外不昧の慧覺地に住することを得る。まことに無二無二分、無別無斷の轉古經、證佛身、轉祖意なるのみ。凡そ施心に深淺等あり、受心に淨穢等あり、物體に輕重等あり。三輪種種あれども、其の歸

するところ畢竟解脱なるをもて、遂に一相無相の是法平等無高下にいたりて、自他の窟籠を超越す。これ所期にあらざれども、乞時の二隻眼、兩隻眼ある、さらば瞎眼ありて照破するの所轉身なるあり。又復かの一鉢の量をうるとき、全口全心の現成あり、有受不受の端的なる、これ鉢量の回頭進歩にして、直下空心なり、空鉢なり。じるべし、空鉢は滿心なり、滿空は諸心なり、この諸心は、有心無心、邪正大小等の心にわらず。いはゆる無上菩提心、行道一直心なり。このほか以心傷心等の、ばく心わらず。その心轉するときは、諸般の擔荷を放下し、當頭霜夜の月の任運轉なるを、一家三家、三四五家に轉來轉去すべし。轉じし此の如くなれば、頭角四蹄すくして、のこる底の鼻把（鼻把）あらず、意攝（意攝）すては窟籠にわらず、牛兒なぞ牛兒ならむ。しかもこれまさに牛兒なれば、沙門轉身の行履、畢類中行の全身に安じ、不斷聲色の隨類を左右し、畢竟不受食の尊貴隨（尊貴隨）とよくするものなり。一超直入をかたることをやめよ。喚作如如早是變也なり。只よく隨し去れ、日々々の行乞、これ諸人不落不昧の支路なり。かくのごとく行乞は、理事等の論にあらず、祖備の正傳骨體なり。いま末法時世の人師、その習俗あしきをもて、眞行を卑劣野體なりとせしりて、十指（十指）とびに動せず。一步わづかにうつさるるを、高德大道なりとおもへるは、愚暗のはな

〔乾土〕 天竺のこ
こなり。

〔袈衣〕 左の手に
袈衣を疊みてかけ
ることなり。

〔應器〕 梵語に鉢
多羅（多羅）に應器
といふ、人々の分
量に應じし食器と
いふの義即ち厨の
鉢玉のことなり。

はだしき、實は無道心なるも多なり。乾土、支那、日本、およそ佛子のある、誰れか行乞せざる、ただ佛行を棄嫌するもの行乞せず、佛子にして佛行をさらばば、まことに不類の人なり。行乞人よく佛言示するところの行法をしるべし。佛告比丘、およそ行乞の時は、しづかに五條七條を披し、僧伽胝（僧伽胝）は肩にかくべし、（今の袈衣）左に鉢を捧げ、右に錫を持し、しづかに房門を披いて、門の傍側よりいづべし。辭身緩歩し、氣をさめ、根をまもりて寺門をいづべし。いづるときは、かならずはどけを禮し、上座和尚を和南し、詳悉に途路の事をばかりて進むべし。聚落村邑のちかきところにいたり、僧伽胝を披し、身形をかへみみ、威儀齊整にして、左手に應器をとり、右手に錫杖を持し、緩歩して象のごとく、左右をかへりみみず、人と言語せず、他事を聽視せず、卒暴ならず、不眞の事を察し、奔馬、狂犬、醉人、穢人の觸杵を謹し、官士の往來に觸犯せず、行立して行莊をみべからず、だまさは諸根をさめりて直にすゝむべし。すでに食を得て、たることをしらば、すなはち寺院あるは林下水邊、便宜の方所にいたりて食すべし、或は信人の家にして食するもよしと云々。これ大般若、大集等の經、十誦律等をまじへて取意して記す。而してこれ天竺の熱食（熱食）とらるの法なり。いまわが國は、おほくは生穀を食をこす、もるにたることを知らば

行乞書

〔隨方の毘尼〕 毘尼は梵語、此に戒を云ふ、戒律は其の地方、時機に隨て多少の變更をなすものあるゆゑに斯く云ふ。

とく僧寺または菴房等の居處にかへりて、如法にこれを煮て食すべし、隨方の毘尼、たゞ寡欲清淨なれば、よしとす。

佛言。或有比丘因以我法出家受戒。於此法中。勤行精進。雖諸天神諸人。終亦不念。但能一心勤行道者。終亦不念衣食所須。所以者何。如來福祿無量難盡。如來滅後。白毫相中。百千億分其中一分。供養舍利及諸弟子。設使一切世間之人皆共出家隨順法行。於白毫相百千億分不盡其一。如來如是無量功德。若諸比丘所得飲食及所須物。趣皆得足。知るべし。出家はただ道を勤修するを心として、天神および人を念すべからず。況や資身の具に於て、所求の心あるべからず。只た道を修すれば、おのづから如來白毫の功德を受るなり。この功德無盡なれば、一切の人、一時に受用すれどもつくることなし。まことに今日一切の受用、一水一木も皆これ白毫を受用する也。出家の人能くこの意を知りて、一切の受用を容易に看すること勿れ。すなはちこの受用も無盡なり。畢竟して無盡もまた無盡なり。もろにつゝに無盡なり。故を以て胡蘆參胡蘆して封疆を脱せり。およそこの無盡をみざるゆゑに後時のために、貯蓄財物するは大なる非なり。又言。此諸比丘應如是念。不應於所須物行諸邪命惡法。

〔須陀洹等〕 皆梵語、須陀洹此に入流を云ひ、斯阿含此に往來を云ひ、阿那含此に不來を云ひ、阿羅漢此に不生を云ひ之を羅漢の四果とす。

知るべし、一切の所須、只た清淨の正命にかなふべし。貪求善積はみな邪命なり、人生いづるべきなき身命なり。たゞ道なきをうれへよ、物なきをうれへされ。物の藏積は道人のはづるところなり。

又云、若し苾芻比丘。於糞掃中拾取弊故。應生是心。以此障寒及修淨道。我今以是弊故。繕作僧伽梨著。勤行精進。若以凡夫一夜不應著。此是比丘淨洗繕著。於此苾芻一生貪著意。即應捨之。我不聽著。何況餘衣。何以故。比丘於是中。生非比丘法。是比丘亦不應著。何況專以赤熱鐵線。自纏其身。不應著。此苾芻。何以故。於此衣中。染愛心故。苾芻衣比丘應作是念。著此苾芻衣。以遮寒熱。以助修道。我今不復更著餘衣。當得須陀洹。斯陀含。阿那含。阿羅漢果著。苾芻比丘。專求道者。我則聽著。

知るべし、衣と食とは共に佛の受用にして、其の受用の心、受用の物は佛皆之を委曲せり。この受用を專して受用すべし。およそ天魔外道及び世の閑人のやからは、眞受用を知らずたゞ佛弟子として道心あるもの、知るに近し。まことに大用現前の軌則、不存執財に墮せざる、法王の自在法なり。曰く、もし修心辨道のためにあらずば、一切著用すべからず、他事に用著せば、これ不用なり、眞用にあらず。眞用は不染汚なり、不染汚は即ち諸佛著

用の様子なり。今日の佛子この用を傳來して説似すれども、一切不中なり。もたに表も此の如く汝も此の如し。是れ一大事の所傳は著衣喫飯なり。

又云。乞食比丘。應諸法中無所分別。常攝其心。不令散亂。而入聚落。以諸禪定。而自莊嚴。乞食得已。心無染汚。持所得食。從聚落出。在淨水邊可修道處。置飯一面。洗足而坐。以食著前。應生厭離想。不淨想。屎尿想。臭爛想。變吐想。塗瘡想。厭惡想。于肉想。臭果想。沈重想。又於身中。應生死想。脹想。爛壞想。比丘應生如是心。以無貪著心。乃食。但以支身。除飢渴病。令得修造。應作是念。我食是食。除先苦惱。不生後苦惱。但得快樂。調適無患。身體輕便。行步安穩。又念我食是食。已。應當得須陀洹。乃至阿羅漢。無生法忍。比丘如是食者。我聽乞食。

知るべし。比丘は無所分別、無所散亂、持戒修定して、佛道の所得むるを以て受食するにたへたり。所得はなんど、惡不善をのぞき兼善をつとめて、佛行の紹嗣するなり。もたに十二時これ如法住の行持なり。然かあるを爲すことなくして、空しく過ぐさば、人を教化するの功なく、施をうけて福履となるの報謝なからん。まことに資器持來、成過咎なるべし。しかあるに一樣の入あり、自の不肖なるをばづることなく、もし鐘糖の食具、慢墮の

【三徳六味】三徳とは、一に輕煩、二に淨潔、三に如法作れなり。六味とは、苦、酸、甘、辛、鹹、甘の六味を云ふ。

【等味】雜糧經の弟子品に雜糧諸須菩提に謂て曰く、若於於食等者、諸法亦等、諸法等者於食亦等、如是行乞可取食云々。

【諸結使】結は緊縛の義、使は驅役の義、九結十使など云ひて煩悩妄想

體にのみとせば、一向に毀謗罵著す。他の不敬不養なるをば教へて、良善にうつらしむべし。罵辱すべからず。是れ自の非をわきまへず、只たに他の短をそしる、なんど義といはんや。佛言の觀想は、是れ只た無著にして、貪味をわすれ食の好美を求めずして、道を成せしめんとなり。しかもかの食にむかひて、讚歎仰念することは、三徳六味の色香をいふとき、天上人間に比類すべきなし。鉢持末華芬芳防利華等のおよぶ處にあらず、無上の不可思議味なり。畢竟この是非好惡を忘して、一切無貪著味なるべし。實に等食等味なり。

又言。若乞食比丘。於所得食。生貪味心。以爲甘味。而作是念。我食是食。當得好色氣力充盛。不聽受一飲水。何況飲食。若於食中。不見過患。不見出道。而使食者。事自以手割。股肉一啖。何以故。我聽行者得者受他供養。不聽餘人。云何名爲行者。若有比丘。決定發心。我於今世。斷諸結使。當入無餘涅槃。修習聖道。如救頭然。又當斷除惡不善法。是名行者。何謂得者。謂得須陀洹。脫三惡道。乃至阿羅漢。諸煩惱。求道已息。所作已辦。善學三學。是名得者。我聽是人。得受供養。清淨自戒者。開化檀越者。及修多聞。讀誦經者。乃至是人。久能持戒。清淨無有瑕玼。不垢不淨。自在不着。智者所讚。能自莫是。隨順禪定。法樂坐禪。如是。我亦聽受供養。

のこなり。
〔三季〕持戒、
定、智慧なり。

知るべし、比丘は大體あり。食をしてつねに修道するを要す。若し只た貪味心を生じ、
あつて甘味として即ち云はん、我得是食によりて、まさに色力充足せんと。或は道を修す
ることなく空しく過さば、一飲水もゆるさず。況や飲食をや。もし受食の中に、己れが過
失をみず、出離をみずんば、自の肉を食すとも、他の食は受くべからず、凡そ三事を修し、
持戒清淨にして開化檀越にたえたるの人、垢濁なく自在不著なるは、食をうくべし。
佛言。沙門得食。食已則就靜處。思惟道味。

知るべし、是れ受食の用心なり。もしたゞ食をうけて道を修することなくんば、其のおも
めとなることなぬかれず。いかんとなれば、施主はもと福田としてはとす。しかるをた
ゞ受食して道業なくんば、まことに異類にしてつくなくべし。つゝしりや。

佛言。比丘若くは食受供養時。應如餓世食子肉。

知るべし、受食は容易にあらず、已に餓世にあつて子の肉を食は、豈にその美惡を思ひ
また言語譏笑するあらんや。直にこれおのれの肉を食するなり。餘の雜念あるべからず。
しかるを施主の食に美惡を論じ、他事を言語せば、まことに無慚のひとなり。このこと切
にすべし、日時の用心なり。畢竟不礙論心、不著心、厭離心あるべし。

上件の佛語は、行乞受食の用心也。佛子しらすんばあらじ。呀、末法時世には如法の正命
食に絶えざるを以て、國王臣民の寄信に任せて、膏油の田園、茂林堂舎を受けて意を快と
す。而もかつ其中に修道すること能はず。若し少事ある時は、却て惡業を造して、勝負を
もて相迫するのみ。其の甚しきものは、非理をもて正理に敵し、ばかりて吏人の情をよる
こばしめ、白衣信人を羅ひて枉刑にいたらしむ。まことになげくべきの甚しきなり。護法
の實情あらじ國王大臣は、有力をもて此の弊をのぞけ。

或問。天竺の熟食を乞ふて食するが如きは、まことに正命食と云ふべし、かれにも僧食に
して使食する如きは、此方と稍同じなるべし。しばらく此方のこときは、寺院の莊園田産
あるには、行乞ながく廢すへきか、若し然らずば、附益するの貪求にあらずや。曰く、し
かり。予も且つて是れを疑ふ。後に高座の悟和尚、述する安老僧の文をみるに、曰く、食
道。嘗聞藏經。釋三番佛意。不許比丘坐受。無功食。生慳情心。起吾我見。每至晨朝。佛及
弟子。持鉢乞食。不擇貧賤。心無高下。俾得福者。一切均薄。後所稱常住者。本為老病比
丘不能乞食者設。非少壯之徒可得而食。逮佛滅後。正法世中亦復如是。像季以來。中
國禪林。不應乞食。但推能者為之。所得利養。集為招提。以安廣衆。遂極遂日行乞

之規也。今聞教科住持。不識因果。不安老僧。背戾佛旨。創弱法門。苟不任院。老
 僧安歸。更不返。思常住財物本爲誰置。當推何心。以合佛心。當推何行。以合佛行。昔
 佛在日。或不赴。隨。每身精舍。徧巡。僧房。看視老病。一一致問。一一辨置。仍勸請諸比
 丘。遞相恭敬。隨順方便。去其瞋嫌。此謂御師。統理大乘之模楷也。今之當代。恣用惡住。
 資給口體。結托權貴。仍隔絕老病者來僧之物。掩爲己有。佛心佛行。渾無一也。悲夫。古
 德云。老僧乃山門標榜也。今禪林百僧之中。無一老者。老而不納。益知壽考之無補。反不
 如天死。願今當代。各遵佛語。紹隆祖位。安撫老病。常住有隨。宜供給。無使惡賊專權
 滅刹。招來世短促之報。切宜加察。
 これまことに上古にもまれに。後世には得がたき善言なり。佛をして再び世間に出現せし
 め、法をして人天に光輝し、佛をして實に佛心佛行に省悟せしめ、貪婪の人を塵にし、暗
 痴の徒を壯にして、祖宗一同譽著するの真語なり。今寺々の人、其の寺院の有を以て、方
 來老病を養ひ、および饑乏を救ふて、大慈愍行を興起せしむ。よく俾獨をかなしむとせば、
 得哉の歎あり。俗尚は此の如し。今師僧家、慳吝の性を轉じて無邊の大慈とならば、まこ
 とに無相好の本人、本心、本佛ならしむ。此の由るに佛の正佛を喫し、佛をまなび佛を

ふる、佛を扇し佛を尿す、大佛、小佛、華蓋の中上に坐し、我有我見、こゝに實成するも
 のなり。吁、法王の行を誦し、其事を奉行するにたえず。人天の迷倒を以て、難遇の妙行
 を棄敗せむこと、豈にかなしからずや。佛法將滅の歎詞を省覺し、一日もこれを行せんば、
 まこと佛子たるべし。中華の祖道、一度機變の妖怪をなしてよみこのかた、おぼく野狐
 の巫風にはしる、つらに情香慢情をよしとして、行を等はするにたえず、かへりて非
 事をなして是とおもふはいたる。彼の楚舞の民は純粹なり。能く其の法に従つて、しかる
 愚に似たり。後世の人は使倭なり。言語煽燥をして慧に似たり。是れその上世下世の分な
 り。佛子の傳持もまた此の如し。上代は實をさる、後世は便給をさる。この由るに行を等
 の高風は、日に従つて遺忘せり。伏して望すらくは、傳法の人この意をしれ。
 或問、所言の佛心佛行を知るものは、領じて行をすべし。しかるに末法の人嫌疑おぼく、
 習俗ひさしく傳令するを以て、油の煙に在るが如し。習俗轉せせんば、行をすつゝはすたれ
 なん。疑ひ是れをさす事ありとも、其の情うつりがたからん。これをせんとはいかた。
 云はく、只た是れを聞きまなぶの深淺と、其の理をさすの厚薄をばよりて、事を行ふは
 難易なり。おぼく内に誌すこと厚薄をば、つひすにうつらすことなり。なすこと

行の難

難からず。伍買が呉に行くとき、途路に食を乞ふ、彼れ豈に其の死をかたんじて、生をむさばるものならんや。而して能く之を忍耐することは、かの大に志す處われはなり。大丈夫の天地の間に生れて、其のつくところの道をなほし、志す處を行はんとすれば、何ぞ其の他を思はん。故に俗のはづるところをばぢとせず、只た志す處の成らざるをばぢとす。かの人事、浮沈の間すら、意氣あるものかくのごとし。況や我が無上道を志すもの、道のためとならば、是れより重きこと尙ほつとめ修すべし。況や是れはつへきにあらすして仰讃すべきをや。故いかん、其のうけて行ふ處果して佛行ならば、まさに已れが道を成し、施者をして等無差別の施度をなさしむ。それこの施は、ただ財施のみならず、即是の法味、無上の轉法輪、平等の大作、佛事にあらずや。つゝしむで同志にまをす。上佛心行に順じ、中四恩を報じ、下衆生を濟度せんとすれば、寺の有を回して老病に供給し、孤獨に及ぼし、清淨念に住し、行乞して自他を度するの大道心あらんことを。すでに箇を菩薩と稱す。何ぞこの心なからんや。

附録

根本毘奈耶雜事曰。比丘乞食。深入長者之家。遂招譏謗。比丘白佛。佛言。可作聲聞覺彼

〔苾芻〕 天然の聲山に生ずる香草にして五種を具するが故に出家の人に喩ふ。
〔六環〕 錫杖のこと云ふ、錫杖に六の環あればなり。

即阿々作聲喧闐。復招譏毀。佛制不聽。遂擊打門。家人詰問。何故打我門。默然無對。佛言。應作錫杖。苾芻不解。佛言。杖頭安環。圓如醜口。安小環。子動搖作聲。而爲驚覺。動可三三。無人聞時。即須行去。

小偈

法王心印懸雙臂。身心直爾休彫僞。一鉢六環解諸空。寸土無端行大地。

時元文三戊午夏安居日。 退休月野祈撰。

行乞篇終

三歸依増語

指月禪師

歸依とは歸向依違の義なり。其の道によりしたかよをいふ。予の其の母を得るがごとし。佛といふは、本然の正性にして、始終のはしなく、平等任持し、寂默深遠なれども、而もよく照察明鑑して、萬差の動變を覺了し、染淨去來、得失迷悟を蕩盡すれども、またよく其の差品を分辨す。これもと知法常無性の覺によりて、その徳を自在にするものなり。みなたゞ無量劫來生死の中に居て、よく生死の本實を了達し、生死にまよふもの、迷はざる道路を悟り、象なくして萬象の模則をなし、己なくして能く自他のおのれをなす、大にして虚空比すべからず。通じてすなはち水月に似たり。其の大其の應世の識知を以て、分別思察するが如くにはあらず。聖智よく知る、而も無知なり、無知にして知る、此の故にかざるどころなし。此の如くの佛身、萬有に融涉して芥塵も佛ならざるはなし。この佛智にあらゆる萬差に法義をとまふ法とは、もの、理となりて義理分明に別れ、正通直明なるの義なり。かるが故に事理異同みな通じて、法といふもの、のりにならざるをば、法といは

す。法に善悪智慧是非の分あり。ひまこの佛覺にある法は、善智慧等の法にして、惡愚非の類にはあらず、戒定慧等の菩提分法なり。又此の佛智に寂滅清淨、忍辱慈和の義あり、この義を僧伽といふ。この覺の義、法の義、忍の義、たゞ一菩提の性なり。一菩提の中に三義あるをわかつて三寶とす。此の別つと云ふは、もとよりとなへて炳著昭明なるをいふ。人情凡智の分別するところにあらず。水中の波、火中の焰の分不分をもつて知るべし。これ一菩提の分別なるを以て、もとたゞ一體なり。故に一體三寶といふ。又佛の在世には、釋迦世尊を佛寶とし、八萬の聖教を法寶とし、陳如迦葉をばじり、一切剃髮染衣持鉢行乞のものぞ、僧伽とす、これを現前三寶とす。佛の滅後に泥瓦木金および彩畫の像を佛寶とし、八萬の法藏を法寶とし、剃髮持衣修道のものを僧とす。これよく佛法僧の遺跡をなし、これによりて如来の聖法おのづから惡世に傳はり住持する故に、これを住持三寶とす。此の如く三種の別あれども、信人の歸心するによりて、その功德は平等也。歸依の心歸なる時は、威もまた疎なり。いかにとならば、諸法は眞實の相なり、我れ眞われはかの眞にかなふ。かなふ時は、おのづから靈感至る。衆生の心水清きときは、菩提の影、中に現するの運にして、眞法無性なり心の眞實に隨て應わり不應わり。このもるに三種の三寶は功德

〔觀世音菩薩〕
 曰。作摩生法。聞
 聲悟道。見色明心。
 緣起曰。觀世音菩

同等なり。諸法平等、無有高下なるを、只た人の心情疎濶にして、應の有無をいたす。常の小伎を學ぶに、心もし疎忘なれば、伎なることかたし。知るべし、諸法はわか諸法なり。われはすなはち諸法のわれなり、われと諸法と唯是れ水波のわかるなり。水波の我は即ち三寶●正體なり。三寶はすなはち我らが全體なるを知らば、應せざる三寶あらず。そのよく三寶の正體をしるを歸依の道理とす。歸依に別路あらず、たゞわが正體にかへるときを正歸依とす。我を知らず只た歸依の名のみ思ふは、正歸依にあらず。正歸依なるとき、われこれわれにあらず。我にあらずれば彼れにあらず。かれとわれと二もまたなし。このなしといふをわれとしかれとして三寶たつ、歸依たつ。たてはいまの三寶あり。歸依ありてひとしく無上甚深微妙法なり。歸依の第一義は、別の容儀にあらず、五體投地して一心頂禮するなり。一心禮恭は、能禮所禮、性空寂なり。性の空寂なる、必ず自心、他心、體無二なり。無二とは合體の儀にあらず、自他の自他といふを無二とせり。これ分別思念のなすにあらず、自の全生全活、これ他の全體なり。全體とは、觀世音菩薩の鏡をもちきたりて買ふとこの胡餅饅頭なり。饅頭の點出點入、これ能禮所禮の禮儀なり。この點出入の道理を辨究するに、かならず鏡をもちきたりて買ふなり。その鏡財を使用するに、あらば

釋。將從來買胡餅。放下手曰。元來於。是便明。
〔拄杖子〕。芭蕉和尚。示衆曰。爾有拄杖子。我與拄杖子。爾無拄杖子。我奪爾拄杖子。
〔竹篋子〕。首山念禪師。拈竹篋。示衆曰。汝等若喚作竹篋。即觸。喚不作竹篋。即背。喚人且喚作什麼。

おたへたはなくんばうばいんといふ參禪あり。この參は拄杖子より傳へ。竹篋子よりまなび。混身より請じ。脚下よりいづ。しがあむとはなし。沒蹤跡のところ。真藏身なり。すでに沒蹤跡。真藏身ならば、いづれのところにあはんといへば、御標横擔不顧人。直入千峰萬峰去なり。この入峰の道を得てより、泥牛入海無消息。碧眼胡僧空面壁。沒蹤跡。真藏身。不知古屋生荆棘。もしよくこのえをるを知らば、一歸依のとき三歸依全く、三歸依又た一なり。三二の會をなすこと勿れ。畢竟如何。三十棒。

三歸依増語終

岸江小語

指月禪師

三界は心より生じ、眞法は識よりなる。心と識とは、もと一物なれども、心に事を生じ、其の事あきらかに分れて、思ひどる時を識といふ。此の心識の見聞に涉りて、善惡の形をなすに隨ふて、身になし口に云ひ、意に思ふをもて、其の習ひ自ら身口意にそみて、作す所の業、後のたねとなり、つゝに善惡の果報を感ず。みな己れより出で、己れに還るのみならず。是の故に惡をやめ善を勤めて、苦を免かれ、樂を得んことを教ゆるは、苦を厭ひ樂を欣ぶの心、人常にある所なるが故なり。若し又道を修し、心の本を明らかめ、身口意ともに水月鏡像、夢幻空華の理を悟り、三界眞法、悉く空寂にして、我人壽命みな不可得なりと知るに至りては、苦樂に於て欣厭あるべからず。然るに苦樂忘れ難く、欣厭棄て難く、見聞に隨つて常に動搖するをもて、三界眞法永く止むことなし。其の止まざるは、深く我人に著するが故なり。其の著は、心より起る。是の故に心の不可得を知れば、我人の取るべきなし。我人をとりめされば、都て憎愛喜憂を起すべきなし。憎愛なければ、三界眞法の生ず

べきなし。凡そ我人より憎愛に至りて皆不生なれども、心驕妄に起り、種々に分別するを以て、種々の法起る故に、先賢も心を修むるを初めとして、凡情を盡くせ、別に聖解なしと云へり。然れども心を修むること易からず、よき師をもとめ其の教を受け、佛の説示を本とし、餘の書籍をすて、唯一筋に佛道の眞實なる義理を知り、都て世間の俗事を棄つべし。俗事は心を惑はし煩惱を生ずるの本なるを思ひ、假初にも世俗の事に交るべからず。其の事多しと雖も、本と爲る者三あり、凡そ人の迷ひ易きは欲なり。欲の中に尤も懼るべきは、食と財と色となり。食は日々三時にあることにて、味を好み擇ぶに至りては、財をへらし人を勞し、光陰を虚しく過さし、多くは病を生ず。唯値に身を支へ持つ爲めにして、好きにも惡きにも増減を爲さず、藥物を服する如くの教を守るべし。財は貯へ積て、多く増盛せんことを思ふべからず。財多きは累多きとの教あり。在家にすら道を知る人は此の如し、况や佛の家を離れ身を空しくして、解説の法を教ゆるをや。色の人倫を惑はす、財食よりも甚し、身を棄てて名を汚し、恩に背き義を忘れ、恥を顯はし恨を結び、身を屈し人を懼れ、狂て偽りに陥り、遁れて正を失ふ。其の咎數るに餘りあり。此の三のうち食は輕じ、財色ことに重し。此の二つのうち財は尙はなけうつと雖も、色とは棄てず。是れ則ち

「忍の徳云く」佛道教經に出づ。

欲の常に身を惑はす者なり。此の餘の欲は數の擧るに暇なし。瞋は欲の如く、常に多からざれども、其の起るに至りては、人を傷む事を害し、遂に身を亡ぼす。瞋には後の惱みと思ふの教を知るべし。佛の瞋を誡め慎しみ教へしこと、尤も慙懃なり。忍の徳は、持戒苦行に勝るといふは、能く瞋りを防ぐの辭なり。出家の人の瞋るは、其相應は非ず。身の無きものを悟りて、一切瞋るべからず。癡は常に物事にあるところ、迷の本となり、貪欲瞋恚、みな癡より生ずと知るべし、之を無明といふ。此の無明は、何時より有るを知らず、凡そとなりてより以來、無量の惡は、癡を本とせり。其の本より有るは、根本無明といふ。今日逢ふ所の事に觸れて有るは、始より有るを本として起る故に、いろ／＼分れて有れば、之を支末無明といふ。支とは事毎に分るをいふ、末とは後に起る。此の本末の無明を共に合せて癡といふ。大凡のこと、求め願ひ惜みするは貪に入る。我意に迷ふて惜み恨み拒みさみるす類は瞋に入る。正を味まし邪に陥り、理の有る所を掩ひ癡し、横しまに狂けて理を取らぬ類は癡に入る。此の三、よく本心の正命を失はしむる故に、三毒と名づく。三毒もどより外に有るに非ず、本心もろ無うして迷ふて以て癡となり。癡に覆はれるが故に、求めまじさを求めて貪となり。迷ふまじさに迷ふて瞋となる。然るに此の三は、我心に順べ

は貪となり、進ふときは瞋となり、達ふ事の理に暗きは癡となる故に、向の物によりて生ずる悪なり、故に深しと雖も勢ひ弱し。此と俱に無始より諸の煩惱を起す本は五見なり。五見は、一に身見、これ一切衆生どもに此の四大と五陰と皆假り集りたる空相と知らず、賢愚尊卑どもに此の身を執して、我身と思はざるはなし。禽獸の愚昧なるも、己が身を執して著相する習ひ、心猛利なること諸見を超えたり。唯我と我所との著見より貪瞋を起すことあり。故に我見とも云ふ。二に邊見、邊はかたはらと云ふこと、一邊にかたよる彼の諸法に於て見を起し、諸法は有なりとし無なりとし、或ひは亦有亦無とし、或ひは非有非無として、諸法を一邊に見る。大凡そ一邊の見は、皆此の中に在り。三に邪見これは諸法に因果明歴なるを撥無して、因果は無きに極まるとおもひて、惡を懼れず善を勤めず、心に任せて非爲をなすの類なり。四に見取見とは、右の邪見邊見を正理と思ふて、眞の教めれども曾て受けず、只管己れが見る所を善とするなり。五に戒禁取見とは、世に有る所の苦行等を眞とし、身に灰をぬり髪をぬき、赤裸にして日に炙られ、火を焚き身を焦すの類を正行と思ひ、非道を道とし、雞狗のまねして落ちこぼれたる穀を拾ひて喰ふの類を生天の因とするの類、是れみな見の過ちより起る。此の五見もとも三界六趣を免かれざるの基なり。

り。此の如く五見三毒あるに、人を慢じ己れを高ぶり、我を先とし見を憑み、總て正道に赴かず。設ひ善き教をも、已見と疑に覆はれて正理を疑ひ、心に信を起さず。此の五見三毒慢疑を十使の煩惱とす。是れ有情の無量劫來生死の中に離れざる惑なり。是れ亦外より來るに非ず、心に迷ふて生ずる者なり。是の故に心の過惡なりと知りて十使を去るべし。然れども之を去ること易からず、晝夜つとめて讀經坐禪し、心の惡を去り善を生じ、終に善惡どもに忘じて、妙菩提を得て涅槃に至る。而も是れ無量生を経て成るの修行なれば、一生二生の能くする所に非すと云ふは、佛道の常法なり。而るに今の生に後ば如何なるものと分るべからず、今時に於て、三世に別異なき修行をなし、凡夫にして諸佛と同じ身心を得んと思はし、此の生涯の護持を知るべし。此の生に佛行を行するを沙門と云ふ。此の生の行處を捨て、徒らに後世を願ふと云ふべからず。他力を憑む今の心は、是れ自力を覺悟するときば、往生は佛の先にあり、死して後に遠き他國へ往くと思はんより、今の生きたる時の息を數へ、此の身は如何なるもの、此の心は何ぞと工夫するに、身も心も即空なり。不可得なれば、不去來、不出入にして迷悟といふも、唯いへば聞くの名なり。言ふ者すでに無色聲なるも是に、聞く人さらに無眼耳なり。三世心不可得なるのみに非ず、三

世身も不可得、三世も不可得にして不可得と云ふも、また不可得なり。故に出家沙門は、今も何時も願ふことなく、身も心も留むる者なく、生死をも惜むべからず。涅槃をも願ふべからず。我れを見ず人を見ず、念佛するとき都て他念なしと云ふは、佛をも思ふべからず、我れを見るべからず、たゞ向ふ處の念、一向に稱名とともに無生際に入り、諸の分別なければ、三世の分隔なく、心と佛と衆生と不二にして、一念即生十方に通達す、而も思ひ設けて然かあるに非ず、此念の雜亂なきに於て、萬法みな答あらず、凡夫なれども凡夫に非ざるを以て、能く諸法に融通して、千差萬別悉く一念となる。此の時に於て十方世界に別の身心あらず、唯光明の一念にて、前生後生みなながら此に收まる。是れよも後は時々心に心光發現して、昔の六道四生と見しものは、同じく吾が身心にて唯一光明となる。是故に出家といふは、發心剃度より以來、すでに三界の果報をいで、四生の身を離れ、十使十惡の障碍を免かるゝをもて、今この身心は男に非ず女に非ず、則ち本來空の人體にして、見聞覺知する所には是非邪正得失の妄見を起さざるは、則ち是れ本來の面目なりと知るべし。既に此人ならんには、在俗の情識を免かるべし、是れ生々世々に習ひたることなるをもて、易く棄て難し。初めに此の身は不淨より生じ、不淨より養はれ、不淨に住し不淨に終る。

常に寒熱飢渴に苦しみ、住所より人事の交接に至りて、皆心に適はざることを觀じ、身の愛を免かるべし。只よく不淨を知るべし。既に身の不淨を知らば、身に於て受くる所の事を觀すべし。凡そ世間の法の身に受くることは、苦ならずと云ふことなし。設ひ親愛の交り心へだてぬ物語り、絲竹管絃歌舞艶色の耳に好く眼に悦ばしきも、はてはみな苦なり。樂と云ふことの苦に替らざるはなし。既に苦なりと知らば、樂を好むべからず、樂の境は迷ふとき、早く苦に替るべきを思ふべし。斯く身につき事につき、迷は何より出るぞとならば、心の見聞に觸れて、善惡の替るに依りて、昨日は深く愛せしも、今日は疎くなりて、思ひし事の言ばにもかわすはとなるも、皆跡なき空の煙立ちかはり消えぬく習ひなれば、心といふもの總て憑むべからず。親じきとき疎き時、求むる時捨つる時、何時の心か同じ様にて持つべき、始めあらずと云ふことなし、能く終りあること少なしと云ひし古き辭、まことに違はざるなるべし。心の定めなき如く、萬のこと亦頼むべからず、昔はいと貴とかりし、今あさましく見おとさること多し、千代萬世と祈り祝ひし幸ひことと思ふには依らず、朝に移り夕に換はる、山河の高く深きも、崩れて低く埋み淺くなりゆく。況して人の作せること、何か祈りしまへに持つべき。石の扉も朽ちぬるものを、なほ久しく變らぬ

【身受心法】身は不淨なりと觀じ、受は苦なりと觀じ、心は無常なりと觀し、法は無我なりと觀す、之を四念處と云ふ。

【四聖種】後に委出す。

主と思ふべき。總て唯主となりて久長なる法はなし。身の不淨なるを知るより、凡そ受るはせの事皆苦なり。心は元より無常なり。あらゆる法は、無我なりと觀し、此身受心法の法の四を念とし、皆虛妄不實なるを知るべし。之を知りて彌々道を勤め深く入れば、身受心法の迷は、直に悟となりて、一切諸法の本來空寂を見る。不淨を知る時、本清淨なり。苦を知る時、本樂に入る。無常を知る時、本常住に還る。無我を知る時、諸法の實相を見る。是れ始めて修行するの功を得るなり。此の深く入るに涯りなし。一二の得處を善しとして、見に陥りて法を輕じ、人を悔づるべからず。無量劫に修行を積みたる菩薩も、一時の見に誤り、法を忘れ行位を退くこと、佛の深く誠め置かれし所なり。唯佛道の習ひは、深く入ればいよいよ深く、遠く到ればいよいよ遠し、何時までも限らず、唯精勤して修すべきことわりと知るべし。既に身受心法の空寂無爲なるを知らば、先づ此の生涯のうち、法を勤め行ふの常を知るべし。佛子の行處多しと雖も、勤め行ふの緊要は三つなり。讀經、坐禪、勸化、これ常の三法なり。此三の中に四聖種四安樂等の諸行、自ら具はる、廣き言は經論を讀みて知るべし。讀經はたゞ文に對し字を讀むには非ず、經に説示する所は、皆是れ三世諸佛の身心にして、諸佛の智慧光明なりと知り、經を讀むは佛面佛心を見るとき知

【四安樂行】一に身安樂行、二口安樂行、三意安樂行、四に智安樂行、これなり。

りて、見るごとに燒香散華禮拜恭敬し、眞實心、至誠心、精進心、不妄心、專心、淨心によりて、文を讀て誤まるべからず。義を見て世間凡情の計度を起すべからず。疑はしきものは明師に問ふべし、明師は稀なりと雖も、心に誠ありて尋ねば、明師なき事なし。たゞ利欲に深く、瞋り多く俗事を好む人は、邪師と知るべし。然れども其の人若し能く經の義理に通じ、佛道の談論を好まば、其惡しきを取らず、唯談論の善きを取るべし。是れ人に迷ふて道を學ぶ習ひなり。世に徳の聞えあれども、文義に暗き人あり。それを唯徳を慕ふて暗きを誇るべからず。徳義學問よく備へたるは稀なり。古き衣裳を用ふるに、よく見て汚れたる所の破れたる所を去りて、好きを取るといふは、佛の教に明かなり。斯く誠心に經を讀み義理を知る時に、我心に本より具へたる妙法顯はれ、悟り出て道義外より來るに非ず。本より吾が心に具へたる者ど知り、此の心を以て諸の道理に通すれば、又自他の争ひなく、即心自性の佛見也。我心の然るが如く、一切衆生皆是の如し。衆生本より他にあらず、皆吾なり。吾なるときは又人なり。人と我と互ひに立つる名にして、自他人の必定すべきにあらず。唯無始より以來、人我の見によりて自他となる。設ひ佛を佛といふも、自他の迷ひなり。自他なきときは、別の佛なし。是の如く見るか如きは、是れ讀經

の力なり。是れを本として佛道を修すべし。坐禪は、經論に説く處は、古人の説に解釋多し、傳授も區々なり。唯佛の正意を尋ねて一行三昧ichijusanmaiを修すべし。是れを王三昧と名く。今坐禪を修するには、餘縁を擲け捨て一心に坐を勤むべし。坐を習ふ始め、先づ心に決定の地を知るべし。決定の地とは、思ふ處佛を求めず、諸法の是非を見ず、心に尋ね見聞に拘はること、本來不思議なる道理を究めて、十二時中異心を生ぜず、法の有無淨穢を問ふことなく、坐時の如く行住の時、唯一如にして身心全く二途に行かず、一切不思議なるべし。不思議は心の全體にして、我れも知らず。知らずと云ふは、總て諸見を生ぜず、取捨する處なし。雲行き水流れるが如く、唯是雲行なり、水流なり。外に道理なし。此の時、心、三世に移らず、見、萬法に屬せず、十方に障礙なく、四面に對縁なし。我れ是れ我れに非ず、一念の如く一時も然り。一時の如く千年も然り。塵劫の去來悉く然らずといふことなし。然る所以は、一心もとより有無縛脱、迷悟の分別總て無し。唯六根の境に逢ふて思量計度を起すより、諸法の形影を見る。然れども此の見る處、かつて定實の妄といふものおらず。妄も不思議不可説なるをもて、諸相は一相なり、一相は無相なり。無相は是れ諸相のまゝなるが故に、今の迷人これ本悟の人なり。迷悟第二人なきを以て、一人も亦不可

得なり。人すてに然るか故に、萬法不可得なり。是に於て生死の際限なき、是れ涅槃なり。涅槃の寂滅なる、是れ生死の正體なり。今の生死、本より憎むべからず、唯妄見の人憎み厭ふをもて、解脱の法を説く。生死不可得の故に、解脱不可得なり。解脱不可得の故に、生死不可得なり。二すてに不可得の故に、不可得も亦不可得なり。是を以て諸法皆不可得を身心として、生死去來、修行證入す。是れ皆不可得の可得なるものなり。不可得なれば、總て得ざるべしと思ふは、世間の俗見なり。然る故は一切不可得は、則ち是れ今日の可得なる故に、不可の義理を出て、生死中に坐禪するに、欲界定に非ず、色界定に非ず、一切の法を坐斷して、未生以前の人なるを以て、憶想妄見、菩提涅槃、すでに此の坐中に混然たる是れ坐中の大用現前なり。然るに坐禪するには必ず身儀調養あり、心識諸縁の護持あり。凡そ坐禪するに、先哲の教つよさに備はれり、尋ねて知るべし。其の中日用を云はば、先づ食を節量して飽満すべからず、然かも飢渴して食念を生ずるが如きは悪し。故に節量は飽飢の中庸を取る、食物は魚肉等は云ふに及ばず、總て五辛臭穢の物を喰ふべからず、身心に害あり。在家の人多く辛葱を食すれば、惡瘡等を生ずるを見て知るべし。唯五穀種菜を食すべし。食を節量して去來行歩を止むべし。常の行歩も靜なるを善しとす。

其外總て事縁を省略すべし。事縁多きは禪の害也。既に縁を省せば居處閑寂なるを求むべし。人多く言語喧しく、牛馬の去來繁く、總ての物音多きを去るべし。能く靜なる處を得ば、坐處に柔なる物を厚く敷いて、坐下いたまざるを要とすべし。家は夏涼しく冬暖なる處をよしとす。古人の樹下石上に坐せしをば、初心の道心堅からざる人は、學ぶとも堪え難し。是の如く住處坐所をよくして坐をなすに及で、坐褥を安じ靜に壁に向ひて褥上に坐し、背骨の下、膝の下を平かにし、身を直にして前にくゞまらず、後へ仰かず、左右に傾むかず、耳は肩に對し、鼻は臍に對し、右の足を左の股の上におき、左の足を右の股の上におき、足の指のさき股のわきと齊しく、促まらず緩くせず、右の手を仰のけて、左の脛の上に當り、右の手を仰のけて、左の掌の上におき、身を左右に搖ること二三べんして、口を開き息を吐くこと二三べんし、眼は半ばに開き、舌は上への脰を支へ、口を塞ぎ、息は鼻より通じ、總て動くことなく、聲を立てず、鼻を鳴さず、口を鳴し動かさず、寂然として龍の蟠まりたるか如く、唯靜なるを善とす。時に於て心に一切を思はず、兀兀として總へて不生不死の境界に入り、不思議なるべし。正坐禪の大方に傳へて、正備とするは是れなり。坐禪は他の道理すべてなし。此の生死の人にして生死の關を超え、寂靜の形にし

て寂靜に沈まず、世に在れども三世の分別なし。若し能く此の處を知る時は、萬業のうち獨露身と云ふべし。上に云ふ讀經坐禪の理をさとし、之を人にも勸め教へ、此の道に入らしむるは勸化の道なり。然るに勸化衆事と云ふは、唯教を作すのみには非ず、出家の本より一物もなきを以て、衣食住處よりして、幾許の道具に至るまで、皆入に乞ふて資具の用に備ふべし。然るに出家は道に用ゆるを以て、名を道具と云ふ。在俗も之を習ふて調度をさして道具といふ。然れども道の具には非ず。ただ出家の云ふに習へり。今出家として用ゆる道具なれば、在家の百あるをば、唯一にて事足れりとすべし。是故に百一の法あり。只よく少欲知足を守るべし。出家は十三資具、或は菩薩に十八物の佛制あり。此の外に多くの調度貯へんは皆非法なり、毒蛇を貯ふるがごとし。遂に法の身命を破る、悲むべし。末世に沙門と稱して、多く世財を貯え、日夜これに勞煩して人と争を起し、若しくは命を失ふ。是故に道と思はん人は、唯物すくなく事すくならんことを願ふべし。讀經して大道の理を知り、坐禪して眞法の至る所を知り、是れを人に化益し、其の功をもて、物を得て身命を助け、道を修せば、理に於て耻ることあらず。又四聖種あり、此の四を學び行ふときは、速に佛道を得るもゑに、聖の位階を究めぬへき種なれば種といふ。一には少欲、

それ出家は物のなきを甘んじ、無きに事欠かずと云ふ道を守るべし。設ひ事欠くとも恐ぶべき身なり。故に多求多欲を制す。二に知足、もの、有るを足らすとして、多く求め積み貯ふるは、世間に云ふ賢者にだに及ばず。況や出家入道の人不足なることを恐はざる事あらんや。曲^レ脇^ヲ爲^シ枕^ト、あどはすべし。三に單三衣は、身を掩ひ寒を防ぎ辱を塞ぐは衣服なり。五條七條を常の用とし、或は法事、或は市中、城都へ出づるには、大衣を着すべし。大衣は九條より十一、十三、十五、十七、十九、二十一、二十三、二十五條に至るの九品あり何れにても縁に隨ふて、九品のうち一品を貯ふべし。必ず二十五條を勝れたりとすべからず。九品はいつれも大衣なり。五條安陀衣^{あんたゐ}これは作務の時用也。道路の遠きに行く時、法用の時は、大衣を着る、常に食時坐禪の時用ゆるは、七條、鬱多羅僧^{うつたらそう}と名く。安陀衣とは天竺の語、此方には作務といふ。鬱多羅は入衆といふ。大衣僧伽梨^{たいいそうがら}、此方には入衆落とも重複ともいふ。三衣の翻名は唯義をとる。此三衣を用ひて餘衣を貯へず。是の外に下裙^かあり裙は在俗に有る故に、法衣の數に入らずと雖も、其の制法あるをもて、此れもまた法服と知るべし。四には樹下坐、唯杖葉ある樹の下に居て屋宅の設けあらず、修理の累ひなし。去來に關戸扣門の勞なし。閑人到りて我を訪はす、誠に無爲安樂と謂つべし。此の四聖種

に異説あり、未だ一種を出でず、然るに今時の人、四種を能く知りて、常に小欲知足をば勤め行すべし。單三衣、樹下坐は、不丈夫の行する所にあらず。十八物の制、まことに事にことたれり。是等によりて出家の本志を立て、設ひ檀那ありて施與豊かなりとも、不用の物をは、辭して受くべからず、唯常に此の身の無常を觀し、一切食を起さず、瞋を懐み愚を覺悟し、此の身空寂の本を知るべし。既に空寂を知れば、萬法みな如々にして、去る事もなく來る事もなし。この故に諸佛の出世とて此處に來相なし、入滅とて彼處に去相なし。來去すでになければ、常住にも非ず斷無にも非ず、唯我が坐して端然たる面目のみなり。見色聞聲、よのつねに火はも水は流る、外に言語なし。生れし時一物なし、死の時又何かある。出家は出家の日既に三界を出で、輪廻の本を斷す。この故に此の身の世に在るも曾て在るに非ず。唯久しき業縁の起るが故に、業縁に隨ふて世の衣服、飲食、住處を用ゆるなれば、三衣一鉢等の法あるに任せて、身命を安く養ふべし。物の多ければ菩提を妨ぐ。出家して無一物の安樂を知れば、出る息入る息、これ南無阿彌陀佛。とまの下こもの上、これ安養淨土。寢て起きて明かし暮らすは、誰の心にも具へたる五劫思惟なり。人を救ふ阿彌陀も、先づ我れを善くして後に救ふ。我れを善くせずして妄りに人を救ふとい

ふことは、十方世界になきことなるべし。

上件の法語、淨家の尼衆智尊、智音兩尼の垂示をこふに依て、これを書して授與し給ふ。

岸江小語終

身知夢

指月 禪師

世は實なきむだし名の。後ばむとなきものなるを。迷は人の心にて。したしなあり、あまきわり、愛するからにまた悪む。さのふの雨を、今日は風に聞くなれば、何をかま之とせし。何をかいつわりといふべき。およそ世の中のこと、求め願ふことはかなはず。うとみさるふことは、日々は目に見え耳に聞え、昨日も今日もこれぞと悦ぶことばまれにて、明日はとおもへて、明日もおなじ世のおなじ人なれば、心こそまねおなじさるべきことのみいでさて、是れまでといふ限りは知られず、山には山の苦みあり、海には海のくるしみあり。天地の大なるも、終にはほろぶ時あり。まして山の高きはくづれ、海の深きはかわき、定めかたし實なきは、世のありさまなり。天子のいとも高き位、賢名のいづか無き世の人と問はれ、三公九卿諸侯の威勢高く、また福祿おほきも、おなじくなき世の人となれば、鬼のがすに入らぬいはたや其れより下たれるものをや。すべて世上のことば、善道はずすなく、欲と眼と愚とのみおほく、邪見を主として、日夜に利をあらそひ、我を逞ふするの

身知夢

みなり。たゞ今以鴉鳥の舞風を東西へ飛びありき、南北にかけひ争ひ、兎に角にかの腐鼠をとりおふて、互に樂むべき林をすて、得りなき空を忘れて、誰彼を悪むのみあるがごとし。世上の俗心は多く、我れを立て利と争ふ、若し人心わらは早く世を遁れて、寂靜無爲の實道を悟り、七珍よりも寶なるもの、王位よりも貴きもの、天よりも自在なる身を知るべし。今の世間の僧徒は皆習はず、たゞ釋迦尊の法に習ふべし。すべからざることをなれば、王位を捨て國をばけ親族を離れて、諸法の實相を親とし兄弟とし、萬法一如を身とし、怨もなく親もなし、色をけしたる衣を着て、錦繡よりもうるはしき鉢を持して、万石よりも多し。是の身は身にあらす、虚空法界を身とし、一切の因縁は、繫れたる履のごとく、俗の樂む事は我れにまさる。威のあるものにあひて、大に恐れなやむのものととなる。たゞへは鞋の水に游て、能く樂をおもふも、蛇にあへば忽に樂しき必恐しき心となる。世上のごとく、皆かごのごとし。常に生を貪るもるに死を恐る。若しよく生も不生の本來人を知れば、今日の見色聞聲のうへ皆不生なり。不生なれば不死なり。生死は今世上の洪塵の起滅とおなじく。善にもあらず悪にもあらず、怨もなく親もなし。唯日夜、虛妄分別して生死と云ふ。日月の出入をのみ見れば、有る無と見えて、生滅なるかとおもへども、日月の本

體はかはることなし。人といふ形こそ、生死は有ると見ゆれども、人の眞實體は、すべて去來生死の分別なし。こゝを知れば、生死去來も實に生死去來にあらず。生死去來は、唯其の儘なり。分別にまよはされば、我れさへなは不可得なり。況や其の餘をや。雨や風や昨日や今日や、何にも言ふことなし。

身知夢終

誠殺生法語

指月禪師

およそ世に形ありて生れ出づるものは、其の本皆おなじ。佛も凡夫も、草木も魚鳥も、其の種はかほることなし。近くいへば、天を父とし地を母として生れ來たるものなり。もろに草木より魚鳥まで、いへば我が兄弟なり、いはんやあらゆるかたちは、おなじく土と木と金と火と水とにてなかりでたれば、此の形をばれば、もどにかへりて土となる。其の土又ものゝ形となる。色々の物のくさりて後は、色々の物の肥になりて、色々形をそだつるは、ちかく見わたることをわりなり。此の理は、佛の經の中にのたまへり。人の家に兄弟あるは、すすぐにちかきことをわりにて、誰れ知らざるはなし。一家の兄弟のごとく、天地は本よりひとつのいへなり。其の内に生るゝものは皆兄弟なり。此の事は、もろこしの張子厚といふ人、西の銘と云ふ書物にかきたり。然れば心あるものは、皆わが同族の兄弟にて、いづれをわくまきかたなし。しかるにおなじたねおなじ家にあるものをころして、すこしの内、口ばらまきをばばつたとし、よる書身をつからし心をつくして、魚をとりてたのし

みとおもふことは、本の天道にそむきたるにあらざる。又これをうりて、千金の主となる
 とも、吾がおなじたねとすれば、義理あり慈悲ありて、とりてこころすことはあるべからず、
 ましてわれ／＼の身の程いづばくならず、たとひ千年のよわひも、一日のすべることく、
 一度はつきすといふことなし。此の理を知らば、物を殺して身を樂しむことは、人のすゝ
 めにあふてもなすことあらんや。もとよりおろかにして、天道のおなじたねより生れたり
 としらす、一家のものをそこなふは、人とはいはれず。まして我がまじき命にくらへ見る
 ときは、何ぞ魚の心をしらすらん。人の心を知らば、魚の心をも知るべし。魚の心を知ら
 ざれば、人の心も知るべからず。人として人の心知らざらんは、なにといふべきことある
 なし。またく因果のことわりおそるべし。佛の説き給ふは、いく千万の数を知らず、唐の
 孔子といふ唐人の言に、俑を作るものは後ならんとなり。唐にて人の死したるとき、其
 の人のかたどて、木像をこしらへ棺の前におく。此の細工をして渡世とするものは、病な
 きはやりて人の多く死するをよろこぶ、是れ人をにくしと思ふて、死をよろこぶにはあら
 ねども、鬼も角も人の多く死ぬをうれしくおもふもゑに、其のむくひにて子孫をたやす
 りといふことなり。後とは子孫のことなり。しかればいきたるものを殺すは、我がみをこ

ろすとおなじことわりなり。其のうへに、吾が死後に其のむくひにより、長くさま／＼の
 苦をうけて、たすかることかたし。慈悲のために殺生するさへ、必ずかるさむくひをうく。
 況や口を食ふ錢を得んために物の命をとることは、身に悪事となるのみならず、我が父
 母まで、其のむくひをさるなり。物を殺すもくせになりてのことなれば、なほしてなほら
 ぬことなし。早く悪をばやむものと知るべし。神も佛もいきてこそ、世ををしへたまへり。
 まして其の外のもの死を願ふことあらじ。生ずるものゝならひ、かならず然り。昔より今
 に至るまで、心ある人は、死ぬ物の命を救ふをよしとして放生をつとむ。古へ雀の鷹にあ
 ふてさすをかふむるをたすけ、子孫四代まで高位にのぼる。又龜の子供にとられこころる
 を見て、ただ三百文ある錢にてかひどり命をたすけたるゆゑ、程なく地行の主となる。是
 れ殺せば咎にあひ、救へば幸を得る、因果歴然少しもたがふべからず。能く／＼このこと
 わりを悟りて、物の命をとるべからず、物を殺すは我身を殺すなり。故に悪をばやりて、
 天道の本を守るべし。物を救へば、我が身をたすかるもゑに、つとめて物の命を救ふべし。
 是れ天道にかなふがもゑに、天道のわかれみを得て、今生無事無難にして、後世もやまし。
 是のこと、かへす／＼のしむ守るべし。

延享四丁卯年九月廿一日。指月老衲書。誠於好殺生之人。

誠殺生法語終

天竺國有僧名曰... 誠於好殺生之人... 誠殺生法語終

白隱假名法語

解題

白隱禪師、法諱を惠鶴といひ、鵠林と號し、俗姓は杉山氏なり。貞享二年を以て駿州の浮島原に生る。はじめ單嶺和尚の得度をうけ、のち濃州にあそび、瑞雲の馬翁につかふ。さくはともなく、また去て越後の英巖寺にもき、性徹和尚の人天眼目會に參す。ある夜鐘聲を聞きて悟るところありしかば、性徹に見えて見るところを告ぐるに、性徹、機鋒鈍しとてゆるさず。時たま、宗格禪人なるものあり、正受老人に參せんことをすむ。こゝにおいて、ともに携へて信州飯山にもき、はじめて老人に見ゆ。老人は、手段辛辣なりしかば、つゝも屈せずして工夫し、つゝに豁然として大悟す。老人いよいよこび、古風を挽回することを勵しぬ。然るに辨道勇猛なりし故にや、肺および腦を病み、醫士の療をうくるに功なし。よて白川の白幽子を訪ひて内觀の訣をうけ、もはらその功を積み、もとのごとく健になりき。のちまた泉州にもき、洞上の單傳を壽鶴老人にうけ、而立をこゝにて終庵にかへりぬ。かくて享保十一年の秋のある夕、法華の譬喻品を讀み、砌のうちに鶯の鳴きて、

聲と聲の連れるを聞き、釋然として法華の深理に契悟し、はじめて正受老人平生の受用を
徹見したりきといふ。明和五年十二月十一日、大伴一聲して脱す。壽八十又四。坐夏六十
又九。後櫻町天皇、特に神機獨妙禪師と諡號を賜ひ、のち明治十七年五月、勅して正宗國
師の號を賜ふ。實に開世の老禪師なり。またその門より遂翁、東嶺等すべて十餘人の碩徳
をいだせり。

はじめに載せたる假名法語は、日ごろ歸依せる居士某に與へられし書簡なり。暹羅天笠は
禪師順世の後、道俗らに與へられたる書簡をわづめたるものなり。いまだかく名づけたる
所以を知らず。夜船閑話は、すなはち白河の白曲子にうけられし内親の談を説きたるもの
にて、禪病疲倦を救ふに功あらむか。また辻談義は、東嶺和尚の小序にいへるごとく、禪
師七十をこえて後に、初心のためにとて物せるもの、その他寶鏡籠記および施行歌のこと
き、いはゆる婆説紛々たる兒を憐れみて醜をわするものにしていづれもみな心切なり。

假名法語

白、隱禪師

示、某居士

道情も進み勇猛精進の助けにも成るべき法語等これあらは、書付候やうとの御事、毎度申
しこされ侍れど、馳せ廻りたる假名物の法語などは、年來見及び、聞き及はれたる事ども
に侍れば、今更書付け進するに及ばず、申し進すへき事に事を欠き、彼是れ見合はせ侍り
けるに、此の程珍らしき法語これありきと思ひつき、荒増し書載せ進し候。毫釐も添減こ
れなき物語に侍りぬ。少しも疑ふ心なく披見いたされ、勇猛精進の一助ともせらるへく候。
子細は老父去年の秋、雲水僧侶の頼みに依りて、當國松岡といへる處において臨濟録提唱
して侍りけるに、聽聞の細徒、東西十三里、北は甲州境を限りて、毎日聚會し侍りき。中
に就きて五六里西麓原と云へる處の人々、別して信心に聽受せられ、散筵の後に、三
五七人伴を結ひて晝夜おこたらず、辨道工夫心の長に勵み勤め、垂誠をなん請けて侍りて
んとて、老父が方へも見え來りける。夫々もま、此のありつる中に、山梨平何某と云ん聞

〔提唱〕 禪門にて
は臨濟のこゝを提
唱といふ。

〔一技半技の坐禪〕
技半一技などの語
ありて俗には坐禪
の本半本と云ふ

えける、その所にもおどらぬ豪家の主なるか、此の男ばかりは、人々諫め勸むれども聽
受けたる氣色もなく、坐禪などは存しも依らず。去る物語などする席をば、密かに運け
走りこそすれ、修行などせんずる者とは、つも見えさうけるほどに、人々も此の男には點
をなんかけて見限り置きける。その噂は老父か方へも折りたくは聞え侍りき。先月の二十
四五日の事にや侍らん、人を以て案内しけるは、菴原なる平何某にて侍る、和尚の臘筆を
けがし奉つらんとて推參申したるにて侍る、然るへく申しなして、見參に入れてたべなど、
用かましく聞えける程に、愚老も立向ひ、珍らしや不思議の來訪に預かり侍る、子細や候
ふへき、疾く入り給ひてよと答へければ、顔色の勇狀なる、言語の折目たかなる見えたる
ばかりに低頭作禮して告て曰く、人かまじき入室、事をかしくおぼさんも恐れあれど、平
か身に取りては、老師ならては點檢し玉はなする方も覺えなきま、河々の水かさおち、
渡頭の各々禁渡牌をひくを待かね、推參仕りたるにて侍る。扱ても去年の秋、松岡の大會
の後、我等の父老七八輩、互ひに伴を結び志を合はせ、晝參夜參、見る人感心するばかり
貴とく覺え侍り。斯りける中に御覽の通り日頃平か陋懶なる、工夫は存しも依らず、一技
半技の坐禪さへ、終にかままり居たる覺えこそなけれ、修行の望みなどはふつと最初より

〔坐禪の時續香
を焚くを以て斯く
云ふ。〕

思ひたえ侍り、下郎か心に竊に謂へらく、夫れ見性の大事は、禪門英傑の參徒、頭腦を鍊
り身骨指を燒きて、十年二十年するすら、少分の相應も得かたしとこそ聞き及ひたるなれ。
況や平か蒙昧昏愚なるをや。逆も仕課すまじきことを強ひて取りかへりて、果は人々に後
指さされんすらな。ひげに口惜かるへき。遂けまじき事はせぬにしかす。左ればとて空し
く光陰を送らんも、淺ましく腹ふくる、心地すれば、今日より密かに陰徳を冥々の中に積
み重ねて、以て子孫長久の計をなすへし。是れ平か分を知りたる悟なるへしと思ひ定めて、
夫よりは忍ひく、に徳行にもなるへき事どもを、毎日二品三品乃至十五二十に限らず、ぬ
けつく、いりつ勸進しけるほどに、人々の坐禪せよ工夫つとめよなど勸め導ひき玉ふは、結
句かたはらいたく、人のさる物語など仕出すわれは、隙を見付けて、通けく、侍りき。
實に時節因縁と云へることに侍らん、昨三十一日の晩かた用事ありて、さる者の許へなん
行きしに、主なる者、椽鼻の柱に後さまに寄りかへりて片膝立て、左の手をば、つゝ突さ
て、右の手に何某法語とかや云へる假名草紙の真中かひ掴みて、首打ち傾ひけ、如何にも
殊勝にあいらしげに聲つくろひして、前後を忘れはるはると涙ぐみ讀みて居たる、蟲隱走
り胸惡しかりけるか、さやつも亦人々の中間入りして、屋風引廻し秋冬味喰たる顔して

そら眠せたる下緒なるめり。筋なき後世物語を讀ませて、あつたら光陰を空しく送らせんまう。手頭似よりたる學者なれば、一所二所聞きどかめて打つて落し、吾が家秘傳の徳行に引き入れ、一品二品つゞも善事執行なはせたらんには、是れまた上もなき徳行ならめと思ひ定め、笑ひながら驚歩してさじより、軒端に腰うちかけて、落度おらは聞き出さんと、耳を澄し目を閉ち、手組して聞き居りけるに、彼の法語に書かれけるは、夫れ見性の大事は、二年三年にして打發するあり、又二十年三四十十年歴るもあり、また一生打坐して打發すること得ざるもあり。若し人精神を憤起し、目を張り牙關を咬定し、即今見聞覺知の性、何れの所にか在る、是れ青黃赤白なりや。内外中間に在りや。是非ノ見と、けすは置くまじぞと觸み進まをるとき、妄想の競ひ起ること、潮の湧くか如けん、此の時少しも屈せず、單々に進みて一人と万人と戦ふが如く去らば、通身汗流れて黒暗萬丈の大深坑に落ち入るか如く心身ともに打失して、呼吸の氣息も亦泯絶し去らん。この時に當りて大事を決定すること、睡夢の初めて醒むるかごとく、世に幾多の時日を歴るに及ばん。この故に起信論に曰く、勇猛の衆生のためには成佛一念にあり、懈怠の衆生のためには、涅槃三祇にわたると説き給ひぬ。時々思ひ出して、二炷三炷の坐を打し、或は規矩を定め

〔三〕三阿僧祇劫の略語なり。
 〔二〕二炷三炷の坐
 上の一炷半枝の坐
 座と同意なり。

て、毎夜五炷六炷の香を守る。是れ等の類をみな是れ懈怠の衆生と名く、傍はらより打ち見えたるは、如何にも殊勝は貴とく、自からも天晴懈怠せず退屈せずと思ふたれど、如何にせん、只た是れ命根断えず、たとひ恚怒にして三祇劫教を歴るも、見性は存しよらず、自救もまた不了なるべしと讀みの、つづくを打ち聞きて、心にひそかに思ひけるは、不思議のこともあらんなれ、この事も一日二日乃至三日の功勳にして、少分の相應を得るとならば、世に一鞭を加へざらんや、得力ののち、舊によりて彼の徳行を勤めたらんには、虎にして翼あるものならんか。若し人一日の功にして得るとならば、われ七日の功を積まば世に果さらんや、男子たるもの、思ひ立らる事を遂けすや置くべき、仕果さすやあるべきと、思ひ定めて宅に飯り、日の暮るゝを待ちかねて、一室を閉ち厚く座物を鋪いて、結跏趺坐して凝然として坐すれば、しばらくあひて妄想の競ひ湧くこと、八島の戦ひのごとく、九國の亂に似たり。此に於て精神を震ひて、妄念と相ひ戦ふ。たとへ猛將一騎にて數千騎に取り圍まれたらんに、大喝一聲二方を突き破りて、馳せぬけんを挑み闘むか如く、又万仞險崖の高山に登るべきに、半途にして突き落さるゝか如し、彼の者勇猛の氣力ありて、踏みしめ踏みしめ争ひ登ること、七八分にして突き落され、八九分に

して脱落する、突き落さるれば逆ひのり、逆ひ登れば突き落さる、此時二身の氣力を盡くして、觸み進むとき、覺はすころごとくとして苦み惱むこと積年の病にうめりか如く、眼を見張りて目蓋はなれ、齒をくいじはりて、齒牙碎け落すとす。忽然として大風の乍ら止むか如く、一鍋の沸湯に一杓の冷水を洒くか如く、命根截断する事、劫車の轂の切れで飛ぶに似たり。此の時に當つて大地黒漫々、是れ生なりや是れ死なりや、自ら都て分つこと能はず、呼吸の氣息一點もまた無し、生氣を打失するもの數刻、正に天明に到らんとする頃ほひ、俄かに大母指の陰々として、痛むことを覺ゆ、忽ち蘇息したれば、その痛み忍ぶへからず、是れは嚴しく定印を結ぶ故に、二指さへて指頭の痛めるなり。急に定印を解かんとすれば、四支すくんで動くことを得ず、涕淚流れて領に滴たり、兩眼開き張りて目たゞさすることを得ず、喜ぶ處は胸襟分外に清涼、分外に皎潔たること、雲霧を開いて旭を見るか如し。然りとはいへとも一點の所得なく一點の所知なし、是れ悟りなりや、是れ迷なりや、人々に對して一事の説くべきなし、たた何となく大歡喜の心のみありて、既に天明に到る、人々に對すとはいへとも、目瞠し口健忘の人の如し、家人且つ悲しみ、且つ怪みて、是れを問へともたた目を張りて是れを見るのみ、朋友來りて蹴鞠の場は誘ふ、平即

〔入事〕 開眼の接
御なり。

ち伴ひ行きて諸友の中に入れ、人事せず低頭せず、たゞ目を張りて癡坐するのみ、諸人みな怪しむ。自ら開へらく、誓て此度徹底の力を得ずんば、死すとも休せじと。日暮を待ちて再び又室を閉して兀坐す。妄想と戦ふこと暗夜の如し。舊に依りて齒をくいじはりて目を張り自ら開へらく、傍人ありて燈火を點して、吾が面を見なば、必す夜更のこととなるべしと。既にして單衣は相進めは、久しからずして再びまた彼の境に入る。出入の氣息一點もまたなし。前後截断し身心脱落して大死一番入静なり。天明に到ること、只片時の如し。忽然として蘇息し看來れば、天地一指、萬物一馬、上片瓦の頭を蓋ふなく、下寸土の足を卓するなし、此外何の禪道佛法があらん、覺えず阿なとして大笑す。歡喜のあまり道に來りて參禮するのみ。更に一句も和尙に對して呈露すべきなし。途中肩輿にて薩摩時を過く、邊は南溪の浩渺たるを見て、はじめて卯木國土悉皆成佛といふことを徹見す。請ふ師願はぐは點檢せよ。予が曰く、即今佛何れの處に在る。平即ち露柱及び庭階を自視す。予直に手を拍して曰く、兩掌相觸れて聲あひ、却つて後手の聲を聞くやと云ひて一掌を立つ。平が曰く、開得て分明なり。予が曰く、何を以てが驗とせむ。平即ち良久す。曰く、聞ふと息は即ち甚だ聞く、唯半片を開得たは、平即ち耳を掩ふ。予が曰く、猶ほ是れ未だ。